

平成27年3月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

3月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、20日(金)、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「平成27年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成27年度関東甲信越地方向け地域放送番組編成計画」について、説明があった。続いて、金曜e y e「いよいよ開業！北陸新幹線スペシャル～魅惑の旅へご案内～」についての説明のあと、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	高野孫左エ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

<金曜e y e「いよいよ開業！北陸新幹線スペシャル～魅惑の旅へ ご案内～」(総合2月27日(金)放送)について>

- 番組の冒頭で、観光と地域をテーマにしていることを打ち出していたので、それを念頭に置きながら番組を視聴できたことがよかった。

北陸新幹線の開通によって、東京からの日帰りが可能になり、今まで泊まりがけで訪れていた金沢、富山の観光はどうなるのかと思っていたが、兼六園などの紹介

で、宿泊することの魅力についても伝えていた。今後は、それぞれの地域で、宿泊と日帰りの観光客をすみ分けていくことになるのだろうと思う。

終着駅である金沢、富山の話題は豊富だったが、沿線の長野や群馬などについてはあまり伝えられていなかった。長野は軽井沢の動きについて触れられていた程度だ。長野県内でいうと、これから善光寺の御開帳などが控えており、北陸新幹線の開通で、どのように沿線である長野に観光客を呼び込むのか、県を挙げてかなり力を入れているが、今回の番組では、北陸の魅力にかなわなかったのかと思った。

北陸をよく訪れるが、富山や金沢まで新幹線が開通することについて地元の人たちに尋ねてみた。今までは身近な都会は京都か大阪だったが、新幹線が開通すると、東京に行くことが増え、文化や生活スタイルが変わるのではないかという話を聞いた。ワクワクしながら話す人もいれば、年配の方などは若い世代が東京に行くことが増えると地域はどうなるのかと心配している。新幹線の開通で地域の人の流れが変わることは想像もしていなかったが、開業後、こういった変化の部分も番組で取り上げてもらいたい。

地方と東京間のスピードアップだけではなく、長野・金沢間など、地方と地方の間もかなり近くなり、今のところはいいいこと尽くしだと感じた。

- スタジオのセットが地方公共団体の観光課をイメージしていることに視聴者のコメントで気付いたが、それまではなぜこんなところで話をしているのかと違和感があった。防災の視点で見ると、段ボールが粗雑に積み上がり、乱雑に置かれた書類など、見た目も安全性も問題がある環境に見えた。実際の役所をリアルに再現したいのであれば、キャビネットの上には書類でなく、北陸の特産品や文化的なものを飾ったほうが北陸の視聴者にとってもよかったのではないか。

ゲストは個性的で、北陸への理解が深く、どのコメントも北陸の魅力などについて共感できる内容だった。最初のゲストの話を聞くうちに、北陸の魅力がきちんと伝わってきて、もっと話を聞きたいと思うようになった。新幹線の開業を待ち望んでいる人々の代弁者のごとく、スタジオ全体からワクワク感が伝わってきた。私自身、富山を訪れることが多いが、そのたびに富山の人々が開通を待ち望んでいることを現地で感じており、そのワクワク感がスタジオでもよく表現されていた。

新幹線が開通することで観光だけが活性化するのではなく、人や企業を呼び込むための努力が必要、待っているだけでは駄目だというゲストの話は説得力があった。開通の興奮だけで内容を終始させず、その課題に取り組んでいる人々、団体、企業を取材していた点もすばらしいと思った。

新幹線の駅のない、佐渡や能登など新幹線とのつながりが一見薄そうなところにもスポットを当て、疎外感を持たせない配慮もNHKらしいと思った。

一方で、ゲストの平石和昭さんが話をされているときに顔が隠れてしまっている

ことが多く、ご本人にも失礼だし、見ている側としてもストレスを感じた。カメラワークのリハーサルも行っているだろうし、生放送とはいえ、正面から撮るカメラはあったわけで、切り替えることはできたはずだ。出演された平石さんもあとで番組を見て、悲しい思いをされたのではないだろうか。今後はそのようなことがないように配慮をお願いしたい。

(NHK側)

スタジオでは、トークを盛り上げたいということで、カメラワークを優先するよりは出演者とキャスターが自由に対話できるようなセットにした。今回は自由なトークを大事にした結果、平石さんがほかのゲストの陰になってしまうところがあった。今後の課題にさせていただきたい。

○ 全体的に楽しく視聴した。かつて石川県に住んでいたことがあるが、大きく様変わりした金沢の様子がすばらしく、楽しい思いで視聴した。京都と金沢を対比させる構成は興味深かった。NHKでは京都を取り上げる場合、よい料亭などを紹介するが、金沢を紹介した今回は、料理に関しては海鮮丼などに特化していた。金沢独自の懐石などの食文化についても、もう少し紹介してくれれば、さらに魅力が広がったのではないかと思う。特に金沢には、お茶屋街が3つあり、その奥に料亭があり、街並みから料亭に上がっていく雰囲気ですばらしい。そういうところもしっかり表現してくれればと思った。

○ 第一印象はガイドブックを見ているような感じだった。いわゆるストロー効果をどう排除するかは地域社会の大きな課題で、産業や経済に関しては本社を移転する、物流拠点に移転するという事例をきっかけに地域の人口が増えると紹介されていたが、教育についての視点が欠けていた。そこで生活する人にとって、特に学齢期にあたる子どもを持つ方々にとっては、教育という問題は外せない。企業の移転による経済効果を語るのであればそこまで踏み込んで取り上げてほしかった。

これまでインターローカルの意味がよく分からなかったが、3月14日(土)の「開業！北陸新幹線～つながる 変わる 動き出す～」を見て意味がよく分かった。これから生活圈や行政圏は範囲、広さが違ってくる時代を迎えると思う。各局が連携し番組を制作する、情報を共有するという意味で、今回の番組は実験的な番組だったのかと思った。後半のトークセッションはおもしろかった。熱く語る方と冷静に語る方の対比の中で行き過ぎをとどめながら冷静に分析をし、それを裏付けるエピソードを語っていく仕立てはとても気に入った。

○ 私は北陸に何度も行っており、東京と北陸間の移動時間が1時間短縮されたことがどれぐらい大きなことか身をもって感じている。新幹線が通ることによって失ってしまうものもたくさんあると思っており、そのことを気にしつつ番組を見た。番組の構成もよく、取り上げている話題も興味深いものだった。広域観光という視点、地方と地方がつながったということは改めて考えると当たり前だが、新鮮な感じがした。日本の地図が変化していくこともよく分かった。飛行機が点から点に行くのに対し、鉄道が通るということは面が伸び縮みし、社会に影響があることだとしみじみ感じた。ゲストの北村森さんのコメントは歯切れよく、よいキーワードがたくさんあった。足元に宝物がある、土地の方言を忘れてはいけないなど、鉄道が通ることによって平準化されていくのではなく、地方は地方の独自性を持ってこそよい結果になることをちりばめているのがよかった。また、冷静に分析する平石さんもそのことを裏づけるような方だった。ゲストのバランスがよく、話も興味深かった。

開通することに対して、皆が前向きで、よい点に焦点が当たるが、前向きになれない人も大勢いる。新幹線が通らなかった場所や、開通したことで消えてしまう風景などもある。そういうものにも光を当ててほしい。番組全体としては前向きな雰囲気であって、今はそれでよいと思うが、影になる部分、消えてしまうことにも目を向けて取材をしてほしいと思う。

広域的な取材はとても興味深いと思う。日本も交通網がこれだけ発達すれば県単位だけでものごとを語る状況ではないと思う。引き続き今回のような取り組みをしてほしい。

○ 新幹線開業の応援番組として大変期待して見たが、さまざまな情報が盛り込まれ過ぎていた。参加局からの紹介映像もかなり凝っており、情報を整理する側からするとどれもきちんと紹介しなければいけないという状況もあったのかもしれない。中継が何回も繰り返し挿入されたり、同じような切り口の観光情報がVTRやスタジオで紹介されたりするなど、若干番組の構成が不自然に感じた。

京都と金沢の比較はかなり徹底していて、現場の中継までこだわって取り上げていたが、最終的に効果的な仕上がりにはなっていなかった。もう少し時間のあるときに、意図が説明できるよう丁寧に取り上げた方がよいと思った。

生放送では、画面下に視聴者から寄せられたメッセージが紹介されていた。気楽なものからそうでないものまで、視聴者の実感が伝わってくる大変すばらしいメッセージが多く感心した。視聴者の力は侮れないと思った。

志賀町でクーポンを発行し、いろいろな戦略を打っているという話題や、軽井沢の結婚式のアプローチなど、これまで知らなかった話題も紹介されていて大変参考になった。

番組で地方を取り上げると、その地方は活気づき元気が出るものだ。番組を録画

し、しばらくは話題にもなる。今回のような、地方を意識した番組を多く作ってもらえるのはありがたいことだ。

北陸新幹線の開業スペシャルというタイトルからすると、雪国を走るための技術開発にまつわる苦心談や開業に至るまでの余曲折についても紹介してほしいかった。観光的な情報は、別の機会に継続的に紹介することも可能だ。今のタイミングでしか伝えられない情報に特化し、もっとシンプルに構成してもよかったと思う。

- 地方のよさが表現できていたというのが第一印象だ。北陸の観光や食文化などのよい点が紹介されていて、沿線から離れた佐渡、白川郷、能登の千枚田、里山、里海の話などこれまで気付かなかった話題もうまくかみ合っていた。

ゲストのトークもよく、端々に心に残ることばがあった。「新幹線は開業したがゴールではない、これからだ」「本物が地元の宝だ」「中央と地方のつながりを大切に」などのことばが印象に残った。生放送では、視聴者の意見も画面で紹介されており、制作側にとっては、大変な作業だったろうと容易に想像ができる。

軽井沢などの沿線の話もあったが、栃木県では東北新幹線が通ったことで、今まで宿泊で観光客が来ていた地域が通過点となってしまい、人が集まらなくなっている現状がある。上越新幹線が通った群馬県も同様ではないかと思う。ストロー効果の話も出ていたが、今は開業で注目されているが、時間がたつにつれ、中間の地域をどうするのが大きな課題になってくると思う。新幹線が通ると東京への距離感が近くなり、中間地域が通勤圏となり、仕事で新幹線を利用する人がどんどん増えてくるとは思うが、観光となると地元の意識をどのように継続させるかが大きな課題になる。交通網が発達することによって遠方に足を運ぶ機会が増えるが、中間に住む地域の人がどのように情報を発信していくかが大切になるという印象を持った。

- 新幹線の開通による経済波及効果が石川県は124億円、富山県は88億円という試算が新聞に掲載されていたが、経済効果優先の考え方が根底にあるような気がする。またダイヤの改正で、上越新幹線の本数が減るなど、地域によってはこれから疲弊するような感じがする。

よく伝わってくる部分もあったが、単なるご当地案内という印象もあり、グルメや温泉など既知の情報が意外と多かった。番組全体のトーンもハイテンションで、発言にNHKらしさがなく、民放と同じ感じを受けた。各県の誇る美術館や博物館、各県出身の芸術家、作家や歴史的な人物など文化面も紹介してほしいかった。金沢21世紀美術館は年間200万人もの入場者があり、美術館を紹介する番組が制作されたほどだ。

地図を画面右下に表示し、解説していたのは参考になる情報でよかったと思う。

- 冒頭で観光と地域というテーマを設定し、その設定で全体を構成したことは、旅行番組になりがちな民放とは一線を画したNHKらしさだったと思う。

観光名所を盛りだくさんに紹介していたが、能登半島の紹介のところなどは、千枚田やお祭りのいろいろな映像が流れるわりに、それが何かという紹介がなかった。観光情報を知りたい人にとっては物足りなかったのではないかな。何かしら工夫して、そのような情報も盛り込んだほうが、見ている方は参考になったと思う。

ゲストのコメントは鋭く、示唆に富んでいてよかったと思う。北村さんが「方言交じりの標準語はよくない」、平石さんが「ミニ東京化が進んでしまうとよくない」とコメントしていたが、根底にある発想は同じだと思う。地域の方にしっかり伝えてほしい話だと思う。

全体としては、どういう視聴者に見てほしいのかというターゲットの設定があいまいだと感じた。前半は首都圏の人に向けた北陸の観光情報が中心で、後半は地方の人に向けた企業の話や心構えという話だった。しかし番組のタイトルだけを見ると、観光に興味がある人に向けた番組のように見え、地域の問題について示唆を得よう、地域づくりに取り組もうという地方の人は、このタイトルをただけでは番組を見る気にならなかったと思う。意欲的に多くの情報を盛り込んでいたが、視聴者にしっかり内容が伝わるタイトルの設定、番組構成について、もう一工夫する余地があったと思う。

沿線県の取り上げ方について若干の偏りがあったと思う。長野は軽井沢を取り上げていたものの停車駅である飯山駅についてはまったく触れられていなかった。あの地域も野沢温泉があり、また4年前の地震で被災するなど、新幹線に対する期待が高いと思うので、少しだけでも触れられていれば喜ばれたのではないかなという感想を持った。

(NHK側) 貴重なご意見をありがとうございました。大変参考になった。今後ともご意見を参考に引き続き取材を進めたい。

<放送番組一般について>

- 3月1日(日)のNHKスペシャル「史上最大の救出～震災・緊急消防援助隊の記録～」は説得力がありとてもよい番組だった。みんなに見せたいと思って録画した。ときどき見て思い出したい。

- 東日本大震災関連番組について。3月7日(土)のNHKスペシャル「それでも村で生きる～福島 “帰還” した人々の記録～」を見た。川内村で帰村しているのは

高齢者ばかりだが、そこで生まれ、生活し、子育てもしてきた彼らの離れがたい気持ちがよく伝わってきた。帰村はできたが生活の糧を作ることができないなど、帰村して苦勞していることも伝わってきた。原発の問題は長引く重い問題だと感じた。

- 3月8日(日)のNHKスペシャル シリーズ東日本大震災「震災4年 被災者1万人の声～復興はどこまで進んだのか～」(総合 後 9:00～10:13)を見た。鉄道の91%が復旧するなどハード面では復興してきたという印象を受けたが、今回のアンケート調査で、心の復興はまだ進んでいないことが分かった。仮設住宅で4年過ごすことの大変さは、表から見ているだけでは分からない。目に見えない部分がアンケート調査から浮き彫りになった。解説をしていた元岩手県知事の増田寛也さん、こころのケアセンターの加藤寛さんのことばで印象に残ったのが、地方に住んでいる人は、住居と働く場所が常に密接した関係にあり、今回の津波で生活と仕事の場を一度に失ってしまった被災者が多いということだ。そして、そのことがより大きな打撃を与えている。阪神・淡路大震災では震災から2年ぐらいである程度先が見えてきたという話があったが、東日本大震災についてはまだ時間がかかると感じた。水産加工などの産業を復興し、操業を再開しても、今までの取引先は他社と取引を始めており、売り先が見つからないという状況があることも分かった。震災をきっかけに家族関係に亀裂が入ったり、今になって心の不調が現れたりするなど、表から見ていると分からない、現地の人たちの苦勞がよく分かった。

- 3月8日(日)のNHKスペシャル シリーズ東日本大震災「震災4年 被災者1万人の声～復興はどこまで進んだのか～」を見たが、復興とは何かを考えさせられる番組だった。アンケートを取ることによって、被災者の思っている現実が見える形で示された。震災を忘れないということに対する大きな訴求ができた番組だと思う。阪神・淡路大震災との違いを見ることで、都市間格差が生み出す問題について考えるきっかけにもなった。水産業を事例として、復興した被災者の現実の姿、そこに至る足跡も紹介していた。被災状況にかかわらず、あらゆる場面で日本が抱える少子高齢化に起因する需要の縮小は、一つの大きなテーマではでないかと思う。淘汰(とうた)というのは被災していようとまいと起こる。その中で、行政に頼るのみでなく、住民が自立する意識を持ってこそ初めて行政の支援機能が働くというメッセージも込められていたのではないか。アンケートという手法と1万人という数は説得力のあるものだったと思う。

- 東日本大震災関連番組について。3月10日(火)のNHKスペシャル 震災ビッグデータF i l e . 4「いのちの防災地図～巨大災害から生き延びるために～」(総合 後 8:00～8:43)は、購買記録やタンクローリーの動き方などのビッグデータを

分析した結果、分かってきた盲点、初めて知り得たことを紹介していた。ビッグデータの映像は分かりやすく、そんなことまで分かるのかと感心した。ビッグデータを活用し始めたのは最近だと思うが、非常に有効だと感じた。防災の専門家が番組の中で「防災とはイメージする力だ。それがなければわれわれは生き残ることができない」、「防災は希望が見えることが大事だ」、「何が防災、減災につながるのか、役立つのか」というと、それは情報でしかない」など重要な発言をしていた。データそのものを覚えていることは難しいが、考え方は心に残る。番組の中で、こういったキーとなることばを強調する工夫があれば、さらに印象付けられたのではないかと考えた。

- 3月10日(火)のNHKスペシャル 震災ビッグデータF i l e . 4「いのちの防災地図～巨大災害から生き延びるために～」では、震災当時の物流や購買記録を解析していた。当時はラップ類が売れたそうだが、水がないから皿の上にラップをかけて食事をしたり、窓ガラスが割れたときの寒さ対策に使用したため、そういうことは被害に遭わないと気が付かないと思った。これらのデータの解析を進め、これから起きるとされている次の災害時にどう生かすかが今後の課題になると思う。NHKの番組はそういう意図がしっかりしていると思う。データを解析することによって、災害に対しての備えや、起きたときにどういう行動をすればよいのか、広く周知できればと思った。

- 3月11日(水)のNHKスペシャル「“あの日の映像”と生きる」(総合 後10:00～10:49)は、震災当日の衝撃的な映像を見て、当時の大変さを思い出し、心がつかまれるような気持ちで見終わったが、その直後にNHKスペシャル「ホットスポット 最後の楽園 s e a s o n 2」の番組宣伝が放送された。もう一呼吸、静かな一瞬をどうして入れられないのだろうと思った。まさに3月11日で、震災関連番組が多く編成されていたと思うが、番組宣伝の種類にも少し考慮してほしい。見ている側の心の動きに合わせて余韻が作れないのかとこの日ほど強く感じたことはない。何か工夫を考えてほしい。

(NHK側)

番組宣伝の編成というよりも、そのような場合は、番組の末尾で余韻を作るようにしなければならない。制作者は、番組の後にどんな番組宣伝が編成されるか分からない。自分たちの責任範囲の中で余韻が必要な際には、番組の中で余韻を作るようにしたい。今回のご意見を参考に、これから番組を作るときには最後の余韻、話を転換するときの間などについて

て考えたい。

番組宣伝の編成は1週間ごとに決めている。3. 11の番組宣伝の編成の在り方は考える余地があったかと思う。

- 「NHKスペシャル」では東日本大震災の番組が3月7日(土)～11日(水)と放送され、改めて考えさせられた。4年たつと記憶はどんどん薄れていく。それを再認識させてくれた。
- 2月24日(火)の地方発 ドキュメンタリー「笑顔で生きる仮設住宅～震災4年 岩手・陸前高田で～」と、3月に入って「ニュースウオッチ9」でも一部伝えていたが、米崎中学校の仮設住宅に住んでいる皆さんが、それぞれに抱える問題はあるものの、笑顔で過ごしている様子が紹介されていた。彼らが集会場として使っているトレーラーハウスは私が設置したものだが、番組では私が米崎中学校の支援に行ったときには感じられないような、知りえないような活動の様子が紹介されており、集会場として活用してくれていることをうれしく思いながら見た。
- 東日本大震災関連番組について。3月7日(土)のいつか来る日のために「証言記録スペシャル 命を守る避難とは」(総合 後 5:00～5:44)は印象に残った。「証言記録」は時折放送されているので気になった回を見ているが、今回はスペシャルで津波の避難計画の策定指針に沿って、今までの証言を丁寧に一つ一つ検証し、教訓に結びつけるような構成だった。証言記録を集めること自体が大切だし、記憶につなげるという作業は意義があると思う。また折に触れ取り上げてほしいと思う。
- 3月10日(火)の特集ドラマ「L I V E ! L O V E ! S I N G ! 生きて愛して歌うこと」(総合 後 10:00～11:14)は、とてもよいドラマだった。3月10日ぐらいになると、震災の時自分がどうしていたか、強烈な不安や、緊張を強いられたことなどを思い出すが、そういう心情で見たのでますますそう感じたのだと思う。震災が多くの人々の心に喪失感を与え、傷つき癒やされないままであることを切なく物語っていた。原発の放射能は目に見えないため、より癒やしがたい複雑な傷を残していることがよく描かれていた。番組の中で、酪農家が汚染された牛に餌をやりつけ、「いつまで続くのか」と言うシーンや、タイムカプセルを掘り出しにいった男性がさりげなく線量計で放射線の量を測っているシーンなどに切なさがあった。高校生たちによる合唱のシーンでドラマは終わり、少しは生命力、希望を感じさせてくれたのは救いだった。このドラマの前に放送した「NHKスペシャル 震災ビッグデータ F i l e . 4」では、「防災は想像力、イメージする力」だと言って

いたが、そのあとに、心の復興について考えさせるこのドラマが放送され、心の復興にも想像力が必要だと思った。震災によって何年も緊張を強いられ、傷を抱えている方々が、こういった気持ちなのかと想像力を働かせることは、防災、減災、復興と深く関わっていると思った。

- 3月15日(日)の明日へー支えあおうー証言記録 東日本大震災 第39回「福島県郡山市～ガソリン不足を救え！臨時石油列車～」を見た。震災のとき、臨時石油列車が新潟経由で東北に行ったことは知っていたが、路線や車両の問題などさまざまな困難があったことを初めて知った。運転士の責任感や使命感、実際の運行準備の中での気持ちの変化もしっかり捉えた番組だったと思う。実際の運行当日に車両が坂道で止まってしまった本物の映像は見て驚いた。震災関係では、まだわれわれの知らないことがたくさんあるのだと実感した。
- 証言記録についてはホームページでアーカイブスが公開されている。大変貴重な資料であり、生かしていただきたい。ホームページをさらに充実し、地域や学校で防災教育の素材として使ってもらえればよいのではないかな。また、震災の時に何が起こったのか、正確に把握していない事実がたくさん残されている。原発の問題など現在進行形のものも多いが、事実として何が起こったのかをどこかの段階で1回まとめ、記録として残す番組を制作してほしい。この時代を生きた者として当日何が起こって、その後日本はどういうことをしてきたのかが分かる記録全集のような番組が必要だと思う。
- 2月25日(水)の歴史秘話ヒストリア「天皇のそばにいた男 鈴木貫太郎 太平洋戦争最後の首相」、3月6日(金)の英雄たちの選択「二・二六事件前夜！高橋是清 決死の攻防～日本の財政再建を目指せ～」はよい番組だった。知らない部分がかなり明確になった。
- 3月1日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「巨大ナマズ ハト狩りの真相」を見た。なぜナマズがハトを狩るのかと興味があって見た。ナマズがハトを食べる光景は迫力があつた。もともとナマズは夜行性だったが、昼間に行動するようになったこと、以前は食べなかった鳥類を食べるようになったことなど、ナマズも生きるために自分のDNAをうまく現代に合わせながら生きていくという、野生動物のすごさに驚いた。
- 3月6日(金)のファミリーヒストリー「伊達みきお（サンドウィッチマン）～伊達の名に誓った覚悟とは～」を見た。すばらしい経歴を持つ祖先がいても、本人は

知らないことがある。明らかになっていくファミリーヒストリーを見ながら、ゲストの率直な意見とともに自分もゲストの気持ちになれる魅力がこの番組にはあると思う。一つ一つのことばが伊達さんの心から出ていて重みがあった。ゲストのファミリーヒストリーをさかのぼって調査することは苦労が多いのではないと思うが、毎回よくぞそこまで調べられると感心している。ゲストにとって知りえた情報のすべてが大切な宝物になると思う。自分のファミリーヒストリーを知れば、いく年も経て、今自分の命があるという、命の尊さに気づくことができると思う。自分のファミリーヒストリーを知ることで、自分が何をすべきか感じ取ったゲストも多いと思う。また、犯罪者に彼ら自身のファミリーヒストリーを伝えることができたなら、更生、再犯防止の一助になるのではないかとも思った。番組を見てさまざまな視点でいろいろなことを考えさせられた。

- 3月14日(土)のSONGS「卒業ソングSP」を見た。卒業シーズンを迎え、人生の節目における若い人たちに向けてのメッセージなのか、昔を思い起こすノスタルジックな番組なのか、見方はいろいろあると思う。学級崩壊が言われたときに対応策として学校に導入された手法が合唱だが、それが生み出す一体感、子どもたちが感じた自分の将来に向けての夢、現在の充実感がSONGS「卒業ソングSP」ではうまく描かれていた。

3月15日(日)のプレミアムドラマ「461個の“ありがとう”～愛妻弁当が育んだ父と子の絆～」は父親と子という極めて限定的な人間関係の中で直面するさまざまな難題、課題をいかに捉え、対応するかという内容だった。SONGS、プレミアムドラマともに、自立を目指した生き方というテーマでおもしろかった。

- 3月8日(日)のサイエンスZERO「太陽系の秘境 冥王星に迫る」は、アメリカのニューホライズンズという探査機が今年7月に冥王星に最接近するという内容だった。冥王星が惑星から準惑星になった理由もよく分かったし、探査機が冥王星まで飛んでいく軌道の選び方などは興味深く、説得力があった。また、冥王星を観察することによって、太陽系ができたころの環境や、今の地球の状態についての理解が進む可能性があるという説明も分かりやすかった。若い人が夢やロマンを持たなくなったと言われているが、宇宙は夢を与えてくれるところで、興味を引くよい番組を作ってくれたと思う。

- 2月21日(土)のドキュメンタリーWAVE「報道は“罪”なのか～エジプト 拘束された記者たち～」は考えさせられた。報道することが犯罪であってはならず、報道の自由を守ろうとする活動の大切さを痛感した。そこで、今沖縄の基地の問題はどうなっているのだろうと思った。最近あまり報道されていない。県知事対政府

という考えではなく、沖縄の人たちがどう思って抵抗しているのか、というところを具体的に報道してもらったほうがよいと思う。

- 3月1日(日)のBS1スペシャル 時代をプロデュースした者たち 第2回「美しきもののみ機能的である 建築家・丹下健三」(BS1 後10:00~10:49)を見た。信念を貫く丹下さんの姿を、再現ドラマや、当時の貴重な写真、フィルムをふんだんに取り入れ、うまく伝えていた。当時の東京オリンピックに向かった丹下さんの心意気、一連の仕事への姿勢は、現在の日本に訴えるものがあったと思う。そこをうまく感じさせる番組になっていた。このような番組をたくさん見て発奮し、未来へ向けてのエネルギーにしたい。とてもよい番組だった。
- 3月19日(木)まで「世界女子カーリング選手権2015 予選リーグ」を見ていたが、日本が予選突破できず、悔しい思いをした。カーリングというメジャーではないスポーツをきっちりと取り上げ、楽しませてくれた。今回、新しい日本代表の選手もいたが、選手の情報なども教えてほしい。また、氷上のチェスといわれるカーリングだが、戦術なども解説してもらえるとカーリングにもっと興味を持たれる方が増えるのではないかなと思う。
- 3月4日(水)のニッポンの里山 ふるさとの絶景に出会う旅「命あふれる草と森の牧場 北海道旭川市」を初めて見た。10分間の番組だったが引き込まれた。近代化された酪農設備が一切ない酪農家の話だったが、牛に特別な施しは一切せず放牧して自然に任せて育て、そのことで自然の循環が生まれているということを10分間でコンパクトにまとめていた。
- ラジオ放送が始まって90年ということで「90時間ラジオ」を放送しているが、今とてもラジオがおもしろいと感じている。災害時にとても役に立つと証明されているし、ラジオの役割は新しい形で広がっていくのではないかな。西田敏行さんと竹下景子さんが担当している「新日曜名作座」というラジオドラマがあるが、想像力をかき立てられ、脳を活性化させるのでよいと思う。高齢者の認知症防止や、子どもたちの想像力を豊かにするための教材などに展開できるのではとラジオを聴きながら思った。いろいろな役割をラジオは果たしてくれる。ラジオも90年を契機に盛り上げてほしい。
- 新幹線が延伸され、首都高速道路の中央環状線もつながり、鉄道では上野東京ラインが開業し、大変感慨深いものがある。このような世の中を大きく発展させるきっかけについて、NHKにはうまく番組を制作してほしい。

- 震災の問題や復興の実態を伝えることに、NHKは真剣に取り組んでいると思う。原発の汚染水や処理の問題も専門的なことになると分からなくなる。原発が必要なのかどうかでも意見が分かれるが、どちらが本当なのかは庶民感覚では分からない。双方の科学者から率直な意見が聞きたい。そういうことが分かる報道をしてもらいたい。
- 東日本大震災の教訓から、想定外を想定内にするためには身体、生命を守るだけでなく、被害を受けても速やかに復興する「事前復興」の意識も重要だ。個人でも自宅が被害を受けた際の復興のグランドデザインを描いておくことが今後は重要になる。今年は被災者にとって大きな転換期になる年だ。仮設住宅から高台集団移転の実現が10月に迫り、ここからが復興の第一歩となるかと思う。来年は発災から5年となり、被災者がどのような課題に直面してきたのかをしっかりと伝えていただき、今後想定されている災害に備えるための貴重な情報としてほしい。
- 東日本大震災で、茨城県は一部損壊においては2番目の多さだそう。そして、いまだに観光面では、風評被害に悩まされる部分がある。去年までの3年間は非常に厳しかった。今年4年になり、若干動きが出てきて明るい兆しが出始めてきたと思ったが、原発の汚染水問題が2月下旬ぐらいに出始めたり、震災関連番組が増えたりするにつれ、また風評被害が出始めている。沿岸部はとくに厳しい。NHKとして取り上げてくれることは大変ありがたいが、もどかしいというのが被災地にいる者の気持ちだ。

上野東京ラインが開通した。とても便利になったと同時に、東京から水戸まで1時間半で来られるようになった。そういう経済的な効果も取り上げていただけるとありがたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成27年2月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

2月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、20日(金)、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成27年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について報告があった。引き続き、「平成27年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）」の諮問にあたって、説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行い、最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	高野孫左エ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

<平成27年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）について>

- 地域に根ざした放送に取り組んでいることがよく分かった。重点事項の中に、命と暮らしを守る報道に全力を挙げることが掲げられており、まさに地域と一体になっている印象を受けた。「NHK経営計画」についても説明を受けたが、正確で信頼できる情報を伝える社会的基盤の役割を果たすという点や、第一級のコンテンツ創造集団であり続けたいということは大事な要素だ。効率化を徹底する組織への改革も非常に重要だと思う。全体的には、各放送局の努力が地域社会を盛り上げ、それが全国放送

にうまく連動していけばいいと思う。報道などの情報は洪水のように毎日流れてくるが、それらをどう読めばよいのか、どう考えるのかについて提示してくれる番組は少ない。そのような考えさせる工夫に各放送局は取り組んでほしい。例えば「クローズアップ現代」は、時宜を得ていることに感心している。毎日何が起こっているのか、それを具体的にどう考えたらよいのかを大変鋭く捉えている。

- 放送局ごとに地域の特徴を課題として盛り込んでいることはすばらしいと思う。従来、栃木県は災害の少ない県だと言われてきたが、昨年は大雪、竜巻等の被害が出て、安全な県とはなかなか言えなくなってきた。今は防災メールなど、いろいろな手段を通じ、災害の予知、減災に努めるような動きが出てきている。宇都宮放送局にはそのような情報の発信にしっかり取り組んでいただきたい。栃木県の県域放送には「とちぎ640」があるが、「気象情報」も入れて約20分なので若干短く感じる。栃木県の文化、食材、観光のすばらしいところなどを知らない県民も多くいるので、放送を通じて地域のよさをもっと理解してもらえるとよいと思う。栃木県は豊かな生活が送れる県だが、知名度が全国的に低く、“無名実力県”とも言われている。県の情報を全国や海外に発信してもらえればありがたい。栃木県は福島県に隣接しているため放射性物質の問題は大きな課題になっている。農産物や処分場の問題など、現地の人は関心が高いが、県外では低い傾向もあり、そのような現状もしっかり伝えていただきたいと思う。
- 去年、長野県は御嶽山の噴火や白馬地方での地震があったが、長野放送局からの情報はしっかりと伝わるものだった。長野県は北から南まで広い県で、例えば諏訪と木曽は同じ長野県だが谷が違う。同じ県でありながら地域によって状況が異なっていることが多い。長野県には民放局もあるが、NHKはNHKらしい、しっかりとした分かりやすい情報を流してくれた。白馬での地震の際には、「小さな旅」のロケクルーがたまたま白馬地方に取材に入っており、地震発生後、ロケを中断し、災害報道にシフトしたということを聞いた。NHKのネットワークを使って、たまたまロケに行った人たちが災害を放送するという、速やかな連携がすばらしいと思った。長野県に住んでいる者として、安心して見られる放送局だと思っている。来月、北陸新幹線が開業するが、長野市内や長野駅の駅前がどう変わったのかなど、全国放送では放送しきれない地域情報を長野放送局では今後放送していく予定だと聞いている。長野放送局は、地域の情報をしっかりと伝えており一視聴者として満足している。来年度も期待している。
- 横浜放送局はラジオ放送のみだが、災害時に停電していても使えるのはラジオであり、重要なメディアだと思っている。いざというときに使えるために、日常的に

ラジオを聴こうというキャンペーンをしたらよいと思う。また、横浜放送局で導入する「Lアラート」は、ホームページ上に表示が出ると説明を受けたが、NHKからの情報はテレビかラジオでと思っている視聴者や聴取者が多く、ホームページを見る行動とは直結していない。ホームページを見る習慣をつけるようなキャンペーンを行えば、受けられる情報がもっと増えると周知してほしい。ほかの放送局でもいろいろな工夫を凝らし、ホームページを制作していると思うが、見てもらえなければ話にならない。普通の番組宣伝と同じように、災害時はホームページを見よう、ラジオを聞こう、と周知する仕組みがあるとよいと思う。

- さまざまな課題が地域ごとにあるが、相互に情報を知ることが有効なことがたくさんあると思う。例えば2つの地域でうまく連動し、両方の地域で情報を共有していくなど、重層的な広がりをもって番組が制作され、放送されるとよいと思う。そういうことが少しずつでも行えると地域から発信する効果をより発揮できるのではないかと思う。

(NHK側)

一つの放送局だけではなく、いろいろな放送局が横のつながりを持つことについてご意見を頂いた。北陸新幹線開通について2月27日(金)の「金曜eye」で放送する予定である。この番組では、関東甲信越以外に中部ブロックも巻き込み、沿線の各地域が北陸新幹線によってどう変わるのか、どんな期待を込めているのか、多くの放送局が参加して制作している。関東甲信越では長野、新潟、東京が参加している。これからもこのようなインターローカルの番組にチャレンジしていきたい。

- 日常の中に入り込んでくれる地域の放送局であってほしい。そのためには放送局がどんどん地域に出て行き、生放送、公開収録、街頭のインタビューなどを重ねることがよいと思う。そのような形で進めていただきたい。
- 地域放送局からの説明を聞き、公共放送の使命として、客観性のある、さまざまな視点からの観察が中に込められていると感じた。一般的に私たちは何かを知り、考え、行動するというパターンで生活をしている。知るということは、より公平、公正、正確、なおかつ客観性の高い視点で整理された情報を伝えてもらうことだと思う。考えるという意味では、さまざまな過去の積み重ねの中から得られた考察力と、これからの変化をどう認識し、考えたらよいかというヒントの両面から番組を

構成していくことだと理解した。行動するという意味では、公開放送の設備を持つ甲府放送局が、そこに人が集うという機能も含めた展開を考えているということを知り、大変楽しみにしている。「行動する」の後に出てくるのはおそらく「つながる」ということだろうと思う。その点について、国際放送や全国放送で情報を発信したいと言うが、どうしたら発信できるものなのかがよく分からない。番組が持つ価値の評価がどのように行われているのか。地域放送局が制作した番組がどういう判断で国際放送や全国放送で取り上げられるのかについて教えてほしい。

(NHK側)

地方の番組がどのような判断で国際放送や全国放送で取り上げられるかについてだが、報道局の記者によく言うことがある。いろいろな大きな問題、たとえば高齢化、TPP（環太平洋パートナーシップ協定）、社会福祉、農業などの問題は、地方においてこそ顕在化し、より深刻な形で現れているのではないかと。われわれの抱えている問題の多くの部分が地方で起こっているという視点で地方のさまざまな問題を捉えてほしいと言っている。全国のニュースでは、新しいもの、驚きのあるもの、先進的なもの、これまでよりも深いものなどを取り上げている。ニュースの種類によって全国で放送する、世界に発信する判断をするということはない。取材力や制作力によって、一つ的话题をより深く、新しい角度で見られるかどうか大事だ。

- 防災、減災に関しては富士山の問題がある。もしも富士山が噴火したときにどのような態勢で、どう対応するのか。「県域」ということばが出てくるが、県ではなく、地域を広く「圏域」という視点で捉えた番組の制作も防災、減災の意味から必要でないかと感じた。
- その地域に生まれ育ち、生活している者たちがより視野を広げ、考えを掘り下げられるような番組作りで地域社会を応援することに積極的に取り組んでいくという説明を受け、これから1年間地域放送番組を見る楽しみを見出させてもらった。
- 水戸放送局では「ニュースワイド茨城」の大人気コーナー「44市町村みんなで！ いばらナイト」があるが、このコーナーが3月で終了すると聞き、少なからずショックを受けている。茨城県は大きく県央、県北、県南、県西、鹿行に分かれる。県民性、文化の違いから、人口の格差など、相互理解の欠如によるさまざまな問題を抱

えており、その中で「44市町村みんなで！いばらナイト」の終了は、民放局のない茨城県において各地区の最新の情報と交流を得られた唯一のツールを失うことを意味する。中継地付近の小中学校では、ふだんからなじみのないテレビ出演という一世一代の晴れ舞台を失うことにもなり、少年少女たちの落胆が心配だ。茨城県内を縦横無尽に走り回り、生中継をするという行為は災害時における電波状況の下調べも兼ねていたように思える。茨城県は日本国内において地震発生件数が上位に数えられる。関東平野で高い建物がないから問題はないという意見もあるが、ある地質学者によると県央より北の地域は関東ではなく東北に近くなるそうで、山間部も増え、電波、道路の状況も一転する。これは、ミカンの北限、リンゴの南限といわれる茨県の特異な地域性を証明しているような気がする。毎週の生中継で全市町村を回することは、水戸放送局のマンパワーと予算がかかるということは容易に想像できるが、茨県には民放局がなく、水戸放送局への県民からの期待は計り知れないものがある。今後も県民に寄り添ったよい番組づくりをお願いしたい。

- 「命と暮らしを守る災害報道の充実」を重点事項として掲げ、それぞれの放送局でテレビ、ラジオ、ホームページを通じ、減災報道にも力を入れるという心強い内容だった。特に各放送局が、ラジオ等で防災情報を発信する番組をさらに充実し、また新しく始めようとしていることはすばらしいと思う。その番組の中で、各地が経験した災害を振り返り、過去の災害事例、そこからの教訓の伝承、取り組みについても取り上げてほしいと思う。広島県の土砂災害では、土砂災害があつて初めて、この土地は災害について昔はこのように言われていたという事例が出てきた。東日本大震災では、貞観地震など過去に同じような津波が来ていたが、現地の方はそれを知らなかったというような事例もある。石碑や地名、過去の災害を語り継いでいる方々などを取り上げ、そこに住んでいながらも知らなかったことを紹介することで、悲劇の繰り返しを軽減してほしい。ラジオ第一の「ラジオあさいちばん」が、4月から「NHKマイあさラジオ」に変更になると聞いた。これまで、この番組内で4週に1回、火曜日に「くらしの危機管理」というコーナーを放送しており、防災、防犯、生活上の事故対策について情報を発信してきた。4月からは、このコーナーの放送回数を5週に1回に減らすということを聞いたが、これは防災情報を充実させていくという各放送局の方針と逆行するのではないか。たとえばその時間帯、曜日ではなくても、ほかに防災番組を新しく作るという今後の展開があるのならば安心できる。

(NHK側)

ラジオ第一の番組の件だが、4月から番組名を「NHKマイあさラジオ」に変更し、内容も見直す。午前7時40分か

ら8時の20分間は一部を除き、関東甲信越地方向けのブロック放送を行う。新年度から地域性を高めようということで、各県の記者、リポーターに電話で生のリポートをしてもらう予定だ。東京だけで作るのではなく、各放送局の参加感をもっと出していこうということで見直しをしている。防災面では、全国放送の部分で、各地から話題をリポートしてもらうコーナーがある。そこでは、防災士などにご出演いただき、防災の話も含めた、各地のリポートを日常的にしてもらう予定だ。いざというとき、災害があったときに、その方がいるところであれば日常のつながりから報告、リポートをしてもらうことができると考えている。

- 各放送局のホームページをいろいろ見ているが、英語版がない。各地の魅力をホームページでも紹介し、海外の人が知る機会を作っていただきたい。番組だけではなく、ホームページでも世界に情報を発信していただきたい。
- たくさんの要望に配慮し、また時代のいろいろな変化を捉えて、新しい編集方針を決められたと思う。特に今回は「命と暮らしを守る災害報道の充実」が一番先に掲げられている。各放送局は、地域の特性に合わせた事情の中で、いろいろな方針を掲げており、すばらしいと思った。防災や減災に関しては、最終的に被害が小規模で済むことがとても大事なことだと思う。以前と同じような災害が起こったときに、被害が少なく、早く対処ができてよかったということがNHKの報道によって実現できる方向に向かうと大変よいと思う。そんな思いを強くした。
- 重点事項の3番目に「地域の魅力を掘り起こす番組作り」とある。地方では、衰退しているところが多くなり、空き家も増え、高齢化などの悩みがたくさんある。そういうところにテレビ、ラジオの番組が入ると活気づき、地域おこしに携わっている人も元気になる。地域を今まで以上に応援する番組に力を入れてほしい。さいたま放送局では、FM放送で地元のかかなりきめ細かいところ、これまでスポットの当たっていなかったところまで掘り起こすような番組を心がけていくと説明を受け、大変期待している。今週からは、県の警察と協調し、振り込め詐欺の具体例をすぐに放送するという新しい取り組みを始めたそう。具体的な事例を紹介することが、高齢者にはわかりやすいと思うので、どのような効果が出るのか興味を持っている。
- 例年話していることを今年もお願いしておきたい。地方の放送局の役割は3点に

整理できると思う。1点目は地元のことを地元発信することで、ローカルニュース、地域向け番組などで実践されている。2点目は全国情報を地方に発信することで、全国放送や、民放であればキー局の放送を地方に向けて放送することがそれに当たると思う。3点目は地方の情報を全国に発信することだ。最初の二つは地方の民放局でも十分に可能だが、3点目は民放局には難しい。その点はNHKが実現する力を一番持っていると思う。今年の計画でも地方の情報を発信することが盛り込まれていて、大変結構だと思う。地方からの期待があることを各局で強く認識して取り組んでほしい。

- 全国向けの放送番組の計画があり、関東甲信越地方向けの計画、各地方局の計画と、全体としてまとまって1本の筋が通っていると思う。地方の計画については各地方の固有の事情を反映し、作られていると思う。例えば統一地方選挙についても知事選や首長選があるところとないところでは扱いが違って当然だと思う。一方で、全国向けの計画には、戦後70年のことが記載されているが、地方局ではあまり取り上げられておらず、東京と新潟以外は重点事項としての記載がないが、各局で1年間意識していったほしい。
- 地方の経済の問題をしっかりと捉えてほしいと思う。いろいろな社会の問題があるが、根底には経済の足腰が揺らいでいることに遠因があるのではないかと思う。地域の経済、特に昨年の総選挙はアベノミクス、今は地方創生がテーマになっている。その点からも地域の経済にしっかり目を向け、番組を制作してほしい。
- 諮問された「平成27年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたい。異議はないか。
- 異議なし。

<放送番組一般について>

- 2月2日(月)の「あさイチ」の冒頭で柳澤秀夫解説委員が行った発言について触れたい。後藤健二さんが助からなかったという件について、「あさイチ」というさまざまな視聴者が見る視聴率の高い番組の冒頭で、柳澤さんが発言したことの意味を深く感じた。今回の事件については、多角的にいろいろな考え方があると思う。今回の事件をどう伝えるのか、どういう放送をするかをとってみても、その方法に

よって物事の見え方が変わってしまうという大変難しい局面があると思う。悪は悪だが、憎しみの連鎖を続けるのではなく、どこで断ち切るのか、何をどうしたら断ち切れるのか、どこかできちんと考えなければいけないと思う。その中で「一人一人ができることは小さいが考えなければいけない。後藤さんが何を伝えたかったかも考えなければいけない」という柳澤さんの発言は、高いテンションを沈静化させる、ジャーナリストとしての一つの見識を示したものだと感じた。その見識を「あさいち」という日常的な番組の中で、冒頭で示したことに敬意を表したい。それを実行できるNHKも見識を示せたのではないかと思う。

- 2月5日(木)の地球イチバン「世界一オーロラに出逢える街 アラスカ・フェアバンクス」を大変楽しみに視聴した。番組は、オーロラが週に5回ぐらい見られるというアラスカ州フェアバンクスをルー大柴さんが訪ね、「オーロラの声」を調べ、先住民に語り継がれるオーロラの伝説についてリポートするものだった。高感度カメラでないと撮影ができないといわれるオーロラを、美しく雄大に撮影しており、懐かしさもあり、画面に釘付けになった。撮影地点が真下のものが多かったが、小高い山の中腹から見えるオーロラが広がっていく映像などがあると、さらにオーロラのよさを伝えられたと思う。撮影された時期は、おそらく極夜の時期だと思うが、朝日が雪山に当たるような美しい風景も紹介してもらえれば、さらにアラスカの魅力を伝えられたのではないかと思う。今回、旅人がルー大柴さんだったが、もう少し英語が堪能で、落ち着いた方でもよかったと思う。ルーさんが、番組中でアラスカの先住民族に対して、「アー ユー イヌイット？」と英語で聞いていたが、アラスカの先住民族はユピック族とイヌピアット族であり、イヌイット族ではない。現地では先住民族のことをネイティブアメリカンと呼び、「イヌイット」や「エスキモー」という表現はどちらかというと差別用語だと捉える方が多いと思う。オーロラというと訪問しやすいカナダを取り上げる番組が多いなか、フェアバンクスを取り上げるところはNHKの行動力と造詣の深さを感じた。戦争花嫁や水産物など、日本ともつながりの深い本当のアラスカの姿をこれからも取り上げてもらえることを楽しみにしている。

- 2月9日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「世界初のビル解体、仲間と共に乗り越えろ 技術開発者・市原英樹」について。今回の番組では、赤坂のシンボリックなホテルだったビルが1年ほどできれいに解体され、そこには大変な技術が使われていたことがよく分かった。ビルの屋上部分をふたとして使い、上から順にジャッキをかけ、少しずつ解体しながら下ろしていくという、画期的な世界初の技術を、NHKのカメラがずっと追いかけていた。理論上では可能でも、現場ではなかなかうまくいかないような困難な状況も紹介されていた。解体を担当した人の

魅力で、作業する人が団結し、最終的にうまく仕上がるという現場をうまく描いていた。今は、多くの高層ビルを壊さないといけない時代だ。昭和40年代に建てたビルは老朽化しており、耐震性の問題から、多くのビルを建て直すことになるだろう。保存すべきものはきちんと保存しなければいけないが、鮮やかに解体し、次に向かっていくことはすばらしいと思った。NHKの取材力に大きな感銘を受けた。

- 土曜ドラマ「限界集落株式会社」は関心を持って見ている。限界集落の農村をテーマとしたドラマだが、出演者、制作スタッフも含めて、農業や地域の過疎化について深く理解していることがうかがえる演出だと感じた。社会問題にもなっている人口減少や、地方創生、一極集中などを総合的にうまくテーマとして取り上げており、あと2回放送があるが、どのような完結になるのか楽しみにしている。地方の在り方や現状について、このような番組を通じ、発信して欲しい。
- 2月14日(土)のETV特集「立花隆 次世代へのメッセージ〜わが原点の広島・長崎から〜」を見た。博学の立花さんは、かつて核兵器廃絶の学生運動などで挫折し、今になって広島や長崎で起きたことを見直している。いかに大事なことを自分が組織できなかったか、取り組んでこられなかったのかという話を具体的に語っていて印象的だった。
- 2月1日(日)の美の壺・選「パン」を見た。番組のホームページも見たが、「今や日本の食卓に欠かせないパン、食べておいしいのはもちろん、そこには独特の美の世界が秘められている」と書いてあった。番組では、発酵させ焼くなどの、職人の技術も紹介されていたが、結果的にはフランスのフランスパンの紹介、日本のあんパンの紹介などがあるだけで、雑誌のパン特集のような内容で終わってしまった。それが美しいということで、番組としてはよいのだろうか。なぜこんなに美しく出来上がっているのか、もっと突っ込んで見せてもらえたら、なるほどと思えたと思う。パン紹介で終わってしまったようで、そこが残念だった。
- 人形劇の「シャーロックホームズ」が2月15日(日)で最終回を迎えたが、全編楽しく子どもと一緒に視聴した。これぞNHKの子ども向け教育番組であり、NHKの伝統だと思う。三谷幸喜さんの脚本で、学園ものとしてよくまとまっていた。ストーリー自体は各話で完結するが、しっかりと全体の伏線が張られ、登場人物のつながりなど、巧みに作られていると感心した。子ども向けにうまくアレンジされているところはすばらしいと思う。欲を言えば、最後に出てくるモリアーティ教頭について、原作ではホームズの宿敵として知られているが、人形劇のストーリーの中では登場する機会が多くなく、悪役っぽい感じがあまりしなかった。もう少し、

最後の敵だという印象を強く持たせていれば、登場した際に、子どもたちに「いよいよ出てきた」という感じを与えられてよかったと思う。人形のデザインもユニークでよかった。放送博物館で人形の実物展示を見たが、きれいに作られていると思った。12月28日(日)のシャーロックホームズ年末SP「シャーロックホームズ・アワード」(Eテレ 後5:30~5:50)で、人形を操る操演者について取り上げていたが、大げさでコミカルな動きがよく表現されており、アニメやCGではなかなか表現できないものだったと思った。特に操演の部分については、そういう技術をしっかり守って育てていただきたいと思う。最終回でホームズとモリアーティが刺し違えるというのは、原作の「最後の事件」と同じだったが、三谷さんも承知していると思うが、原作ではホームズは復活する流れになっている。人形劇の「シャーロックホームズ」も続編に期待したい。

- 1月27日(火)のBS世界のドキュメンタリー シリーズ アウシュビッツ解放から70年「実録 アイヒマン裁判」は、ホロコーストについて、アドルフ・アイヒマンが裁判で「自分は移送計画を実行したにすぎない。責任がない」と堂々と言っている姿にショックを受けた。日本の太平洋戦争にもつながる問題があると思った。可能であれば再放送をお願いしたい。

(NHK側)

BS世界のドキュメンタリー「シリーズアウシュビッツ解放から70年」は、3月10日(火)~3月13日(金)に夕方6時からBS1で再放送する予定なのでご覧いただきたい。

- 1月25日(日)の100年インタビュー「渡辺貞夫」(BSプレミアム 後2:00~3:29)を見た。渡辺さんは、わたしの音楽の趣味を深めるきっかけを与えてくれた人だったため、感慨深く、楽しく視聴した。その日の夜にはライブ番組「渡辺貞夫スーパービッグバンド~81歳 音楽と走り続ける~」(BSプレミアム 後10:50~26日(月)前0:19)も放送され、大変気持ちのよい1日を過ごすことができた。渡辺さんの、樂をしようと思えば樂のできる時代にあえて自ら苦勞する道を選び、自らを戒める様子を見て、楽しい、教訓的な時間を過ごすことができた。
- 1月25日(日)のイッピン「メタルな光でおいしい生活~大阪 金属製キッチンツール~」(BSプレミアム 後3:30~3:59)を見たが、リポーターが職人を訪ねたときにコートを着たままインタビューしていた。寒さなどの問題があるのかもしれないが、「イッピン」というタイトルが表すように、製作者、技能者に対し、もう少し

札を尽くすような配慮があってもよかったのではないかと思った。

- 2月7日(土)と14日(土)のザ・プレミアム「ロマノフ秘宝伝説 栄華を支えた女たち」(BSプレミアム 後7:30~8:59)は興味深かった。前編はサンクトペテルブルグ、後編はクレムリンだったが、クレムリンの中などは初めて見た。サンクトペテルブルグにはフランスのルーブル美術館を上回る秘宝がたくさんあり驚いた。とても楽しい番組で、未知の世界を知ることができた。
- 2月18日(水)のザ・プロファイラー〜夢と野望の人生〜「なぜ殺し合いは起きたのか? ポル・ポト 姿なき独裁者」を見て、ポル・ポトが約200万人もの人を殺害したという事実が本当に起こったのかと考えさせられた。戦後70年、戦争をしてこなかった日本だが、若い世代にぜひ見てもらいたい。戦争は知らない間に起こっていくことを教訓的に考えさせられた。
- 「過激派組織IS・イスラミックスター」によって湯川遥菜さん、後藤健二さんが殺害された報道について述べたい。私たち国民は政府とは違い情報量が少なく、過激派組織からの一方的なインターネットによる情報発信について不信を抱いたままという状況だった。2人は犠牲になったが、政府の取り組みや救出活動が適切であったのかという評価も割とあいまいにされたまま、ISがどういう組織であるのかとか、世界にどういう影響を及ぼしているのかについての報道が多かったような気がする。今回のような事態が起きたときに、政府は国民を守ることができないということが唯一の事実だったと思う。その結果を踏まえ、ISの活動は今後もなお脅威であり続けることから、NHKには政府の対応の限界をしっかりと伝えてほしい。国民はそもそも自分の命は自分で守るという責任を持ち、安易な渡航を控え、治安が不安定なところでは改めて自分の身をどのように守るのかという意識を持つ必要があり、そのような安全行動はどうあるべきかについて、NHKにはしっかりと伝えてほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成27年1月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

1月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、16日(金)、NHK放送センターにおいて、8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、特報首都圏「産むという決断 そして～風疹流行に揺れた“命”～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	高野孫左エ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）

（主な発言）

＜特報首都圏「産むという決断 そして～風疹流行に揺れた“命”～」

（総合 12月5日(金)放送）について＞

- とてもよくできた番組だと思った。まず、番組内での構成のバランスがとてもよかった。冒頭でキャスターが、風疹にかかることが出産にどのような影響を及ぼすのかをコンパクトに説明し、その後に3つの具体的なケースを取り上げていた。風疹に関わる問題でも個々に違いのあることがよく分かった。それぞれの紹介のボリュームも適切で、医師の専門的なコメントも交えながら、分かりやすく紹介されていた。ナレーションと音楽も番組に合った的確なものだった。後半では先天性風疹症候群の子を持つ人々をサポートしている人のことが紹介されていた。その人

が行っている予防ワクチンを認知してもらうための取り組みは前向きで、将来を感じさせる構成要素になっていた。

親が子どもに対して望むことは、健康、幸福、進学、就職など、個々にいろいろあると思うが、番組の中で一人の母親が「風疹で障害があった子どもだからこそ、私の子どもなのだ」という大変重いコメントをしており、女性の強さを感じた。男性ではそこまでなかなか思い切れない気がして印象に残った。家族、幸せ、親と子の関係はどうあるべきかなど、いろいろなことを考えさせられた番組だった。対象になった方一人一人について取材をきちんと行った、NHKらしいよい番組だった。

- 見終わった後の第一印象として、番組タイトルの「産むという決断 そして」の「そして」の部分が、番組として最も訴えかけようとしているところだと思った。とても考えられたタイトルだと思う。冒頭で生命の誕生という喜ばしい出来事を示しながら、障害の可能性を伝える手法にはやや衝撃を覚えたが、番組で何を言おうとしているのか、強いメッセージを感じながら番組はスタートした。驚いたのは先天性風疹症候群で生まれてきた赤ちゃんが全国で45人ということだ。45人という限られた対象を題材として伝えたいことが「そして」の部分なのだったと思った。

出演していた母親が、風疹に感染したことが分かったとき「(子どもは)諦めたほうがよい」と医師から言われたというコメントがあったが、そのような助言が医療の現場に本当にあるのかと驚き疑問に思った。そして、リスクを負いながらも産む決断をした母親と支援する父親という家族の在り方には、一つの現実を突きつけられたようで衝撃を受けた。

番組は、風疹感染はワクチンで予防できるという事実も、可児(かに)佳代さんの経験と活動を通じて伝えていた。その中で、生命に対する倫理観や親子の関係、先天性風疹症候群の子どもがどう感じていたかなどについて紹介しており、強い印象を投げかける構成となっていた。風疹による障害を持つ子どもが全国的に見れば少ないという事実は、逆に言えば一人で悩みを抱え込むケースに陥りやすいということだ。可児さんの活動は、同じ環境の中で思い悩んでいる両親たちを勇気づけ、さらに彼らも情報を交換しながら連携し、さまざまな勇気づけが行われていることにつながっていると思った。

先天性風疹症候群のみならず障害のある子どもを育てる親の心理、子どもの人生観は与えられる愛情によって作られていくこと、また健常であることが必ずしも普通ではなく、障害はいつ誰のところにも起こりうるということを再度認識させられた。この番組はそのようなことに思いを寄せる時間を持たせてくれた、大変すばらしい内容だったと思う。障害は個性という言い方もあるが、冒頭に受けた衝撃から救われたのは、番組の終盤で紹介された母親のコメントだ。「ごめんねと言うより、出来ることを増やしてあげよう。産まれてよかったと思えるようにしてあげよう」

という母親のことばに、障害の有無にかかわらず、親が子どもを思う姿勢、意識の在り方を再考させられた。

- 先天性風疹症候群で生まれた子どもを持つ4家族が紹介されたが、重要な番組だと思った。風疹感染によって障害のある子どもが生まれる可能性が高くなることをほとんど知らなかったため衝撃を受けた。内容の重要性を考えると、4家族を取り上げるには、25分間という番組の長さは短いのではないかと。1時間、あるいはシリーズで追ってもよいと思う。2月7日(土)に目撃！日本列島「おめでとうと言いたくて～風疹と出産“命の記念日”～」を放送する予定とのことなので、その中でもっと具体的に紹介されると期待している。

産むという決断のリスクがあるが、風疹にかかっているながら出産し、結果的に障害があまり出なかった事例と、逆の事例の2つの決断の部分を中心に心理面からもっと深く掘り下げてよかったのではないかと感想を持った。また、病気としての風疹についての説明がほとんどなかったため、風疹の基本的な情報をもう少し具体的に入れたほうがよかったと感じた。

風疹により障害が起きる可能性があるという事実は重く大きな問題だ。知らなかった問題を気付かせてくれたよい番組だった。

- 風疹の問題に限らず、どのような判断がよかったのか答えがない問題はたくさんあると思うが、今回の番組での取り上げ方はバランスがよかった。見ている側に「自分ならどうするのか」「そのような悩みを持つ人たちにどう接したらよいだろうか」ということを考えさせる意味でよかったと思う。番組から知識を得るだけではなく、見ている側が自分に引きつけてその問題について考えることは大切だ。今回紹介されていた方々が、隣に住んでいそうな若いご夫婦だったことから、見ている側は親近感を持ち、この問題を身近な現実として感じることはできたのではないと思う。

全体的に重いテーマで、紹介された方々はつらい決断をし、つらい思いをたくさん抱えていると思うが、子どもに対する愛情の深さや、希望を捨てない強さを感じられ、見ている側にも、難しい問題でもあきらめずに対処していこうという気持ちにさせてくれる点もよかった。若いご夫婦の「子どもに出来ることをこれから考えていきたい」ということばには心を打たれた。また、子どもたちがとてもかわいらしく、お母さんたちも自然な表情の映像が多かった。丁寧で配慮されたよい取材をされたから、うまく伝わる映像が撮れたのだと思う。

- 取り上げられた4家族は状況がそれぞれ違うが、前向きに生き、子どもたちを育てていこうとしていることが伝わった。一緒に番組を見ていた家族は、知り合いに

先天性風疹症候群ではないが難聴の子どもを持つ家族がおり、この番組を見て、接し方を考えさせられたと話していた。そういう意味でもすばらしい番組だったと思う。今後もこの問題については継続的に取り上げていってほしい。なぜこのような問題が起きるのかについて多くの人の理解が深まれば、障害がある子どもを育てる家族や子どもたちの悩みも少しは和らぐのではないかと感じた。ワクチンで感染を予防できるということは、男性はあまり知らないことだが、ある程度伝わったと思う。また、母は強いということもよく伝わってきた。

- 先天性風疹症候群については、NHKでは風疹が流行し始めたときから、生活番組、報道番組などで総力を挙げ、予防について訴えてきたと思う。可児さんのことも以前から番組で取り上げており、風疹の予防について情報を提供していることを知っていた。こうして流行が過ぎたあとも、まだ番組を制作していることをうれしく思った。私も子を持つ親として自分がその立場であったらどのような決断をしたのかと改めて深く考えた。高い確率で障害が出ると分かっているのに、授かった命を大切にしたいという思いから産むことを決断するかもしれないが、障害があると分かった時のショックも計り知れないほどに大きいのだろうと思う。だからこそ、番組の中で長澤由樹さんが柚希ちゃんの障害に向き合う姿やことばに、若いながらもしっかりと受け止めている母親としての強さと子どもへの純粋な深い愛情を感じた。健康で産んであげられなかったと自分を責める親も少なくないと思う。番組の中の長澤さん、可児さんのことばや行動は、同じ立場の子を持つ親への大きな慰めや希望になるのではないかと考えた。制作の上で本当にすばらしいと感じたのは、西村葉七ちゃんの紹介をしたときの表現だ。「風疹が引き起こす過酷な現実、取材を進める中で思わぬケースにも出合いました」というコメントが使われていた。これは、自分を責めている方にも配慮されたことばだったと思う。先天性風疹症候群の子どもを持つ親にとって、葉七ちゃんのような幸運を見せつけられることはつらいことだと思う。もし「風疹が引き起こす過酷な現実の中でこのような奇跡もありました」と表現されていたら、葉七ちゃんには奇跡が起き、私の子どもには起きなかったと心をいっそう傷つけられたかもしれない。「思わぬ」ということばを選ばれたことに、すべての出演者、同じ立場で見ている方への思いやりを感じた。長澤さんと対極する状況を考えれば、番組の中で西村葉七ちゃん存在をどう取り上げるかという難しさもあったかと思うが、母親の麻依子さんのことばの取り上げ方もよく、悩みながら決断した一つの結果として素直に受け止めることができる構成になっていた。きめ細かい部分まで配慮した丁寧な番組で、制作を担当したのは女性ではないかとも感じた。

先の風疹の流行で先天性風疹症候群の赤ちゃんが全国で45人生まれ、6割は首都圏という話が冒頭にあったが、なぜ首都圏に多いのかについて、番組内で語られ

なかった。5年から7年という周期で風疹が流行しているという情報は予防面では有効だが、なぜ首都圏で多いのかについて説明がなかったことは、「特報首都圏」という番組の特性上、首都圏に住む妊婦や子どもを望む親に不安を残すことになったのでないか。

可児さんについて、先天性風疹症候群の娘を出産した経験を持ち、ワクチン接種の重要性や予防の必要性を訴えてきたと紹介していた。初めてこの番組で可児さんの存在を知り、この問題について関心を持った人にとっては、可児さんについての話や行っている活動こそが、まさに深掘りしてもらいたい情報ではないかと思う。また、可児さんが「男性が予防接種していないために奥さんがかかることが多い」と、ワクチン接種の重要性を街頭で呼びかけるシーンがあったが、このコメントこそが重要な部分ではないかと思った。夫の役割は何であるのか、そのとき夫はどう感じるのかなど、男性の視聴者がわがこととして関心を持てるような要素もあればよかったと思う。

先天性風疹症候群の子どもを含め、障害のある子どもの保護者に対する、「親がちゃんと気をつけていなかったから悪い」というような社会の偏見をなくすこと、障害があると分かっても産む決断をした家族が笑顔で幸せに暮らしていけるように社会でサポートすることが重要だと思う。風疹の流行が終わった後も引き続き番組で取り上げてくれたことで、多くの人にその重要性を感じてもらえたと思う。

- 風疹の問題を取り上げた番組は、大流行した2年前に視聴した記憶がある。そのころからNHKではホームページなどで「ストップ風疹～赤ちゃんを守れ～」というキャンペーンを継続しており、現在もそのホームページを地道に更新していることを評価したい。重要なことは予防接種を受けていない谷間世代が子どもをもうける世代になっていることだと思うが、その情報は今回の番組の中では特に触れられていなかった。どのタイミングで予防接種を受ければ防げるのかという情報は、番組全体の構成に合わなかったのかもしれないが、どうすればよいのか不安に思う視聴者のために「詳しくはNHKのホームページを」などのフォローがあればよかったと思う。

「特報首都圏」という番組だが、出演されている方のほとんどが関西弁で話していたことが気になった。関西で取材された番組なのか。取材に協力してくれた方がたまたま関西出身だったのか。首都圏の方の出演される方が少ないという印象を持った。

(NHK側)

先天性風疹症候群の事例が首都圏に多いことが取材の入り口だったが、45人の方々をつぶさに取材する中で応じてい

ただけたのが関西の方だったということだ。

○ 障害がある子どもたちをおおらかに受け止める文化が首都圏にこそ必要ではないか。関西の人は割とそういうことにもおおらかで、自分たちの状況を人に伝えてもよいと取材を承諾してくれたのだと思う。唯一紹介された関東の方は顔にモザイクがかかっており、それが逆に気になった。むしろそういう状況を作らないようにすることこそが首都圏の課題ではないかと感じた。

○ 「特報首都圏」では以前、風営法でのダンス規制が時代にそぐわなくなっていることをいち早く取り上げた。その結果、ダンスの規制の見直しが進んでおり、社会に対し問題を発信する意味で成果があったと思う。そういう期待を持って今回の番組も視聴したが、若干食いつきが足りなかったのではと感じた。NHKが行っている風疹キャンペーン全体の枠組みの中での位置づけということであれば、今回の内容もある程度納得できるが、障害のある子どもや障害と折り合って生きている方が大勢いる中で、今回のように先天性風疹症候群という共通項を持った4組の家族を取り上げるのであれば、もう少し「風疹」そのものを前面に出した番組の構成にしてほしかった。例えば、障害が治ったご家族が取り上げられていたが、統計的に何件ぐらい障害が治るケースが起こり得るのか、あるいは亡くなってしまった方がどれぐらいいるのかなど、視聴者にとって重要な情報を正確に伝えていただきたいと思った。また、予防接種をすれば防げるということは大切なメッセージだと思うが、その点の統計的なデータについても取り上げてほしかった。そのほか、海外の事例の紹介や、過去の周期的な流行の結果、時系列的な変化などを調査し、それらを活用して、風疹の予防接種の大切さを前面に出してほしかった。

番組タイトルは「産むという決断」だが、45人の裏には産まないという決断をされた方も大勢いるのではないかと思う。少子化対策が声高に言われているが、その点でも風疹予防の対策を練っていくことが大事になると思うので、今後もぜひ発信していただきたい。この一連のシリーズについては、いろいろな形で素材を集め、知恵を絞って番組にしていけることが大切だと思うが、核となる「風疹の予防接種をすれば防げる」ということは、どの番組でも外さずにしっかり発信してほしい。

(NHK側)

大変参考になった。番組への反響は女性からが圧倒的に多かったが、実は20歳代から40歳代の男性が予防接種を受けておらず、その谷間の世代が感染して引き起こしている現象なので、女性だけではなく、より多くの人に見てもらう必要があると思っている。2月7日(土)に放送する予定の目

撃！日本列島「おめでとうと言いたくて～風疹と出産“命の記念日”～」では、この場でいただいた宿題を解決できればと思っている。

- とても考えさせられる番組だった。妊娠時期と風疹の発症時期によって障害が出る確率が劇的に変わることも知った。また、子どもが障害が出なかった例も紹介されており、いろいろなことに配慮されていると思った。放送時間の短い番組だったが、うまくまとめられており、分かりやすく見ることができた。

<放送番組一般について>

- 12月21日(日)のNHKスペシャル メルトダウン F i l e . 5「知られざる大量放出」(総合 後 9:15～10:13)を見た。福島の問題、原発の汚染水の問題、廃棄物の問題についてはまだ何も解決していない。こういった番組を引き続き、もう少し精力的に続けてもらいたい。
- 1月1日(木)のNHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像「プロローグ 私たちはどう生きてきたか」(総合 後 9:00～10:13)は大変懐かしい思いで見た。戦後から70年もたつのかという感慨を抱かせるとともに、さまざまな問題を投げかけてくれた。
- 1月1日(木)のNHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像「プロローグ 私たちはどう生きてきたか」は見応えがあり集中して見た。タモリさんが司会者だったが、NHKスペシャル「巨大災害 MEGA DISASTER」や「ブラタモリ」などでも、タモリさんをうまく起用していて、これからのにも期待している。番組の中ではタモリさんがいろいろな豆知識を紹介しており、また進行もスムーズで、タモリさんの能力を十分に生かした番組構成だったと思う。サブカルチャー的なところにも造詣の深い方なので、「ブラタモリ」のような番組でも、今後ともタモリさんの能力をしっかりと生かして行ってほしい。今回はプロローグということだったが、座談会形式で出席者から随時意見をもらう構成はよかったと思う。映像もふだん見慣れないようなものが選択されていて、新鮮味を感じた。タモリさんの「日本人は自分との対話を避けてきた」という発言や、堺雅人さんの「焼け野原から復興するための経済戦争を頑張ってきた」など、出演者の解釈が披露されていた。なかでも半藤一利さんからは意義深い発言が多かったように思う。番組のテロップでも「タモリと語る戦後ニッポン」と出されていて、そのテーマにぴったりの番組

だった。本シリーズも楽しみにしている。番組の最後にアンケートで「今後、ニッポンが最も大切にすべき社会は」というものがあつた。結論は「戦争のない平和な社会」という答えだったが、どういう選択肢を提示し、アンケートを実施したのかが分からなかった。「戦争のない平和な社会」というのは、当たり障りがないとも言えるし、当然選ぶだろうという感じもしたので、どのような選択肢から選ばれたのか気になった。また、対談の中で中園ミホさんが出演されていた。世代や性別のバランスを考慮した出演者だと思うが、中園さんの居場所がなかったような感じがしたのは残念だった。

- NHKスペシャル「ネクストワールド 私たちの未来」には考えさせられた。1月4日(日)の「第2回 寿命はどこまで延びるのか」(総合 後 9:15~10:04)での平均寿命が2045年には100歳になるという話題は衝撃的で、私の周囲でも反響が大きく、これからの人生をどうしようかと話し合っている。「第3回 人間のパワーはどこまで高められるのか」、「第4回 人生はどこまで楽しくなるのか」、「第5回 人間のフロンティアはどこまで広がるのか」と続くが楽しみにしている。
- 1月10日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「ニッポン“空き家列島”の衝撃~どうする?これからの家と土地~」(総合 後 9:00~10:13)を見た。昨年、日本創成会議のいわゆる増田レポートが出された。地方都市の消滅の危険性、リスクについて、関心を持ってそのニュースに触れていた。今回の番組からのメッセージは何なのかと思いながら見た。東京一極集中が生み出すさまざまな弊害や副作用が地方都市の中でどう解決されていくのかということの1つの切り口として空き家の問題があると思う。日本古来の家族が支え合う生活習慣は徐々になくなり、先祖伝来ということばが死語になっていくことを感じながら、地方都市が若者を引き戻し、活性化するための取り組みなどの事例を紹介する番組を作ってほしいと感じた。特報首都圏「産むという決断 そして~風疹流行に揺れた“命”~」もある意味で同じテーマを扱っていると思う。家族の支え合いや役割、地域社会との関わりはどうあるべきかという問題もある。NHKスペシャル シリーズ日本新生「ニッポン“空き家列島”の衝撃~どうする?これからの家と土地~」は、家族の在り方が大きく変わってきたという切り口で、人間にとっての豊かさとは何か、生きていくうえでの張り合いとは何かを考えさせる番組だった。
- 1月10日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「ニッポン“空き家列島”の衝撃」を見た。討論会形式で、一般の方、専門家、自治体の方、国土交通省次官の経験者、元総務大臣の増田寛也さんといろいろな方を集められていて、多様性に富んだよい構成だったと思う。増田さんはキャスターと2人で番組が作れるぐらい

話せる方だと思うが、バランスをうまく取られ、ポイントを絞って発言していた。固定資産税の問題を取り上げていたが、今年から相続税の制度改正も行われ、新たに相続税の対象となる不動産が増えるので、特に地価が高い都心部では空き家問題がさらに深刻化するのではないか。その辺りのテーマをもう少し取り上げてほしかった。後半はコンパクトシティの話だったが、若干説明不足だった。特に郡部に住んでいる住民から反対意見が出ていたが、説明不足だったと思う。最後に出演者が「強制移住みたいなことはしてはいけない」とコメントしていたが、その視点はコンパクトシティ構想の本質ではなく、誤解が残ってしまったのではないかと残念に思った。メンバーの中に若い評論家がいたが、場の空気を読めない発言が多かった。空き家問題の話なのに「これからは賃貸が主流になる」などの的外れした発言も多かった。若い世代に受ける方ということで選ばれたと思うが、番組の中で浮いていたように思う。

- 12月31日(水)の「第65回NHK紅白歌合戦」を見た。毎年家族で唯一、一緒に見ている番組だ。お祭りのような番組であるし、細かく指摘をするつもりはないが、紅組と白組で対決するという時代は終わったと思う。サザンオールスターズや中森明菜さんのコーナーなど、紅組か白組かということとは関係ない企画が挟まれており、ますます最後に紅組が勝つか白組が勝つかという構成の必要性を感じなくなった。「連続テレビ小説」との連携も、「あまちゃん」のときは突然ドラマが放送されてびっくりしたが、2年続けてやらなくてもよいと思った。「NHK紅白歌合戦」を見ている人は、「連続テレビ小説」を見ている人だけではないと思う。NHKが想定している視聴者だけではなく、ふだんNHKを見ていない人が見ていることも意識して、1年間の総決算的な高い水準でのイベント性をもう少し打ち出してもよいのではないかと感じた。
- 例年「NHK紅白歌合戦」は番組をつけていても意外と見ていないことが多く、途中でスポーツ番組に替えることもあったが、今回は「歌おう。おおみそかは全員参加で！」というテーマもあり、年代層に関係なく、じっくり見られた。司会の吉高由里子さんについては、不安視する前評判もあったが、本番では周りの出演者が上手にカバーし、吉高さんらしい表現や、素朴さも引き出されていて好印象を受けた。子どもたちが関心のある「妖怪ウォッチ」、選抜高校野球の入場行進曲にも決まった「Let It Go～ありのままで～」、連続テレビ小説「マッサン」の主題歌「麦の唄」などが印象に残った。「麦の唄」では麦畑の光景が映り、迫力のある映像だと感じた。全体として、誰もが楽しめる番組だったと思う。

- 「第65回NHK紅白歌合戦」の視聴率は第1部が35.1%、第2部が42.2%ということだが、例年に比べてどうだったのか。

(NHK側)

前回の「第64回NHK紅白歌合戦」が45%ぐらいだ。
ほぼ例年並みだといえる。一時は40%を割れるときがあったが、7年前から40%超えは続き、最近は42%から45%の間ぐらいだ。

- 「第65回NHK紅白歌合戦」は「歌おう。おおみそかは全員参加で!」というテーマもあり、出演者自身が楽しんでいる様子が見ている側にも伝わってきた。演出もすばらしく、家族で楽しめたという印象だ。特にいろいろ話題になった「アナと雪の女王」や、連続テレビ小説「花子とアン」と「マッサン」の演出もあり、見応えがあった。「麦の唄」もすばらしかったし、今年こそは紅組が優勝するだろうと手応えを感じたが、結果は白組の優勝で違和感を覚えた。偏見かもしれないが、ジャニーズ事務所に所属している人気グループがこぞって出演、司会をしている間、紅組の優勝はないのかもしれないと思った。デジタルテレビ、ワンセグ、アプリからの投票ができるようになり、全国の多くの視聴者が投票に参加できるようになったのはよいことだと思う一方で、それらの端末を操作できる年代は限られており、その年代に人気の歌手に投票する偏りが出てしまうマイナス面があるのかと思う。白組だけがすばらしいのかということとそれほどずば抜けて秀でているとも思えず、紅組にことさら力がないとも思えない。「NHK紅白歌合戦」はもはや「人気合戦」の投票になっているのではないかと感じた。今後もNHKの方針として、バラエティでなく歌合戦でいくということであれば、投票のしかたについても検討が必要かと思う。内容については、若者の視聴離れを食い止めるための必死さは伝わってくるが、ずっとNHKを支持し、見続けてきた年代の方々が「NHK紅白歌合戦」から離れていくことがないように楽しめる作りにしていってほしい。また、去年は自然災害が多く発生した年でもあったが、被災地からの中継がもっとあればよかったと思う。ことしが阪神・淡路大震災から20年ということもある。視聴率の高い番組なのだから自然災害への備えの面、被災地への思いをもう少し伝えることができたらよかったのではないかな。

(NHK側)

被災地からの中継の件だが、前回は「NHK紅白歌合戦」の中で陸前高田から行った。今回は、12月31日(水)の「ゆく年くる年」(総合 後11:45~翌1月1日(木)前0:15)で、自

然災害が多かったこと、世界各地で大きな地域紛争があり、多くの犠牲者が出たことを主なテーマに、関係する各地域から中継を出した。土砂災害の被災地である広島も含め、世界平和を祈ることもテーマに放送させていただいた。

- 「NHK紅白歌合戦」を毎年見ているが、「第65回NHK紅白歌合戦」は比較的記憶に残るシーンが少なかった。時代なのかとも思うが、歌合戦と言いつつもそれにこだわりがなくなっている。また、中継がいくつかあったが、この企画は中継でなければと思わせるものが少なかった。「NHK紅白歌合戦」の魅力は、年に1回の大舞台で歌手も力を入れ、NHKならではの、ここでしか見られない演出で歌を聴けることだと思う。全体的に楽しい番組になっているが、記憶に残る凄(すご)みのようなものが弱くなってきた気がする。ハード面や演出を含めたソフト面などで工夫し、「NHK紅白歌合戦」を見ないと損をする、見ないとみんなの会話についていけない、時代にも乗り遅れるというようなプライドとすごさで今後も制作していただきたい。今回は少し普通だった。
- 「第65回NHK紅白歌合戦」は、楽しかったが、軽かったという印象だ。一番印象に残ったのは石川さゆりさんの、千住博さんの日本画をバックにした歌だったが、あとは軽いという印象を受けた。いくつか課題があると思う。紅白で競うというのが時代後れではないかという意見と関連して、よい印象として残ったのは桃組の存在だ。ジェンダーについては、これから問題になると思うが、桃組のシーンを挟んだことで、NHKとしてこれからどう展開していくのかと着目している。性同一性障害の問題など、性をどう扱っていくのか。紅組と白組だけではないということは世の中はかなり浸透している。今回は桃組ということでおもしろく取り上げていたが、今後どう取り上げていくのか難しいと思う。また、サザンオールスターズの中継について、横浜からの中継であるなら、渋谷のNHKホールに来てほしいと思った。中身の賛否はいろいろあると思うが、中継というものの意味を考える必要はあると思う。前回の「第64回NHK紅白歌合戦」では陸前高田からDREAMS COME TRUEの歌を中継しており、被災地ということで、これは価値があると思った。学生たちに紅白の感想を聞いてみたが、「おもしろかったが、前回のほうがよかった」という意見が多かった。学生たちにとっては、「あまちゃん」の存在が大きかったようだ。「あまちゃん」は「連続テレビ小説」で高校生が主役になったということが画期的で、それが子どもたちの心はかなり強く残っているのではないか。「花子とアン」、「マッサン」も人気はあるが、若い世代にとっては自分とは離れた話だと思ってしまうところがある。高校生を主役にしたことは画期的であるし、それが「連続テレビ小説」とつながる「NHK紅白歌合戦」の人気にも

つながるのだと思う。今後は「連続テレビ小説」の企画にしても、若い世代が共感を持てるようなものも検討する必要があると思う。

(NHK側)

紅白で本気で争っているわけではなく、進行していくための仕掛けと考えてもらいたい。勝敗を争うのがよいのか、もう少し新しい進行のしかたを考えるのか、スタッフとも話し合っていきたい。中継については、意味のあるところからできればよいと思うが、サザンオールスターズについては、先方の予定を考慮した結果、今回は横浜からとなった。「中継のほうがかえって迫力があつた」という意見も頂いている。今回は、年間を通じて大きな話題になった歌があまりなかった。そういった状況の中で家族で楽しんでもいただける演出を考えた。全国の皆さんに年層別に出場してもらいたい歌手のアンケート調査を行っている。そのデータとその歌手がこの1年間でどんな歌でCDをどのくらい売り上げたのか、コンサート会場にどのくらいの動員力があるのかなど、複数の指標を使い、出場歌手を選んでいる。

○ 12月22日(月)の「BABYMETAL現象～世界が熱狂する理由～」(総合前0:25～1:04)を見た。BABYMETALというアイドルがブレイクし、ロンドン、ニューヨークなどでワールドツアーを成功させたことについて、世界的な人気を現象ととらえ、紹介と分析をした番組だった。BABYMETALというアイドルは、本来音楽的にアイドルにフィットしにくいヘビーメタルとアイドルの融合をコンセプトに、世界的にもニッチなジャンルに踏み込んで注目されている。単なるアイドルの紹介番組としてではなく、優秀なコンテンツの海外への発信事例として紹介しており、NHKの奥深さを感じた。アイドルに疎い者でも1時間近くの番組を思わずいろいろな視点で考えながら見ることができた。少なからずBABYMETALのファンにならしてしまう番組構成は見事だった。これからもNHK特有の多角的な視点でこのような現代文化も紹介していただけることを楽しみにしている。

○ 12月28日(日)の「おしえて！ガッカイ 3日で若返りスペシャル」(総合 後10:00～10:48)は残念な番組だった。私もいくつかの学会に入っているので学会の状況は分かっている。学会には歴史もあって母体もしっかりしている学会もあれば、趣味の延長のような学会など、さまざま存在している。番組で取り上げられている学会は、必ずしも同じレベルとは言えず、世の中の人に学会に対する正しい認識を

伝えられないのではないかと思った。内容も浅く残念だった。

- 12月29日(月)の出前迅速！高専ロボコン2014 全国大会「手作りロボットが“ソバの出前”で真剣対決！」(総合 後 10:40～11:58)を見た。高専ロボコンは何回も見ている。27年目ということで、そんなに長く続いているのかと驚いた。今年は、そばの出前がテーマだったが、完成したロボットが学校によって全く違う発想で作られていて、大変興味深かった。ロボットが坂道を登る際に、せいろをどう安定させるのか、どういう発想で、どういう道具を使うのかなど、その作り上げていく過程を見るのがとても楽しかった。大会はトーナメント形式だったが、途中で各学校の開発秘話、作っているときの様子も紹介され、各学校の様子を上手に追いかけていた。熊本高等専門学校が優勝し、3分間で44枚のせいろを運んでいたが、驚異的なスピードだった。高等専門学校は、日本のものづくり、技術立国、工業立国を目指す日本を支えるために設立された経緯があると思う。この番組はエンジニアの卵の甲子園のような役割がある。テレビに出演して、優勝する、あるいは好成績を収めることはかなりの自信になり、その後のいろいろな技術の現場で生きていく際の力になるのではないかと思う。若いときにアイデアを絞る、仲間と一緒にものを作るというのは貴重な経験だと思う。今後も続くとよいと思う。
- 大河ドラマ「花燃ゆ」のPRをいろいろな番組で行っていた。鶴瓶の家族に乾杯～新春スペシャル～「井上真央 山口県山口市(前編)」(総合 1月1日(木)後 7:20～8:43)では山口県を紹介していた。私は関東地方出身のため山口県のことはいまだあまり詳しくないが、番組を通じて山口県について印象が強くなり、関心が持てるようになった。「花燃ゆ」のスタートに向けたうまい導入だと感じた。
- 1月2日(金)の「日本列島誕生～大絶景に超低空で肉薄！」(総合 後 7:30～8:43)を見た。4Kカメラを搭載した無人飛行機などを駆使し、各地の絶景、噴火が続く西之島を迫力ある映像で伝えていた。1月12日(月)の「勝てない相手はいない～錦織圭 成長の軌跡～」(総合 前 8:15～8:58)は、全豪オープンテニスでの活躍が期待される錦織選手の躍進の秘密を、マイケル・チャンコーチのインタビューも織り交ぜ、人間模様、心理を伝えていた。2つの番組はNHKが持っている技術、先端機材の紹介をする意味でも価値のある番組だったと思う。10年、20年先の存続、継続を考えながら研究開発、技術開発に取り組んでいるNHKの姿、その成果をしっかりと世に問うていく番組だった。特に機材という意味では「日本列島誕生～大絶景に超低空で肉薄！」がその役割を果たしているし、ICT、ビッグデータというキーワードについては、「勝てない相手はいない～錦織圭 成長の軌跡～」で、錦織選手の試合データの分析を整理し明示したことに関心を持った。

○ 1月3日(土)に「70年です!のど自慢 全部見せます歌います スペシャル」(総合 後 9:00~10:13)を見た。「NHKのど自慢」が70年を迎える節目の番組だった。私は宮田輝アナウンサーが司会をやっていたころから見ており、また、NHKの看板番組の一つでもあるため、どのような番組になるのかと興味をもって見た。司会が小田切千アナウンサーとタレントの久本雅美さん、ゲストには北島三郎さんのような大御所からお笑いタレントまで幅広いジャンルの人が出演していた。久本さんは場慣れした軽妙な司会で、北島さんのような方でも番組のトーンにうまく合うようにするし、お笑いタレントの行きすぎた発言なども上手に抑えながらまとめていた。久本さんの才能が見られた番組だった。番組が始まったのは昭和21年で、テレビのない時代の映像も紹介されていたが、最初は鐘もなく、歌っている途中で鐘1つの代わりに「もういいです」と肩をたたき、歌を止めていたとの紹介がおもしろかった。かなり長く司会をつとめた金子辰雄アナウンサーが当時のエピソードを語っていたが、歌詞を忘れた出演者がいると脇に立って、耳元で歌詞を教えてあげたという話が印象に残った。家出をしていた人が「NHKのど自慢」の客席に家族が映っているのを見て、家に帰るきっかけになったというエピソードもあった。今まで知らなかった話も聞け、大変興味深かった。「NHKのど自慢」は地域や家族のそれぞれの人生にとって、かなり大きな役割を果たしているのではないかと思う。これまでの制作者に敬意を表しつつ、10年先、20年先もこの番組が続いているようにという思いで番組を見た。

○ 阪神・淡路大震災から20年ということで、1月12日(月)から明日へ1min. 「阪神・淡路大震災20年」(総合 後 7:55~7:56 ほか)という1分番組で阪神・淡路大震災を取り上げている。20年を迎える1週間前から、報道番組や生活情報番組、ドラマなど盛りだくさんの内容で阪神・淡路大震災を取り上げている。20年が過ぎたから報道しないのではなく、むしろこれから、教訓をどう伝えていくのかという大きな課題に直面していくと思う。未曾有の大きな被害を出した災害に関しては引き続き報道して行ってほしい。

○ 1月15日(木)に「NHK次期経営計画決まる」(総合 後 8:43~8:50)を見た。NHKの役割として、よい番組を作って伝えていく、正しいニュースを公正に伝えることと同時に、放送・通信という部分での技術開発をどうしていくのかということがあると思う。前回の視聴番組で新人ディレクターの登竜門的な番組があるという話があったが、技術面での登竜門的な番組はあるのか、ということも思った。もしあるのならば、若者の関心を引き、新たな視聴者の獲得もでき、新たな番組の切り口を作るという意味でも、技術で番組を訴求する方法があるのでないかと感じた。

- 1月15日(木)の地球イチバン「世界一ナチュラル・ファッションを楽しむ人々」を見た。番組は、アフリカの人たちのナチュラル・ファッション、石、草、動物の毛などを使って装う人々について紹介していた。高機能のカメラで撮影していることもあると思うが、美しい映像だった。また、装った男性のコメントを「おれは今美しく誇り高いトラだ」や「自然がクローゼットだ」などと表現しており、ナレーションに使っていることばがよいと思った。現地を訪れた原沙知絵さんも、素朴な質問をするなど感じがよかった。

- 1月4日(日)から大河ドラマ「花燃ゆ」が始まった。初代群馬県令の楫取素彦の奥さんになるのが吉田松陰の妹の文さんということで、群馬県は盛り上がっている。地元のローカル線も「花燃ゆ」のマークを付けたり、広報紙なども全部が「花燃ゆ」一色だ。

- 12月31日(水)の「2355-0655 2014年～15年 年越しを一緒にスペシャル」(Eテレ 後11:55～翌1月1日(木)前0:20)を見て、「NHK紅白歌合戦」のお祭り騒ぎの後にホッとした。日本中のテレビがテンションの高い番組を放送しているときに、やや緩めで、静かで、クスッと笑えるようなゆとりがあり、清涼剤のように感じた。

- 1月1日(木)の「楽しく打とう！囲碁ビギナーズ」(Eテレ 後2:30～2:50)は、5分番組を4回分まとめて放送していた。昔から囲碁については何も知らず、どういうルールなのか関心があったが、たまたまこの番組を家族と見て「こんなに簡単で楽しいのだったら、お正月だし、やってみよう」ということになり、家族とほのぼのとした時間を過ごせた。お正月だからと力を込めたテンションの高い番組や大型番組の間に、ホッとするような番組や、お正月だからこそ家族で静かに楽しめる番組があり、そのさじ加減がよかった。

- 1月1日(木)の「大心理学実験」(Eテレ 後5:30～5:59)は大変おもしろかった。心理学という誰でもなじみがあるものについて、コミカルでユーモラスな取り上げ方をされていて分かりやすかった。ぜひ続編を制作してほしい。

- 1月1日(木)の「京都・南禅寺界限(わい)別荘群」(Eテレ 後3:00～3:29 ほか)は、美しい映像で、落ち着いた語り口の番組だった。1年に一度は日本の風物についても見直そうという時期に、静かで美しく、しっとり見ることができた。

- 1月1日(木)の「ウィーン・フィル ニューイヤーコンサート2015」(Eテ

レ 後 7:00～9:45)を見た。このコンサートは、長年にわたり放送していると思う。上演している曲はワルツとポルカだけで、ほぼ同じシュトラウスの時代の曲を演奏し続けているが、それでも毎年楽しめる。バレエは最高峰の方が出演しており、衣装も注目のデザイナーを起用するなど毎年工夫して刷新しているため飽きがこない。品質の高さや音楽の力も感じる。映像もそれほど凝っているわけではないが、あまり作り込みすぎなくても品質の高いものはかなり楽しめるし、心に残ると思った。

- 1月3日(土)のSWITCHインタビュー達人達(たち)「新春SP あの人に会いたい!」を見た。作家の平野啓一郎さんと宇宙飛行士の若田光一さんが宇宙体験について語り合うが、作家が持つイメージと、実際に宇宙で過ごした若田さんの人間観のやりとりが興味深かった。
- 一番よい番組だと思ったのは1月9日(金)から始まった「パリ白熱教室」だ。新聞の社説でも取り上げられており、かなり詳しく紹介されていた。フランスのトマ・ピケティ教授によるパリ経済学校での講義を居ながらにして聴くことができる。世界経済フォーラムのダボス会議のテーマにもなっている資本主義の疲労という問題、資本主義が進めば進むほど格差は広がるという問題をピケティ教授が講義していたが、300年ぐらいのデータをさまざまに取り上げながら詳しく紹介していた。全6回ということだが、もっと続けてほしい。また、あまり遅くない時間に放送してもらえればもっと見る方がいると思う。ピケティ教授の書籍は経済関係者だけではなく、主婦層も読んでいるそうだ。また、たくさんの学生が講義を聴きたがっていると思う。貧困と格差の問題についてピケティ教授ほど説得力をもって講義できる人はそういない。今後の「パリ白熱教室」に注目している。
- 「パリ白熱教室」はよかった。「ハーバード白熱教室」もよかったが、アメリカのハーバード大学の考え方だけでは世の中うまくいかないというようなアンチテーゼとして「パリ白熱教室」が放送されたことは評価したいし、期待している。多忙なトマ・ピケティ教授によく出演してもらえたと思う。
- 1月10日(土)の戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 知の巨人たち 第5回「自らの言葉で立つ～思想家 吉本隆明～」(Eテレ 後11:00～翌11日(日)前 0:29:30)を見た。私は吉本さんと呼んで講演をしてもらったことがあるが、まさに番組で紹介していたとおりの人だ。埴谷雄高さんとの論争も紹介されていたが、花田清輝さんとの論争はほとんど紹介されなかった。もう少し吉本さんの逆の面も紹介してほしい。

- 1月1日(木)の「ザ・プレミアム 草間彌生 わたしの富士山～浮世絵版画への挑戦～」(BSプレミアム 後8:00～9:29)は興味深かった。85歳の草間さんは非常に迫力があつた。草間さんによって全く新しい富士山が描かれ、その様子が興味深かった。
- 1月4日(日)の「風に立つライオン～さだまさし・大沢たかお ケニア命と自然の旅～」(BSプレミアム 後10:00～11:29)はおもしろかった。さださんの歌がそんなに大きな反響を呼んでいるとは全く知らなかった。われわれがあまり知らないケニアをよく紹介していた。
- 1月8日(木)の英雄たちの選択「黒船で世界をめざせ！維新の原点 吉田松陰の決断」は、大河ドラマと絡んだ話題ということもあり、とてもおもしろかった。
- 阪神・淡路大震災から20年ということでいろいろな番組を放送しているが、東日本大震災のこれからの復興に確実につながっていくと思う。大変期待している。
- お正月三が日は来客が多いため気ぜわしい。作り込まずにサラッと見られる番組があるといいと思う。
- 昨今、若者の車離れがよく言われているが、本当にそうなのかと思っている。売り手が楽しみ方を伝えていない、また若者が車の楽しみを知ろうとしないところに「若者の車離れ」ということばが生まれたのではないかと思う。年末年始にNHKの番組をいろいろ見たが、一番興味深かったのは「番組宣伝」だったと思う。こんなによいものを作ったのだから見に来いということではなく、こういう楽しみ方があるからいかがですか、という提示が番組宣伝なのだろうと思いながら見た。番組宣伝は多様な価値観、楽しみ方を知らせるよい切り口になると学んだ。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年12月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

12月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、19日(金)、NHK放送センターにおいて、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、目撃！日本列島「たどりついた終（つい）の住みか～貧困・孤独な高齢者は今～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	高野孫左エ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

<目撃！日本列島

「たどりついた終（つい）の住みか～貧困・孤独な高齢者は今～」

（総合 11月15日(土)放送）について>

- 生活保護を受ける独り暮らしの高齢者が穏やかに人生の終わりを迎えられるようにと、施設を作り、受け入れているNPOが市川市にあることを知ることができたことは有益だった。施設で生活されている方々の状況が丁寧に説明されており、入居者の状況を考えると、施設に受け入れられてよかったと思った。一方、貧困という経済状況を差し引けば、孤独、認知症、疾病など、老人ホームなどの高齢者福祉施設の生活実態と何ら変わりはなく、今回のテーマを際立たせる内容ではなかつ

たようにも思った。入居者の人生を振り返り、貧困、孤独な状況、家族との関わりについて紹介していたが、その施設にたどり着くまでの経緯は十分に伝わってこなかった。NPOが日頃から路上生活者の見守りやアパートのあっせんを行ったり、状況を見ながら施設へ入居させるなどの活動をしていることに触れていたが、入居されている方々の施設にたどりつくまでの苦難やさまざまな思いが伝わってこないのは残念だった。同じ境遇の高齢者が多くいる中で、彼らがどのようなきっかけや条件のもとでこの施設に入居することができたのか、また施設に入ることについて彼らがどう感じているのかも伝わってこなかった。貧困、孤独といった高齢者の課題、抱えている問題に対し、社会はどうすべきなのか、その問題の全体像に触れた後で、課題解決に向けた一つの取り組みに市川市のNPOがあるという構成であればよかったと思う。市川市の施設では受け入れられる人数にも限りがあることから、終（つい）の住みかにたどり着けない多くの高齢者はどのようにすればいいのかという疑問も残った。ただ、同じような境遇の高齢者、今苦しんでいる方にとっては、この番組を見て市川市にこういった施設があることを知ることができ、一つの希望になるのではないかと考えた。

○ こういった施設ができ、大変な境遇の方たちがいる状況については理解できたが、この先この問題についてどう考えればよいのか、答えが欲しかった。

○ 独り暮らしが困難な人は今後もっと増えていくだろうというのが現実だ。清潔な家と食事、関わってくれる人、日常的に顔を合わせてごはんを食べられるような人がいれば、映像にあったような穏やかで静かな老後が迎えられるという印象を強く受けた。一方、あの施設を作るにあたってもいろいろな問題があったと思う。どういう条件で受け入れるのか、お金の管理はどうしているのか、何人受け入れられるのかなど、課題が山のようにあるだろうと思う。この番組ではそういった課題よりも、こういう終（つい）の住みかの在り方があるということを伝えたかったのだろうと思った。今後、高齢化社会を迎えるにあたって、さまざまな選択肢を日本は抱えなければならない。今回の番組が伝えた選択肢以外の別の在り方や違う課題など、NHKが高齢化社会の問題を発信する中で、一つの側面を伝える番組としてはよかったのではないと思う。

また、全体的に暗いイメージだけではなく、割合穏やかだという印象を受けた。本人がどう考えているのかまでは把握できなかったが、穏やかなことも一つの選択肢なのだと思う。

○ 施設は清潔で、所員の対応も丁寧で、ホームレスの方への地方自治体職員の対応もよく、安心して見られたが、番組としては、小規模老人介護施設の日常を切り取っ

ただけというイメージを持った。これだけの施設を維持するための努力、改善点、建設の難しさ、地方自治体職員の日ごろの苦労、入居している方々を支えるための根幹にある問題点などを提起すればさらに興味深かったと思う。「目撃！日本列島」は好きな番組でいろいろ見ているが、放送時間が短いため、トピックの紹介で終わってしまうことが多い。もう一步課題に踏み込んでくれればと思うことがある。今回も、ナレーターの岸部一徳さんの声が落ち着いていて聞きやすく、好感を持てただけにその点が気になった。

○ 岸部一徳さんのナレーションは聞きやすくよかった。深刻で今日的な問題を取り上げるのに、23分というのは少し短いと思う。リアルに個人を追うことは少し残酷かと思ったが、明るさもあったので事実は事実として放送したのだと思う。一方で孤独に死んでいく老人が世の中に多くいることは番組からは見えてこなかった。ひっそりと亡くなっている方、孤独に暮らしている方は地方にもたくさんいる。その辺りも、もう少し具体的に取材して欲しかった。また、行政との関連がよく見えなかった。NPOはNPOとして活動しているのだろうと思うが、行政の取り組み方も紹介してほしかった。

○ これからの大きな社会問題の一つが見て取れた。今回取り上げられていた方は、家族が崩壊し、家を飛び出して路上生活を送るようになったということだったが、NPO法人の協力で施設に入居し、途絶えていた娘との交流も再開した。大変幸運なことで、そこまでうまくいくケースは少ない。娘と絆を少しずつ取り戻していく様子を取り上げたのはよかったと思う。認知症老人の問題も取り上げていたが、介護をしたことのある人しか分からない、認知症の人の行動やどう接点を持つべきかななどを知らしめる番組にもなっていたと思う。

孤独な高齢者の問題は、NPO法人だけで解決できるものではない。自治体との連携や、どういう形で施設ができたのかという背景ももっと分かりやすい説明があればよかったと思う。

ゆがんだ考え方かもしれないが、生活していくためには、家族や近所の人たちを大事にし、家族が崩壊しないように我慢、努力をしていくものだ。過去にその努力を怠ったとしても、終（つい）の住みかが見つかれば幸せな生活ができると受け止められても困るとも感じた。

この問題にはいろいろなケースがあると思う。今後ともいろいろな形で取り上げ、お年寄りの行く末、終（つい）の住みかをみんなで考える機会になればと思う。

○ 急激な高齢化が進行している日本社会では高齢者がそれぞれ問題、課題を抱えている。今回の番組は、そういった問題、課題について考えるきっかけを与えてくれ

たと思う。テーマが重く深刻だが、携わっている方には頭が下がる思いで番組を見た。また、個々の方と信頼関係を作りながらカメラを回さなければならぬため取材がとても大変だったと思うが、よい番組になっていた。

娘と長い間絶縁していた男性が、亡くなった妻の遺言とNPO法人の仲立ちで再会できたということだが、その説明があったことで、施設が大きな役割を果たしたと印象づけられた。男性がほどよく明るい方で、そのことも番組のスパイスのようになっていたと思う。自分がしてきたことへの罰が当たっていると言いながらも淡々とされている様子は、よくある老人問題のドキュメンタリーと違い、親子の微妙な距離感の中での愛情など、雰囲気の違う映像になっていた。

施設ができるまでの経緯など、ここまで来た背景についてはもっと知りたいと思った。独り暮らしの老人のデータや一様に老人ホームといってもいろいろな種類、質があると思うが、そのような現状についても興味が湧いた。

こういった考えるきっかけを作るような番組を放送する場合は、番組の最後やなるべく近いところで、関連する番組の情報を伝えるような取り組みがあってもよいと思う。関連する番組の情報があると見る機会も増えると思う。

- 貧困、孤独な高齢者を通じ、社会としてどう受け止めるかを考えるきっかけにしてほしいというのが制作の目的ということだが、盛り込まれるテーマが多すぎたのではないか、もしくは盛り込んだテーマをこなすのであれば時間が少なすぎたのではないか、という印象を最初に持った。今の社会が変化している、その変化がどう起こっているのかということ認識し、変化をどう受け止めるのかということだろうと思いながら見たキーワードが3つある。「NPO」「家族」「コミュニティー」だ。NPOは公的な機関が十分に対応できない部分を補完的に行う組織だ。まずこのNPOの活動基盤が成り立っているのだろうかと思った。少子高齢化が進み、人口が減少し、特に生産労働人口が減少している。そのことを考えると日本の社会は公的な部分を支援する仕事に就こうとする若い人たちはだんだん増えているが、実際に生産活動に従事する若い人たちの行き場はどうなってくるのだろうかということも気になった。少子高齢化をさらに考えると、人口の大都市集中、地方都市の疲弊という問題があると思う。千葉県で成り立っているものが他の県で成り立つのだろうか、他の県では今回の問題がどのように取り扱われているのだろうかと考えた。家族の絆を考えると救われたのが最後のコミュニティーの在り方だった。番組の中で、隣人への関心と働きかけが感じ取れる場面があった。日本人も捨てたものではなく、人情味のある社会がいかような環境の中でも生まれる、そうしたものがあって救われると強く感じる番組だった。たどりついた終（つい）の住みかということで、もう少し深刻に展開するならば入居した方が病気で亡くなられた後にその方々はようになっていくのだろうか、終（つい）の先の姿がどのようなになっているの

だろうか、そこまで時間が経過していないとすればNPOの方々がそこまでどのように面倒を見ていくのか、など関心を持ちながら番組を見終わった。取り上げられ、内在させた問題提起として23分は短かったのではないかという印象を持った。

- 番組は23分という短い時間で、それに近いものは「クローズアップ現代」が相当すると思う。放送の専門性を持つNHKであれば23分という短い時間でどのように番組を組み立てれば視聴者に言いたいことが伝わるのかという技術を持っていると思う。それが今回は十分に発揮されていなかったのではないかと思う。「クローズアップ現代」の構成は完成されており、視聴者に何を言いたいのか、筋が通っている。それは国谷裕子キャスターの存在もあるが、そのためのノウハウがきちんと蓄積されているからだと思う。「目撃！日本列島」はやや発散型だ。放送の専門性を持つNHKとしてきちんと言いたいことを絞り、23分という短い時間で視聴者の心に残るものを伝えることができるはずだ。たとえば「目撃！日本列島」を作っている人同士の情報交換を行うなど、もっと体系としてきちんと作ってもよいのではないかと思った。

全体的に穏やかな雰囲気だったのはプロデューサーの人柄が出ているからかと思ったが、それ以上にNHKとして23分間で何かを伝える技術をもっとアピールしてほしいと思った。

- 初めてこの番組を見た時にはいろいろな疑問が残った。入居者1人につき、月額11万円前後である施設の体制を考えるととても採算が取れていないと思う。運営がどうなっているのか、施設ができる以前の活動、施設ができる成り立ちにも関心を持った。番組の中でNPO法人の方がコメントしていたが、内容は表面的であまり深く立ち入っていないと感じた。だが、もう1回見て、この番組は「NHKスペシャル」でも、「クローズアップ現代」でもないことに気づいた。むしろ3人の高齢者の人生のドキュメンタリーとして作られたのではないかと感じた。番組のホームページで番組の趣旨を見たが、地方発ドキュメンタリーということ以外に特に縛りはないような番組の枠だと理解した。そうであればNPO法人の代表のコメントは必要なく、3人の高齢者のここに至った人生を振り返るドキュメントだと割り切ってしまうのもよかったのではないか。新しい施設ができたことがこの取材のきっかけだったのではと思うが、それゆえどうしても施設の方に視点が移りがちになってしまったのかとも思った。焦点をもう少し絞って整理したほうが、視聴者に伝わるものが大きかったのではないか。

NHKにはすばらしいアナウンサーがたくさんいるので、語りは局内の人を使えばよいと思うが、今回に関しては岸部一徳さんの語りが救いになったと思う。このキャスティングについてはぴったりの方を選んでいたと感じる。

(NHK側)

23分間という時間の制約もあり、いろいろなことを伝えようとすると逆に何も伝わらなくなるという思いもある。答えのような要素が欲しかったという意見もあったが、番組は毎回答えを提示するわけではなく、何かを感じてもらおうという発想で作ることもあってよいと思う。今回はテーマが大きく、見ている中で何かを感じていただけたところがあればという思いで作った。そこがうまく伝わっていない部分があったとすれば、番組の作り方についても一度考えなければいけないと思った。人物のドキュメンタリーに徹したらという考え方もそのとおりで、場合によってはそのような作り方もあったと思う。体系的な情報と感じてもらう部分のバランスをどう取るか、少し迷いながら作っていたところもあるかもしれない。頂いた知恵を今後の番組づくりに生かしたい。

NHKでは、社会的なことを扱う番組にはいろいろな時間帯と尺がある。ニュースの中での数分のレポート、「クローズアップ現代」「特報首都圏」「NHKスペシャル」など、いろいろなバリエーションがある。その中でも「目撃！日本列島」は、地域放送局の比較的若手のディレクターや記者たちの登竜門的な性格を持っている。今回いろいろなご指摘をいただき、また取材に行き、さまざまな経験を蓄積し、さらに次のステップに進み大きな番組に挑戦していく。そういった、ある種の途中経過、一つのステップという形でご覧いただければと思う。ご指摘いただいたことは鋭く、正しく、とても勉強になったと思う。それを糧として持ち帰り、新たなステップに挑戦する意味で次に注目していただきたいと思う。

<放送番組一般について>

- 12月7日(日)のNHKスペシャル ホットスポット 最後の楽園 season 2 第3回「緑の魔境 生物の小宇宙～中米コスタリカ～」を見た。私は動物の番組が好きだが、いつもは見ない妻が見ていたのになぜかと聞くと福山雅治さんが出ているからということだった。母親が見ているので子どもも一緒に見ていた。興味を引く出演者などが起用されると見るきっかけになるのだと思う。子どもたち

も「すごいね、この国は。こんな鳥がいるのか」と興味を持って見ている。なぜ福山さんが出ているのかという興味もあって見たが、楽園の様子、知らない世界など、勉強になった。

- 11月24日(月)の「魔法の映画はこうして生まれる～ジョン・ラセターとディズニー・アニメーション～」(総合 後7:30～8:43)は、ディズニーの制作現場に初めてカメラが入ったということで、興味深く見た。各作業の分担などもしっかり取材され、過度に映画「ベイマックス」の宣伝になっていないところがよかったと思う。ディズニーなので相当コントロールされた取材だったのでないかと想像に難くないが、うまく作られたと思う。この番組を見て気づいたことがある。昨年11月18日(月)に放送された、プロフェッショナル 仕事の流儀「宮崎駿 引退宣言・知られざる物語」で宮崎駿さんを取り上げ、今年8月8日(金)には「アニメーションは七色の夢を見る 宮崎吾朗と米林宏昌」(総合 後10:00～11:13)で宮崎吾朗さんと米林宏昌監督を取り上げていたが、日米で作り方が全く違うと今回の番組を見て改めて分かった。宮崎駿さんは自分で絵コンテに手を入れていたが、ジョン・ラセターさんはできあがったものを見て指示を出していた。日米のマネジメントというか、価値観の違いみたいなものを感じた。放送時期も違う全く別の番組だが、思い起こすと大変印象に残った。

- 12月14日(日)の「2014衆院選 開票速報」(総合 後7:50～翌15日(月)前4:30)について。今回は投票前から与党の圧勝という情報が流れていたが、夜8時ぴったりに自民党の当確が200以上出て、その後は選挙の争点などが見えづらかったという感じを受けた。NHKの開票速報は確実に安心だという思いがあり、今回当確の打ち間違いが1件あったことは残念だった。地方にいと、地元の状況がどうなっているのかが気になるが、栃木県では3名にいち早く当確が打たれ、あとの2選挙区は接戦という流れだった。途中経過の開票も地元では関心が高かった。夜8時50分ごろから各放送局が地元の情報を流していたが、もう少し短い間隔、たとえば30分おきぐらいに地元の情報が流れると地元がどうなっているのか分かりやすくよかったと思う。

(NHK側) 開票速報のローカル情報については、夜8時50分から10分間伝え、以降、正時前の10分間で伝えた。大変関心を持っていただいております、途中経過についてもかなり多くの方に見ていただいた。地元の選挙区の情報をきめ細かく入れていくことが重要で、需要が高いことはわれわれも認識している。30分おきに地元の情報をという話もあったが、国政選

挙の場合にはさまざまな政局的な動きがある。たとえば政権交代が決まった、与党が過半数を獲得した、獲得できなかったなど、どうしても入れなくてはいけない部分もあるため、30分おきにとというのは少し難しい。インターネットやラジオなど、いろいろなメディアで伝えているので、そういう手段も含めてきめ細かく伝えられるように工夫したいと思う。

- 選挙速報のデータ放送の認知度はどれぐらいあるのか。私も同じように疑問を持っていて、データ放送で地元の選挙区を見た。一般の視聴者にどれぐらい認知されているのか。

(NHK側) たとえば新潟の選挙区のある候補に当確が出た場合、放送とほぼ同時にデータ放送でも伝えている。関東甲信越各局では、出稿された情報を東京で一括してデータ放送として発信している。ほぼ放送と近い形で、特に当確についてはあまり遅延はなく発信している。認知度については、番組やスポットなどでデータ放送でも開票速報をすると伝えているつもりだが、届いていなければ周知方法について考えたい。

- 私は気象情報と開票速報ぐらいでしか私はデータ放送を利用していないが、利用されないともったいないと思った。
- 12月14日(日)の「2014衆院選挙 開票速報」は、もともと開票情報速報として大変期待しているが、開票結果予測番組のようになっていた。当事者や関係者が大変な思いをしている中でNHKの報道は別格の信頼性があるし、なければいけないと思う。そこを配慮して頂きたい。開票速報の役割は変わりつつあるのかと思う。ネットなど、リアルタイムに発信できるツールも出てきている。テレビの開票番組はこれから形を変えていくのかと思いながら見た。日付が変わったあたりでおわびの話が出たのは残念だった。NHKの信頼が損なわれないようお願いしたい。
- 12月14日(日)の「2014衆院選 開票速報」について。夜8時過ぎからNHKと民放を交互に見ていた。続々と入ってくる当確の情報とともに各局がさまざまな視点で論じていた。NHKは解説者を交え、自民党圧勝についての分析をしていたように思う。民放は今回の衆院選がどのような戦いであったのか、地方も含め、各選挙区で誰と誰がライバルでどのような選挙活動をしたのかという背景をしっかりと伝えたいという勝者はこちらと当確を伝えていた。民放のほうが見応えがあり、

どちらかというと民放を見る時間の方が長かった。だからといってNHKもそのようにしてほしいということではない。NHKに求められるのは公共放送としての正確さ、信頼性を守ること、あるいは見やすさ、ということだと思う。粛々と情報を伝える姿勢は今後もそれでよいのではと思う。私は投票に行って、いつも「しまった」と思うことがある。衆院選と同時に最高裁判所裁判官国民審査も行われるが、判断するための情報をいつも持ち合わせずにいる。新聞等ではそういう情報をしっかりと載せているが、今回も見忘れてしまった。NHKでは、党首や候補者の主張の政見放送以外に5人の裁判官の情報について事前に番組で伝えていたのかと気になった。

(NHK側) 最高裁判所判事の情報については伝えていないと思う。情報を伝えることになるとその裁判官はどのような裁判でどのような判決をしたと伝えることになると思うが、その取り組みはしていない。

○ 国民審査なので必要な情報はNHKでしっかりと取り上げていただきたいという希望を持っている。

○ 12月14日(日)の「2014衆院選 開票速報」についてだが、知り合いの若い大学生らに聞くとどうも選挙に行っていないらしい。投票率も低かった。選挙で政見放送を放送するのは法律にも定められて実施していることだと思うが、選挙に行こうというキャンペーンはできないものかと強く思った。いろいろなところで展開していかないと、本当の国民の考えが選挙という形で反映されることにならないのではないかと危機感を覚える。公共放送として何かできないものだろうか。いろいろな手法で投票率の改善に取り組むことで、初めて選挙が意味を持てるように、放送として寄与できるのでないかという気がする。何か工夫を考えていただきたいと思う。最高裁判所裁判官国民審査についてだが、私は期日前投票に行った。通りがかりの人が「国民審査はいつも分からない」と言っていた。皆、分からないままに何となく国民の権利の1票を出しているわけだ。それは健全なことではないだろうと今回かなり感じた。私が見た新聞には裁判官の人となり伝える記事が掲載されていた。NHKでもそれに類することをしてもらいたい。あるいはどういう意味で、どういう考えで信任、不信任を考えたらよいのかという初歩的な考え方でもよいので、何かしら伝えてほしいと思う。投票前の事前番組については、党首の意見を承る感じにとどまっていた。12月13日(土)に衆院選特集「師走の政治決戦～党首列島を駆ける～」(総合 後8:00～9:13)を見たが、党首の人となりを感じ取るぐらいにとどまっていて、大きな決断をする、これだという決め手を感じるようなエッ

ジが利いていなかったように思った。さまざまな事情があるのかもしれないが、前日に決めかねている人が参考にできるような番組であればよいと感じた。

- 今回の衆院選で、一部の県は県議会議員選挙も一緒に実施していたが、県議選の速報を放送するのは難しいのだろうか。データ放送をずっと見ていたが、ようやく朝ぐらいに速報が出たようだった。国政選挙と絡んでいるのでそんなに早くは出ないと思うが、早めに出していただけるとありがたい。

(NHK側) 国政選挙と地方選挙が重なったときにはどちらを先に開票するかによって、われわれの速報の態勢も変わる。その場合、国政選挙を先に開票していると思うので、県議選の結果はその後になってしまう事情がある。地元の最大関心事であることはよく分かる。できるだけ早くいろいろな手段で出せるようにしたい。

今回については、国政選挙がなく、単独であれば当然、速報を実施する計画だった。急に解散総選挙が実施されることになり、国政選挙優先となった。

- 選挙に関しては特に最高裁判所裁判官の情報がなさすぎる。国民として知る権利もあると思う。NHKにいろいろな情報を提供いただきたい。なぜ○×をつけるのかとか、名前が出ている方の情報も、ネットで調べてもほとんど出ていない。もう少し情報を国民に提供していただきたい。今後の選挙で検討していただきたい。
- 12月16日(火)の「となりのシムラ」(総合 後10:00~10:43)は大変おもしろかった。久しぶりにコメディーらしいコメディーを見て、笑い転げた。
- 12月16日(火)の「となりのシムラ」を楽しみに見た。挑戦的な番組だと思った。挑戦の意味は、笑いへの挑戦、NHKの限界への挑戦、見ている人たちの固定観念を壊す挑戦なのだろうと思う。志村けんさんというと、お殿様やおばあさんのキャラクターなど民放で植え付けられたイメージが頭の中に残っているが、全く違う志村さんのおもしろさ、おじさんの悲哀を身につつまされながら見た。そういう意味でもおもしろく、挑戦的な番組だったのだろうと思う。以前放送していた「LIFE! ~人生に捧げるコント~」もおもしろかった。「となりのシムラ」はいろいろな場面、シチュエーションが繰り広げられる可能性があり、続編も見たいという印象を持った。

- 「となりのシムラ」はよかった。志村けんさんの服装が、中高年の男性が実際に着そうな中途半端なスウェットパンツや普段着で大変リアルでよかった。また志村けんさんが表情だけで喜びや悲しみを語っており、ベテラン俳優のようだったと思った。ぜひ続きを制作してほしい。
- 12月18日(木)のにつぼん紀行「旅立ちの親子相撲～沖縄 北大東島～」(総合 後 7:30～7:55)を見た。小さな島での親子の絆がうまく表現されていた。島の事情で中学校を卒業したら沖縄本島の高校へ行き、島に戻らない子が大勢いる中で、相撲を通じて親子が絆を育む姿、子どもが親を思う心、親が子どもを思う心、そういうものがしっかりと表現できていた。子どもが島に戻ってきても生活の糧がなかなか見つからず、親としてはきちんとした職に就いてもらいたい一方、子どもは育った島が好きなのでできるだけ戻って海人(うみんちゅ)になりたいがなかなか生活ができない。そういった親子の葛藤の気持ちがうまく表現できていた。現代の家族の中で足りない部分が相撲を通じ表現できていたことに感動した。
- 11月24日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「高倉健スペシャル」(総合 前 8:15～9:28)を見た。かつて任きょう映画での高倉健さんがかっこいいと思って見て、セリフがあまりなくても存在感があるのはすごいと子どもながらに思っていた。大人になった今でもすごいと思っていたが、あまり話をされる方ではないので、その人となりがよく分からなかった。番組では高倉さんの素顔や人柄が表われていた。亡くなってすぐにこういう番組を再放送できることがNHKのすごいところだと思う。番組を制作した当時、高倉健さんが亡くなった後のことまで考え、インタビューをしたのかと思うぐらい、質問が的確だった。われわれが聞きたいこと、知りたいことをインタビューしていた。プロフェッショナルというだけあって、プロはこうなのかとつくづく思ったが、「本番は一度だけ」「一度きりを演じる」「最高のものは1回しかない」「自分の生き方そのものが芝居につながるのであって、テクニックではない」と言っていた。本当にすばらしい俳優だったと改めて思った。
- 12月1日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「大事なものは、足元にある～ポール・スミザー～」を見た。この番組では日本人の著名な人、ある業界で傑出した人の出ることがほとんどだと思うが、珍しく外国人を取り上げていた。ポール・スミザーさんのことは全く知らなかったが、日本に25年も住んでいるスミザーさんが雑草みたいな足元の植物が日本の風土として重要だということを言っている姿に感銘を受けた。政治的な面からの愛国心というよりもわれわれはもっと日本の風土について知らなければいけないと感じた。

- 12月1日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「大事なものは、足元にある～ポール・スミザー～」を見た。番組を見てベニシア・スタンリー・スミスさんをほうふつとさせた。さらにその延長線上で連続テレビ小説「マッサン」のエリーを考えた。日本人では気付かない日本のよさ、日本人のよさを外国の方に評価していただくことは重要なことだと思う。外国の方が日本をどう見ているのか、日本のよさはこういうところにあるのではないかということを取り上げる番組をこれからも増やしていただきたいと思う。
- 12月15日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「果てなき芸道、真（まこと）の花を～狂言師・野村萬斎～」を見た。狂言の世界は家の宿命みたいなものがあるのだろうが、野村萬斎さんの精進ぶり、芸に対する姿勢に感服した。
- 12月9日(火)の地方発 ドキュメンタリー「地方空港はつらいよ 格安航空誘致奮闘記」を見た。茨城空港利用の、LCCと呼ばれる格安航空会社の路線誘致に奮闘する茨城県庁空港対策課職員の努力に密着したドキュメンタリーだった。NHK水戸放送局の取材に対する真摯さ、聖域なき取材、番組制作のうまさを感じた。コメントでは表していなかったが、空港対策課職員の一生懸命取り組む姿を紹介しながらも、外国人への対応の稚拙さを隠すことなく紹介していた。地方における外国人観光客ツアーの誘致、対応の難しさを的確に伝えていたと思う。私は仕事柄、観光協会、コンベンションビューローに関係しているが、外国からのツアー誘致、路線誘致の担当者を海外旅行好きかどうかで選抜していることに驚いた。国際化を進め、生き残りをかける地方空港が直面する大きく現実的な問題を番組は隠すことなく伝えていたのではないかと思う。海外の文化を少しでも理解している方とそうでない方の間で捉え方が違ってくる番組づくりだと思った。単に批判するのではなく、オブラートに包みながら、少しずつ視点を変えながら伝えていた。最後に担当者が「ハワイ、グアムの便が来てくれれば人も来るよな」と言っていて、発想のなさにびっくりした。この番組は日本の国益として考えるならば、いろいろな地方自治体の方々にも見ていただきたい番組だと思った。地方の現実が見事に切り取られた番組だった。
- 12月12日(金)のファミリーヒストリー「尾木直樹～母が語らなかった出生の秘密～」を見た。「ファミリーヒストリー」では、これまでいろいろな方を取り上げてきている。私はテレビを見て泣くことはほとんどないが、たまにポロッとすることがある。それは作られた話でなく、NHK側も知らなかった、誰もが知らなかった事実で驚かされ、感動するからだと思う。これはとてもよい番組だと思う。
- 10月10日(金)の「テリー伊藤～たまご焼きの絆 250年前の古文書～」、10

月5日(日)の「桂文枝～記憶なき父・衝撃の出会い～」(総合 前 1:40～2:28)もとでもよかった。断続的でもよいので続けていただきたい。

- 今何が問題になっているのか、見たことがないものを見せる、といったことがテレビの使命だと思う。12月12日(金)のドキュメント72時間「大阪ミナミ・真夜中のアングラ長屋」は、不況で空き店舗が増えた「味園ビル」で若者たちが小さな飲食店を次々と開き、新しい若者文化を発信している様子を追うドキュメントだった。知らない世界だったので、そういう人たちがいるのかと大変驚いた。こういうドキュメンタリーはあまり見たことがなく大変刺激を受けた。映画ではできないドキュメントで興味深かった。
- 「妄想ニホン料理」が大好きだ。外国人の独自の発想で異質なものを作るプロセスが見ていて大変楽しい。日本料理が外国の料理人によって調理され、最後にどうだと自慢げに見せられる。逆に外国料理を日本の料理人が作ったらどういう反応をするのだろうかと思う。日本文化は、異質なものを入れ、自分のものに形を変えてきたという歴史のプロセスがあり、そういった点からもこの番組は見ていて楽しい。
- 「あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～」という5分番組があるが、この番組をずっと大切に見ている。東日本大震災から3年9か月がたち、なお継続して放送していることに心から感謝する。3年以上たつと風化という大きな問題が出てくる中で、繰り返しあのときのことを忘れずに伝えることは重要だ。長く続けていただきたいという希望はあるものの、いつまで放送し続けてくれるのかというところも気になっている。

(NHK側)

当初、一つの山は3年だと考えていた。その間にかなり復旧も進むのではないかと考えていた。被災者住宅も当初の計画では3年をめどにしていたが、復興は遅れており時間がかかっている。現地の状況などを考慮し、少なくとも5年は取り組み続けていかなければならないと考えている。

- 「みんなの体操」をほぼ毎日放送しているが、たまたま私が見た日に、通常とは違う横からのアングルで映し、体操を横向きで見せていた。「みんなの体操」や「テレビ体操」は大変長く放送しており、定番中の定番だと思うが、ちょっとした工夫で分かりやすくなる。ほかの定番番組でもこのような取り組みをしているかもしれないが、これからもこういった取り組みを続けていただきたい。

- 「ダウントン・アビー 2 華麗なる英国貴族の館」を見ている。いろいろ調べてみたが、オリジナルが制作されたのは4年前だそう。日本でもNHKが放送する前にBS、CSなどで放送されていたと分かった。BS、CS、ネット配信など、いろいろなチャンネルでコンテンツの争奪戦になっていると思うが、こういうよい番組は取り上げてほしい。以前の「SHERLOCK (シャーロック)」もそうだったが、地上波で放送する番組はBSで評判がよいものを選びすぐって、評判を得てから地上波で放送することができると思う。実はシーズン1を見ていなかったのだが、シーズン2開始前に再放送があったので見た。深夜だったので録画していたが、ちょうど長野県北部の地震の日だった。地震のニュースが入ったので、録画が失敗していたらシーズン2を見るのはやめようと思っていたが、しっかり録画されていた。電子番組表を使って録画予約すると臨時ニュースが入って番組の放送時間が変わっても追従して録画してくれると今回初めて知った。かつ、放送局の方が電子番組表の情報を更新するという手間がかかっていることも知った。地震速報でバタバタしている横で地道にそういう作業をしている方に感謝したい。おかげさまでシーズン2を楽しく見ている。
- この1年間いろいろな番組を見てきて、好きだと思う番組は「ダウントン・アビー 華麗なる英国貴族の館」だ。11月30日(日)からシーズン2が始まった。シーズン1で、貴族の華麗さ、貴族や使用人の人間関係を描いたドラマに魅了された。早くもシーズン2が始まったので興味深く見ている。第一次世界大戦という社会状況が大きく変わった中で登場人物の生活も一変し、そこで繰り広げられる愛憎劇に早くも魅了されている。NHKが選ぶ海外ドラマに強い関心と信頼性を感じている。良質な、おもしろい、見応えのある海外ドラマを視聴する機会のあることを改めてうれしく思う。
- 母からの意見を紹介しておきたい。連続テレビ小説「マッサン」を毎回見ているが、エリー役の役者がすばらしく、エリーが出るから番組を見ているようなものだ。大変清潔感があり、実に美しい自然体で、作っていない演技もすばらしい。一生懸命さが伝わってきて、少しおかしな日本語も絵になっている。今失われている日本人の何かがこの人から伝わってくる。このような方を探してきたNHKはさすがだと思った。見る人たちをグッと引きつけているのはエリーだと思う。これからも楽しみに見たい、とのことだ。
- 12月5日(金)のバリバラ～障害者バラエティー～「バリバラ特集ドラマ“悪夢”」(Eテレ 後9:00～9:54)は、障害者が演技するドラマということでどんなものになるのかとワクワクしつつ、ハラハラドキドキしながら見た。脚本が練って

あってよくできた番組だった。無理やりハッピーエンドで終わらせず、障害をネガティブに捉えた結末でもなく、努力、勇気を押し売りするような結末でもなく、ふんわりした感じで終わっており、メッセージとしてもよかったのではないかと思う。出演者もレギュラー放送でおなじみのメンバーを含め、よく演技されていたと思う。制作者側が苦勞された成果で、素直に評価したい。気になったことが2点ある。ハウス加賀谷さん演じる主人公が「障害の治る果物があったら食べますか」と出演者に聞いて回るシーンがあったが、その部分だけドラマではなく、普通の番組のようなインタビュー形式になっていた。主人公もそこだけ丁寧なことばで聞いていて、ドラマのキャラクターから離れ、ドラマの流れから浮いていた感じがした。また、舞台になったのは「悪夢」という店だが、店の名前が「悪夢」で障害者の方が集うというのは印象的にどうなのかと思った。主人公が最初に店に行ったときに、障害のことをショッキングというか、怖い感じで取り上げていた印象がある。脚本上、波を作りたいということもあるかと思うが、見る方によっては障害に対する好奇の目みたいなものを助長してしまうのではないかと危惧した。今後の課題にしていなければと思う。

- 12月14日(日)の日曜美術館「革新の極意～古田織部400年の時を超えて～」を見た。古田織部は以前にも取り上げていたかもしれないが、今回は改めて朝鮮との関係に着目し、現地の陶芸家にまでインタビューをしており、おもしろかった。
- 「きょうの料理ビギナーズ」は、かしこまった料理でも、ありきたりな料理でもない、そんなメニューを教えてくれるので大好きだ。気になる献立の日はキッチンにあるテレビで録画したものを流しながら調理することもある。アニメと料理がコラボすれば料理番組も一風変わり、楽しさ、理解のしやすさが増すのかと思う。子どももアニメを見ながら自分も料理したいと言っている。紹介された料理を作るために、特別な調味料や食材をそろえたものの、余った食材は今後どのように使ったらよいのか分からないようなものを作らせる料理番組もある。「きょうの料理ビギナーズ」で紹介される料理は身近で、家庭でよく使われている調味料や食材で、これならば今日は買い物に行かなくても冷蔵庫にあるもので同じことができるかと思わせるメニューであることが魅力だ。
- 東北関連の番組では「東北発☆未来塾」などを放送している。あのときどうだったのかという番組の他に、一方で未来志向の番組があることはとてもよいと思う。ただ、被災地の方からお手紙をいただくことがあるが、ほとんどのお手紙に心が渴いていると書かれている。高台への移転、公営住宅にだれが住むかということも決

まり、仮設住宅の方々は完全にコミュニティーとして崩壊している状況にある。そういう状況であることをもう少し伝えていただきたい。未来志向であったり、あのときを振り返るということも必要だとは思いますが、今の東北にいる方々の厳しい状況、かなり追い込まれている状況をもっと伝えていただけたらと思う。

- 12月7日(日)のCOOL JAPAN～発掘！カッコいいニッポン～「夜」を見た。最近はいろいろなところで外国人と接する機会が増えている。それだけに外国人の感性、文化を予備知識として持っておくことはこれから大切なことだろうと思う。今回は「夜」がテーマだった。外国人も驚くような日本の夜がいろいろな形で紹介されていた。新宿の歌舞伎町を紹介する部分で興味深かったのは深夜営業している歯医者があることだ。花屋や美容室は歌舞伎町という場所柄ニーズがあると思うが、開業している歯医者によると「歯医者は過当競争なので、普通にやっていたら競争が大変なため夜営業することを考えた」ということで、歌舞伎町だからというわけでもないようだ。この番組を見ているとそういうことも分かり興味深かった。スタジオゲストの外国人が、温泉センターやカラオケボックスを夜中に利用すると言っていたが、その理由として日本の夜がすごく安全だからということだった。外国では施設が壊されたり、盗難に遭うことがあるが、そういうことが一切ない日本の夜はすばらしいということだった。また、飲食店が閉店したあと翌朝の開店までに昼替えをする仕事を紹介された。その集中力とスピードがすばらしく、外国人はあっけにとられていたが、コメントを聞くと「私たちの国では夜に働かないで家族、友人と過ごすのでありえない」と言っていた。そういった考え方、仕事に向かう姿勢の違いも分かり、とても興味深かった。能登の千枚田にLEDライトでイルミネーションを行う話も取り上げられていたが、ライト自体が揺れる形になっていることなど、いろいろときめの細かい工夫がされていることが間接的に伝わってきて興味深かった。都市にはたくさんのイルミネーションがあるが、それとはひと味も、ふた味も違う自然の中でのイルミネーションだった。これからますます国際化をしていくわけだが、こういった外国人の視点を取り入れながらの番組をいろいろな形で続けてほしい。

- 12月16日(火)のBS世界のドキュメンタリー シリーズ 年の瀬に音楽の贈りもの「ピアノマニア～調律師の“真剣勝負”～」を見た。調律師はたくさんいるが、この番組に出てきたシュテファン・クニユップファーさんのような、すごいピアノの調律師がいるのかと驚いた。ピアニストのピエール・ロラン・エマールさんが弾くバッハの「フーガの技法」のために調律を行うのだが、演奏者よりも音に対する高い感度を持ち、またその真剣な姿に驚いた。まるで名人芸のような話で興味深かった。

○ N F L の番組をずっと見ている。M L B も大好きで、20 年以上放送されていると思うがずっと見ている。実況を担当しているアナウンサーは年を追うごとに選手のバックグラウンドも理解され、詳しくなっていることがよく分かるが、解説をされているプロ野球経験者は技術論的な話はするが、選手をまるで知らない方が多く、解説者としてどうなのかと思うときがたまにある。M L B は多くの人が見ている番組だと思う。もう少し選手のことを解説者が知っていてもよいのではないかと思う。逆に N F L の解説者はプロ経験者ではないが、アメリカンフットボールが好きだということが伝わり、選手のバックグラウンド、出身校など、細かい情報まで話してくれる。M L B の実況アナウンサーは本当に勉強されていると感じるが、解説の方には選手の個人的な情報も話せる方を起用してもらったほうがさらに視聴者がおもしろく、深く見られるのではないかと思う。

○ 12 月 11 日(木)の「発見！体感！紅葉輝く！都会の大河 荒川紀行」(BS7 プリアム 後 10:00~10:59)を、私の地元を流れる川なので興味深く見た。紅葉の頃取材で、源流域から東京湾に注ぐまでを一気に見せていた。紀行番組だが、実際には周辺の生活、川と人間との関わり、川によって育まれているいろいろな産業などをうまく取り入れ、きれいな景色と一緒に紹介していた。部分的にはいろいろな番組で見るが、川を上から下まで続けて見る機会は近くに住んでいてもなかったのととてもよかった。今映っているのが川のどこの辺りかも地図で紹介され、分かりやすかった。景勝地の岩畳を低空からの空撮で撮影していたが、あの角度の映像を初めて見た。小さいヘリコプターで撮影したのか、とてもよい映像だった。案内役がグッチ裕三さんで、荒川べりで育ったということで、コメントも楽しかった。荒川を一気に見せてもらったよい番組だった。

(NHK側)

「発見！体感！紅葉輝く！都会の大河 荒川紀行」での空撮は、無人ヘリコプターでの撮影だ。「発見！体感！川紀行」は毎月1回のペースで各地の川を巡って紹介している番組で、川を源流から河口へ、河口から源流へたどっていくことが魅力になっている。そこでは空撮が欠かせず、最近は無入ヘリコプターの精度と安定度が増しているため、安全に配慮しながら効果的に使うように努めている。今後とも魅力的な形で各地のいろいろな川を紹介したいと考えている。

○ 「アニメ 山賊の娘ローニャ」は宮崎吾朗監督のアニメということで、始まった当初から関心を持っており、子どもと一緒に見ている。登場人物のおおらかさ、自

然の描写はスタジオジブリから受け継がれているものかとイメージしている。物語そのものは大きな刺激や派手な展開もなく、視聴後に内容を思い出すのが難しいところもあるが、それでも純粋な心で自然と関わって成長するローニャの姿は見ていて爽やかさがある。自分の子どもは民放のアニメを喜んで見る傾向があるが、最近のアニメは派手で、内容があるのかないのか、あまり見せたくないものが多い。「アニメ 山賊の娘ローニャ」は、親として子どもに見てもらいたいアニメだ。そもそも、アストリッド・リンドグレンさんの「長くつ下のピッピ」は小さいときから読んでいた。「山賊の娘ローニャ」の原作は読んだことがなかったので、早速子どもにクリスマスプレゼントとして読ませたいと思った。良質なアニメを今後もNHKで提供してほしい。

○ 「世界入りにくい居酒屋」は気に入って時々見ている。この秋から始まった番組だが、緩い雰囲気がよい。ふざけた感じではあるが、一緒にお酒を飲んでいるような雰囲気が楽しい。また出演している人がハッピーな感じなのもよい。観光では絶対に分からない風土、食文化、飲み文化がにじみ出るように、そこに住んでいる人たちの人生が浮かび出るように、よいバランス感覚で作られていると感じる。

○ 11月半ばから12月にかけて「ここはふるさと旅するラジオ」が関東を回っていた。茨城、群馬、栃木、千葉、そして12月初めが埼玉だった。12月3日(水)は秩父夜祭当日の「埼玉県秩父市」で、4日(木)は「埼玉県長瀨町」だった。大変楽しみにしており、かなり気合いも入っていた。衆院選が始まっていたため、通常は生放送だが、収録での放送だった。放送時間中に関東地方で地震が起き、地震の情報を伝えるために何度か番組が寸断された。やむをえないことだが、地方を回る番組は出演者も期待しているし、地域の宣伝という意味もあり、地元の期待は想像以上のものがある。再放送もあるようなので、何らかの事情でフルでオンエアできなかった番組は優先的に再放送枠に取り入れる配慮をして頂けるとありがたい。

(NHK側)

「ここはふるさと旅するラジオ」の月～木曜日は通常生放送しているが、金曜日はアンコール放送の回で、それ以前の再放送希望、地震などで寸断されてしまったものなどを放送している。ご指摘の回については確認する。

○ NHKネットクラブでは「再放送ウォッチ！」という登録ができることを初めて知った。番組を登録すると再放送が決まるとメールで送ってくれるというサービスだ。毎月報告されている視聴者の声でも再放送の問い合わせが相当来ていると思う

が、こういうサービスはよいと思うので、ぜひ利用を勧め、普及を進めていただきたいと思う。

- 11月22日（土）に長野県北部で地震があり、長野県北部で震度6弱を記録した。長野県は御嶽山の噴火もあったが、今、長野は大雪に見舞われている。特に白馬地域は大雪で、被災されている方は苦労していると思う。長野放送局では気象情報をピンポイントで伝えてくれており、白馬は何時から何時までが雪とはっきり伝えている。気象情報でかなりの確な天気を伝えてくれるため、被災地にお手伝いに行く方、ボランティアの方も助かっていると思う。長野放送局が情報を的確に県民に伝えてくれていることに感謝している。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年11月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

11月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、21日(金)、NHK放送センターにおいて、8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、地方発ドキュメンタリー「山古志 人が自然をいたわり 自然が人を癒やす里山」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜地方発ドキュメンタリー「山古志 人が自然をいたわり

自然が人を癒やす里山」（総合 10月28日(火)放送）について＞

- 10年前の地震で水没した集落が出たことや、池が崩れて名物の錦鯉(にしきごい)に大きな被害が出たこと、全村避難となったことなど、大変だった状況はいまだ記憶にある。番組は、冒頭で美しい里山の風景が映し出され、「どうやって以前の風景を取り戻したのか」という問いかけのナレーションで始まった。そのコンセプト、方向に従って番組が展開していた。特に地震に関するデータのようなものはほとんど扱わず、星野祐治さん、信子さん夫婦と酒井省吾さん親子にスポットを当て、村の歩みなどを非常に丁寧に描いていた。映像もとても凝っていた。人物をアップで撮影し会話と心持ちを伝えている部分と、逆に里の風景などを丁寧に拾いなが

ら日本の原風景を探る紀行番組に近い印象とがうまく組み合わされていた。テンポはゆったり流れ、音楽もそれに合い、ナレーションもしっとりしていて、無理なく最後まで見られたという印象だ。音楽とナレーションに合わせ、その土地ならではの音、夏ならばセミの鳴き声、鎌で収穫する音、土をかく音などが非常にバランスよく収録されていて、現地の雰囲気伝えてくれた。星野さん夫婦は、災害に遭った後に子どもを事故で亡くした。ふさぎ込んでいる信子さんを、祐治さんが田んぼへ連れて行き、立ち直っていくという根幹をなす部分がとてもうまく表現されていた。ところどころで、田植えの頃の田んぼに指を入れた際の「土の感触がとてもよい」とか「稲穂に実が入る感じがよい」など、貴重なことばも聞けて、心を打った。日本は自然災害が多く、いろいろな形で復興していかないといけないわけだが、山古志は自然が豊富なため、自然と人が触れ合うことによって立ち直っていくという、人との触れ合いから生まれる再生とは違う形での心の再生のしかたがあるのかと感じた。全国には被災し、いろいろな思いをしている方もいる。番組を見て、心の持ちようや次への生きがいのようなものを探すヒントになればよいと思った。

- 当時のニュースなどは大変印象に残っている。番組では、棚田が大変きれいで、思わず行ってみたいと思わせる風景が紹介されていた。地震直後の映像を見ると、田んぼが壊れ、いろいろなところが崩れてしまっていたが、どうやって元に戻したのだろうかに興味を持った。山古志では、村民2,000人余りが避難をしたあと戻ってきたということだが、私と一緒に働いている従業員やスタッフでも、長野県出身の人は地元への愛着が人一倍強いと感じる。山古志もそうだったのかと思う。また、山古志には年配の方が多かったことも復興の手助けになったのではないか。年配の方のコメントで、「老人は夢を見て、花を咲かせる」と言っていたが、例えば働きざかりの人であれば、仕事がなければその土地を離れざるを得ないので、元に戻そうにも地元にいられない。そうでない方たちが力を合わせた結果、地元を元の姿に戻した。インタビューを受けた年配の方たちはすばらしいことばをコメントしていた。コスモス畑の手入れをされている方が、「人の手で斜面の命を整えながら秋を待つ」と。もともと日本では、里山に手を入れることがあったと思うが、山古志という地域は団結力や元に戻そうとする意思があって元に戻れたのだと思う。NHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」(10月19日(日)総合 後9:00～10:13)も見たが、日本人には、壊されたものを元に戻すパワーにすばらしいものがあると思った。どうにか元に戻そうということは、そこにいる人でないと踏ん張れないと思う。山古志の美しい姿は後世につなげるべきだし、いろいろな方に見てもらいたいと思う番組だった。

- 「人が自然をいたわり 自然が人を癒やす里山」というタイトルだが、まさにそ

のと通りの映像で、映像の美しさが際立っていた。人と自然との距離感がリアルに取材され、特にインタビューの生の声は感動的だった。災害と向き合った人々の記録として貴重な番組だと思うが、逆にどのように復興してきたのかというところはよく分からなかった。とは言え、とても叙情的で、一編の散文詩を見るようなきれいさだった。カメラ、構成、ナレーション、音楽もよく合っていた。また風景と人が溶け合って生きている里山がよく描かれていた。自然と災害と人間との関係を描こうとすると、どうしても暗く重い番組になりがちだが、生活の中で大きな悲しみに向き合っている人たちの夢と希望、鎮魂を力まないでよく取材されていたのではないか。番組の中で映像が横に流れる、カメラのぶれみたいなものがあつたが、意図的な演出だったのか。山古志の10年を追う取材は困難なことが多かったと思う。東日本大震災もそうだが、時間をかけ、狭い地域の取材を重ねることはこれからも大事なことで、しっかりとした記録を蓄積することが大きな災害に対する共通の財産になると感じた。震災の表現として非常にリアルに感じたコメントがいくつかあつた。酒井さんが「山の肉がちぎれ、山の骨が出てきた」と何気なく言っていたが、すごい表現だ。秋にコスモスが咲き乱れる風景での「人の手で斜面の命を整える」というコメントも実感が伝わってきた。星野祐治さんは息子を亡くし、棚田を復活させたが、「田んぼが雨で壊されたらまた直す。その繰り返しは百姓の仕事さ」と実感のこもったコメントをしていた。復興の過程についてはよく分からなかったが、大変よい番組だった。

(NHK側)

カメラワークは意図的ではない。やりとりをなるべく大切にしたいということで、映像的に多少据わりが悪くても、やりとり、表情が自然であるところは残した。

- 興味深く視聴した。人間と自然の関わりの根幹を見たような気がした。根本にあるのは中越地震からの復興だったが、復興を見せるということよりも、自然とともに人間が生きていると、こういうことが起こり、こういうことで傷つき、こういうことで癒やされる、そういった人と自然との長い歴史の中の一片を見せてくれたような気がした。復興というものは大げさなものではなく、各個人が生活を平常時に戻していくことなのだと思った。傷つきながらも元の生活に戻っていく人たちの姿、元に戻っていく自然の姿を見せていただき、非常に興味深かった。
- 新潟県中越地震から10年がたち、力強く復興した山古志の自然の美しさに改めて胸を打たれた。山古志の伝統行事である牛の角突きや特産である錦鯉、棚田をよみがえらせてきた山古志の人々のまさに「辛抱強さ」という一言に尽きるのではな

いか。また、故郷を愛する思いがひしひしと伝わってきた。それぞれの家族の状況が紹介されていたことで、それぞれに体験してきた苦しみの中で思い思いの復興を成し遂げてきた様子がよく理解できた。厳しい自然を受け止め、それでも前を向いて歩み出し、自然に戻り、癒やされ、元気になる。それができるのも山古志が自然の一部であるからだと感じた。傷ついた心を笑顔にする自然の力、支え合う家族のまなざしの優しさは視聴する側に感動を与えるものであった。星野知子さんの語りも取材した家族の思いに心を寄せているような温かみのあることばで、心に響いた。何よりも映像が美しく、棚田、稲穂の実りなど、映像の高度な技術により、里山の美しさが際立っていたような気がする。とてもすばらしい映像だった。この番組が近年の自然災害で同じように大切な人、生活の場を奪われてしまった被災地の方々の励みと希望になるのではないかと思います、それを願っている。

○ すばらしい番組だと思った。10年前の山古志の映像を見て、錦鯉の池が壊れ、産地から錦鯉が消えてしまうのではないかとという危機感を覚えたことを当時の映像を見て思い出した。当時の風景、水没した地域の映像も流し、10年たって現在のすばらしい復興がなされているという番組のストーリー性もよかった。酒井さん親子が崩れた山にお花畑を造った。今までになかった新しいものを造り、復興の様子を見てもらいたいという気持ちも伝わった。息子を亡くした星野信子さんは今まで好きだった棚田農業が心を取り戻すきっかけになった。私も農村に住んでいるが、農村の持つ地域性、社会から忘れられていた部分、故郷、人と人のつながり、農業や農村の持つ辛抱強さ、持続性、継続性、そういったものが番組を通じて心の中まで伝わってきた。災害を受けた人たちの中で番組を見た人が「われわれも時間はかかるが復興したい」という気持ちになれば、すばらしいと思った。私は宮城県の津波で被害を受けた施設園芸農家等を支援する仕事もしているが、津波で家族を亡くした方が、それでも地域の仲間と一緒に地域おこしをしていくという話を今年の夏に聞いた。災害によって被害を受けたときに、人と人の絆によって復興できる、あるいは心を取り戻すことができるということが今回の番組から伝わってきた。華やかな番組ではないが、地道な取り組みがわれわれの心を打つということを実感した。

○ 復興というより、日本の美しい里山の風景が非常に上手に描かれていた。私は東北の被災地で花を植える活動をしているが、花の力を描いてくれたことはうれしく感じた。一方で2つの疑問があった。番組の取材時期は春から秋だったが、山古志で重要なのは厳しい冬をどう過ごすかだと思う。身動きが取れないぐらい雪深い地域だ。その厳しい時期をくぐり抜け、春の喜びがあると思う。なぜ大事な冬が抜けているのかと疑問に感じた。また、番組の放送時間が深夜だったが、誰をターゲットに番組を放送したのだろうか。取材時期と放送時間について疑問を感じた。

(NHK側)

冬がいちばん厳しいところであることは間違いない。番組の最後を地震の発生日に近づけたいということがあったが、1年前に番組制作を始められなかったという事情もある。秋の10月23日は稲刈りの季節でもあるので、そこで筆を置くのがよいのではと考えた。地震のときも大雪だったそうで、それが復興の遅れにもつながったと聞いている。そこはこの冬も見つめたいと思う。放送時間については、深夜の放送枠である「地方発ドキュメンタリー」で番組提案が採択されたということだ。

○ 視聴率はどのくらいだったのか。

(NHK側)

関東地方で1.1%、新潟地区では1.4%(ビデオリサーチ社 世帯視聴率)だった。出演された方々も起きて見てくれたそうだ。

○ 非常によい番組だったと思う。タイトルが「地方発ドキュメンタリー」だったが、ドキュメンタリーというよりも紀行番組のような印象を持った。中山間地の生活ぶりを伝える番組としてもよくできていたのでないかと思う。映像も美しく、印象に残ったのは稲穂が育った緑の鮮やかな色をしっかりと捉えていたことだ。途中に差し込んだ映像で棚田のそばにネコがいて、水面に映り込むような映像も入っていて、全体のストーリーとは関係ないかもしれないが、そういったものをうまく差し込むことで番組全体が温かい雰囲気になったのでないか。よい着眼点だと思うし、大変丁寧に作られた番組だという印象を持った。中山間地の生活は社会問題として取り上げると番組にはしづらい面もあるかと思う。地震に絡めてはいるが、暮らしぶりを発信する番組としてもよかったと思う。私は本放送を見たが、時間帯が深夜だということは私も気になった。どの地方の番組でもこの時間帯で放送するのだと思うが、内容によってはこの時間帯がベストなのかという気もするし、むしろ土日の昼間などに見ることができたらよかったのでないかと思う。

(NHK側)

貴重なご意見をたくさんいただいた。取り組んできたことの答えは明確にこれだと伝えるのをあえて避け、映像、人々の実際の動きで表現しようと思った。もし説明が足りないと

感じられたとしたら、そこは制作者として至らなかったところかと思う。避難の後、山古志に実際に戻ったのはまず7割だ。その多くは高齢者で、仕事を探している若い方は長岡などの市街地へ移っていった。10年がたち、その7割も自然減のために5割になったのが現実だ。この10年で復興が進んだからといってその先の10年も同じように続けていけるかといえば、それは簡単ではないことを、この番組やほかの番組を通じても感じた。そういうところにも皆さまに気付いていただけたと今日感じた。冬の様子を取材することも含め、山古志をはじめとした中山間地のことをこの10年で終わらせずに、その先の5年、10年も新潟放送局として見つめていくべきで、そのことを改めて思い起こさせていただいた。また、同じディレクターが番組に出演した以外の山古志の人にも取材をしており、12月20日(土)の「ETV特集」で放送する予定である。

12月20日(土)の夜11時からの「ETV特集」では、どのように復興へたどり着いたかを中心に伝えたいと思っている。

- 番組の冒頭、美しい里山の風景の後に、その10年前、地震直後の衝撃的な映像が対比され、本当にどうやって戻せたのだろうと、番組にぐっと引き寄せられた。しかしセンセーショナルだったのは冒頭だけで、引き続く番組の流れは、人々の手による山古志の里山再生の、技術面ではなく、人々の心が癒やされていく姿を、穏やかに淡々と映し出していた。鳥の声や虫の音という里山の自然の中で、人々が語る素朴だが深い言葉を丁寧に汲(く)み上げて主役とし、それを、落ち着いたナレーションと美しい映像と共に視聴者に届けるという、実にシンプルな構成に好感を持った。しかもその映像の美しさ、稲の穂の伸びて行く姿の映像など、NHKならではの技術が十分発揮されていた。見ているこちらの心も静かに癒やされていくようであった。また人々の日々の営みの再生と癒やしこそが復興であること、そしてそうした復興は、悲しみは消えないとしてもいつかはかなう、という希望がしみじみと伝わった好番組であった。山古志の話であるのに、これが日本のふるさとのどこであってもよいような、普遍性も感じた。テンションの高い番組、衝撃的な番組が多い中で、今回のような穏やかで含蓄がある番組をこれからも丁寧に作ってほしいと思った。

<放送番組一般について>

- 9月21日(日)のNHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃 第4集「火山大噴火 迫りくる地球規模の異変」は、日本全土ほとんどにマグマ地帯があるということで、希望がなくなってしまうぐらいリアルだった。世界各国を取材した番組だったが衝撃を受けた。NHKでないと制作できない番組だとすごさを感じた。
- 10月19日(日)のNHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」(総合 後9:00～10:13)を見た。映像が記録されるようになって100年ほどということだが、当初はモノクロだった映像に最新の技術としっかりした考証を加えてカラー化し、番組を作ったということで、大変興味深く視聴した。ほかの資料にはないインパクトが映像にあると改めて実感させられ、全編を感激しながら視聴した。戦後60年以上がたち、今は比較的平和に過ごしているが、私が生まれる少し前までは10年おきに戦争があり、関東大震災もあり、人々が過酷な状況の中で生きてきたことが映像を見てとてもよく分かった。平和や豊かさをおう歌する中に身を置けていることと、そうではない時代に生まれた人との差、対比のようなものも感じられ、いろいろな意味で感慨深い番組だった。景観とその移り変わりの様子もよく分かった。国立競技場は昭和39年の東京オリンピックのときに色鮮やかに歓喜の声を上げた場所だったが、その少し前には学徒動員の舞台であったことなど、映像がカラー化されたことで、説得力のある番組に仕上がっていた。映像でなければ伝わらないところを見せてもらえたことは、映像に携わる皆さんの偉業だったと評価させていただきたい。
- 10月19日(日)のNHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」を見たが大変おもしろかった。これまで戦争時代、関東大震災などの昔の映像は白黒のためずいぶん昔のことに感じていたが、カラー化されると親近感が増した。そばを食べている男性の姿や若者が撮影した宝塚少女歌劇団の映像など、カラー化されることによって親近感が沸き、生々しく伝わってきた。白黒をカラーにするのは苦勞されたと思う。フランスのチームと組んだということだが、たとえば着物などの細かい色をカラー化するのにフランスのチームの方たちはどう色づけしたのか。大変な共同作業だったのではないかと思う。
- 10月19日(日)のNHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」には驚いた。モノクロで見ると古い感じがするが、カラーになると身近に感じ、まだ数年しかたっていないようによみがえってきた。

- NHKスペシャル「カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～」は、番組もさることながら、ホームページが非常に充実していて、デザインもすばらしい。
- 10月31日（金）のNHKスペシャル「“夢の丘”は危険地帯だった～土砂災害 広島からの警告～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。8月の広島市の土砂災害のフォローという形の番組だった。番組自体は3D画像を使い、災害について住宅政策からひもといて話をされていて、分かりやすかったと思う。しかしながら、あまり新しい情報がなかった感じもした。無理な宅地開発をしたことや、土砂災害の警戒区域の指定が進んでいないことなども、災害の後の報道などで誰でも承知している話だったと思う。宅地開発業者、当時の行政の方にもインタビューをしていたが、当たり前というか、当時のことを苦渋の表情で語り、時に涙を流していた。果たして、そのインタビューは情報として意味があったのかという気がした。スキャンダル的な雰囲気以上のものはあまり感じられなかった。住民の取り組みも取り上げられていたが、地域の取り組み以前に、災害に対する備えと住民の財産に対するバランスをどうするか、よくある形だが、海外の事例を取り上げることも可能だったのではないか。もう少し問題提起があってもよかったのではないかと思う。「NHKスペシャル」にしては物足りなかった。災害については原発事故もそうだが、災害が起こってから取り上げるのは当然だが、起こる前にいろいろな危険が社会にあることもしっかり取材、発信し、防げるものは早めに防げるようなことに貢献できれば、公共放送としても使命が果たせるのではないかと感じた。
- 11月15日（土）のNHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃「日本に迫る脅威 激化する豪雨」(総合 後 9:00～9:58)を見た。日本全国どこでも豪雨による災害が起きる。山崩れや都市型災害など、災害の危険性がどこにでもあるということを、分かりやすい解説で認識することができた。例えば、海水温が0.2度上がると雨量が変わる、都市の内水氾濫は対策として地下にため池も造っているが、今の対策では間に合わないぐらいの大きな災害、豪雨の可能性があることなどだ。自分たちが住んでいるところで長期間災害が発生していないと、自分の住んでいるところは安全、安心という気持ちについてしまいが、もう一度見直すためのよい啓発となっていた。番組の後半では、さまざまな機器を使い、災害の予測ができるようになったことを紹介していた。そういった情報発信をいくらかでも早くし、大きな災害がもたらす被害についての情報が国民にいち早く伝わる仕組みづくりをすると、心構えができると思った。
- 10月3日（金）の特報首都圏「御嶽山噴火の衝撃～登山者50人の証言・映像記録～」を見た。現場で噴火を経験した方々の証言から当時の状況を検証し、客観的、

具体的に現場の様子を伝えていた。リアルな映像、噴火を体験した方々の話は生々しく、現場にいないと分からないことが伝わってきた。長野県内でもあそこまでしっかりと噴火の情報について伝えていたのはNHK以外ないと思う。最後に番組キャスターがつらい思いを体験した方たちに対して、取材を受けてくれたことへの感謝のことは述べていたが、噴火の真相を伝えることの意義や番組制作者の誠意がテレビから伝わってきた。

○ 10月19日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「どっちが得？ヤマメVSサクラマス」を見た。私は溪流釣りが好きだが、なぜアマゴやサツキマスのように、同じ種類にもかかわらず、川に残るものと海に下るものがあるのか子どものころから不思議だった。きっとその答えが分かるだろうと思って番組を視聴した。番組では、えさがたくさん取れない魚は海に下り、えさ取りに勝てた強い個体が川に残る、また、寒い地域ではえさとなる昆虫が少ないため海に下るものが多く、逆に暖かい地域ではえさが多いためほとんどが川に残るということだった。しかし、私の住んでいる地域では、地元の川にアマゴを放流すると、1週間ぐらいでみんな下流にある湖に下ってしまう。湖から太平洋に続く川へは水門があるため、アマゴは湖から海に出ることはできないが、湖で大きくなって上流に上ってくる。釣り人の間では、アマゴがすぐに湖に下ってしまうのは水温が違うためでないかということだ。アマゴ、ヤマメが養殖されたときの水温と放流された川の水温が違いすぎるために下ってしまうのでないかということだ。北海道にすんでいるものは海に下り、九州にすんでいるものは川に残るものが多いというのは、えさのせいではなく水温の違いでないかと、釣り人同士で話をしている。

○ 10月23日(木)の「ニュースウオッチ9」で中越地震の土砂崩れで救出された皆川優太さんを取り上げたコーナーがあった。1人の記者が優太さんに10年間密着し、取材をしていたというのがよく分かった。記者が優太さんと仲良く遊ぶシーンなどもあり、息長く、根気強く取材されていることに感心した。一方で、最後に10年たったということで事故についてのインタビューをしていたことが気になった。コーナーで取り上げたこともそのインタビューがあったからこそというのは理解できるが、10年の区切りはあくまでも大人や社会の事情ではないか。優太さんは今12歳で、そろそろ多感な時期に入るところで、そういう子どもに悲惨な事故の話を聞いてよいのかと大変気になった。本人や保護者などの了解を取ったうえでのインタビューだと思うが、了解を取ったことと本人に対しどういった影響が残ったのかは別の問題だと思う。PTSDなど、いろいろな心理的な負担も考えられる中で果たしてよかったのか。きつい言い方をすれば10年間せつかく取材してきたのに最後で台なしにしてしまったのではないかと懸念すら覚えた。そういう点に

は十分に配慮し、事故や犯罪被害者、子どもに対する取材は慎重に行っていただきたい。

- 10月26日(日)の「NHKニュース7」で、7時ちょうどに当日行われた福島県知事選挙について、当選確実の速報がスーパーで伝えられたが、投票箱が閉まったのが午後7時だった。NHKの選挙報道は、事前の調査から出口調査まですばらしいノウハウと精度の高いものができているので、それについてとやかく言うつもりはない。しかし速報のタイミングに少し違和感を持った。当選確実という用語はよく分からないが、選挙という法律に裏付けられた大変厳粛な流れがあり、「当選」「次点」「落選」というのが正式な用語だと思う。「当選確実」というのはマスコミが作ったことばだと思うが、テロップで「当選確実」と流れた瞬間に事務所は万歳をし、いろいろな人が動き出す。NHKの報道は圧倒的な信頼があるので重さもすごいものがある。「極めて有利な情勢」、「大変有利」など、何か違う言い回しで開票までの時間をつなぐことができ、なおかつマスコミ各社の競争に対しての存在感も維持できるようなことばがあるとよいという気がした。まだ投票箱が一切開いていない状態で当選確実とマスコミが打つことに代わる、何か謙虚なやり方がないものかという気がする。

- 10月31日(金)の特報首都圏「ステップファミリー～社会に広がる“新たな家族”～」を見た。ステップマザー、ステップファーザーが継母、継父だということとは知っていたが、ステップファミリーということばは初めて聞いた。血のつながらない親子の家族のことだそうだ。番組の背景でも紹介されていたが、今は結婚する4組に1組が再婚だそうで、ショッキングな状況になっていることを改めて感じた。私の周りでも離婚、再婚する人が少なからずいるが、子どもがいる場合は大変だと思う。番組の中でも、ステップファミリーの場合、子どもとどう付き合うのかについて、学会の研究やいろいろな事例が紹介されていた。子どものしつけは実の親がやるべき、無理に父親、母親と呼ばせない、親子関係でない“友達以上家族未満”という関係を前提にした付き合い方が紹介されていて、最近はそういう取り組みがあるのかと感心した。番組後半で山下さんという家族を取り上げ、子どもとの関係がうまくいっている例として紹介していたが、山下さんがどういう経緯でステップファミリーでの子育てのノウハウを知ったのかが紹介されていなかった。山下さんはどのように情報を得ることができたのか、その社会的な背景が知りたかった。11月20日(木)の「NHKニュース おはよう日本」でもステップファミリーを取り上げていた。NHKでは今後何度か取り上げていく予定なのか。特報首都圏「ステップファミリー～社会に広がる“新たな家族”～」でもそうだが、圧倒的に子どもからの視点が欠けていると感じた。親として子どもにどう接するかは厚く取

り上げていたが、子どもがそれについてどう考えているのか、山下さんの子どもに対するインタビューが入っていたものの、バランスとしてもう少し子どもの視点も入れていただきたかった。特に離婚、再婚となると、離婚に至るまでの経緯で子どもには大きな負担がかかったはずで、再婚時には既に負の感情を抱えていることも想像できる。また、ステップファミリーの課題について発信するのはよいことだと思うが、離婚に至らないようにどう家族を作っていくのかというところも併せて取り上げてもらえるとバランスが取れてよいと思うので、その点も配慮してほしい。

- 11月1日（土）の目撃！日本列島「“建設バブル”の裏側で～外国人実習生受け入れの現場から～」を見た。わが国において建設業、農業、介護ヘルパーなどで深刻な人手不足に陥っている。その状況を補うために外国人研修生という制度を活用し、アジアを中心とした国々から外国人研修生の受け入れが行われている現状を山口県岩国市にある建設会社を通し、打開案と問題点を紹介する番組だった。日本で人口減少が進む中、労働力確保の方策として茨城県でも県を挙げて取り組んでいる政策なので興味深く視聴した。番組では、研修生を使うことへのプラス面が強く強調され、雇用環境の実態、逃亡など現実にある問題点を挙げることなく、終始コミュニケーションの問題、研修期間が3年のみという表面的な問題しか捉えていないことに若干の違和感を覚えた。今年の夏ぐらいに茨城県で起きた研修生の賃金未払いの問題において水戸放送局でもニュース番組の中で特集という形で取り組んでいたが、そちらも研修生の逃亡、J Aの指導の徹底がされていないこと、農家の方々の理解ができていなかった程度の報告で終わっていた。その問題は現在も続いており、外国人研修生の逃亡は増加傾向にある。それを手助けする不法滞在者の組織化、不法滞在者を雇い入れる農家や会社の存在など、問題は根深く、多岐にわたり存在している。新たに外国人犯罪を生み出す問題の1つであり、最悪の場合、国際問題にも発展しかねない事案だと思われる。NHKには、研修生の送り出し機関、受け入れ機関、受け入れ側、研修生の雇用環境、生活環境等の実態も含め、本質的に外国人研修生受け入れの現実を紹介し、問題提起をしていただきたい。

- 6月20日（金）に新潟で放送された金よう夜きらっと新潟「旅特選 小さな旅 大地は傷ついても ～新潟県長岡市山古志～」を見て、地方発ドキュメンタリー「山古志 人が自然をいたわり 自然が人を癒やす里山」を見たが、半分ぐらい同じ映像が使われていた。4か月間で番組の質がどれだけ高まるのかもよく分かり、興味深かった。「金よう夜きらっと新潟」はエピソードの寄せ集めという感じだったが、「地方発ドキュメンタリー」ではストーリーになっており、また音楽の効果もかなり感じた。「地方発ドキュメンタリー」の音楽は、希望を持てるもので、それが審議委員の皆さんの好印象につながったのではないか。10月22日（水）のクローズ

アップ現代「新しい“ふるさと”へ～新潟県中越地震 10年目の模索～」では、皆さんが疑問に思っていた10年間の変化やどんな葛藤があったのかについて、国谷裕子キャスターがかなり切り込んで話をしていた。その3つを合わせて見るとかなり立体的に状況が分かった。私も9月に山古志を訪ねて、出演されている方にもお会いした。「クローズアップ現代」は特によかった。世の中のうわさで、2015年春に「クローズアップ現代」が終了するのではないかという話がある。事実かどうか分からないが、「クローズアップ現代」はよい番組だと思う一方で国谷キャスター頼みみたいな部分もあり、今後が大変心配だ。国谷キャスターに続く後継者を育てていただきたい。

- 連続テレビ小説「マッサン」を毎回楽しく見ている。広島、大阪とそれぞれのところで目まぐるしく環境が変わり、そのつど新鮮さがあり、楽しく視聴している。10月23日(木)放送の第22話で、マッサンとエリーが食事中、マッサンが興奮しながら箸を振り回すシーンが気になった。一緒に見ていた私の家族も「危ない」「子どもがこれを見て、まねをしたら大変だ」と話していた。私たち家族だけがそう思ったのかと思ってネットを見たら「箸を振り回す場面が行儀悪い」「危ない」とコメントをしている人が少なくなかった。カメラマンの位置からすると距離的に大丈夫と思ったのかもしれないが、視聴者側からは距離感が分からずとても近くに見えた。撮影する側のチェックが甘いのではないかと思う。私は子どもの家庭における生活の事故防止について取り組んでいるので、ハラハラして見ていられなかった。11月18日(火)の第44話でも同様だ。連続テレビ小説は人気があり、大きな影響を与える番組なので、その点には留意していただきたい。

- 連続テレビ小説「マッサン」の箸の件は現場で認識はあるのか。

(NHK側)

箸の場面は危険、行儀が悪いなどの意見を1か月に23件いただいた。そういう意見が来たことを現場にはすぐに伝えている。演出など、さまざまなことがあるので、制作現場できちんと判断していると思う。

- 連続テレビ小説「マッサン」を毎回見ている。配役が素晴らしいと思う。エリーを見ていると、日本人よりも日本人らしいところがあると感じている。どんな苦難があっても夢に向かって進んでいくという表現がされていて、好感が持てる。歌も上手で、そのうちCDが出るのかと感じた。私の家族も好感を持って視聴している。

- 10月25日(土)のE TV特集「棋士VS将棋ソフト 激闘5番勝負」を見た。コンピューターとトップ棋士たちとの対戦を記録した番組だったが、結果は4勝1敗でコンピューターが勝利した。コンピューターのソフトがすごく進歩していることがよく分かった。コンピューターがますます人間社会に深くかわり、人間に代わるような存在になれるという過程として興味深く視聴した。現在ではほとんど使われることのないような古い手をコンピューターが指し、それで勝利する。あるいは、棋士がレベルの上った将棋ソフトを使って自身の棋力アップにつなげているなど、以前では考えられないような世界、逆転の発想みたいなものがかいま見えて興味深かった。NHKの番組はありとあらゆることに詳しい制作者がそれぞれにいて、ニュースソースを探し、興味深い番組にしてくれている。ありがたいことだ。
- 11月15日(土)にE TV特集・選「鬼の散りぎわ〜文楽・竹本住大夫 最後の舞台〜」(Eテレ 後3:00~3:59)を見た。人形浄瑠璃文楽の人間国宝の竹本住大夫さんの引退を追ったドキュメントだった。竹本さんは89歳と高齢だが、活力にあふれた方だった。芸に対する厳しさ、情熱がよく捉えられていた。数か月にわたって取材をされたと思うが、竹本さんの奥さんにも取材をされ、稽古姿など、綿密な番組構成だった。本人の普段の芸にかける意気込みがよく伝わってきた。それが伝わったからこそ、引退に向けた本人の気持ちの動きなどもよく伝わった番組になったと思う。最後に引退公演の後のことにも触れていたのもよかった。引退して終わりではなく、終わった後のこともしっかりフォローされていてよい番組だった。
- 11月16日(日)のEテレセレクション・アーカイブス「E TV特集 宇沢弘文 いま再び豊かさを問う(1)~(4)」(Eテレ 前0:00~2:57)を見た。日本の知の巨人の1人である宇沢弘文さんが亡くなった後に、すばらしい番組をアーカイブスとして放送できることはNHKにしかできないことだと思った。放送することも大事だし、保存していくことがNHKの大事な使命かと思う。保存する情報量は増える一方だが、しっかり力を入れていただきたいと思う。
- 「ごちそうぐDJ」(Eテレ)を見た。音楽と料理を融合させた新感覚料理番組で、毎回DJみそしるとMCごはんというミュージシャンが料理のレシピとテーマと情景に沿って楽曲を作詞・作曲し、視聴者に提案する番組だが、大変すばらしいと思う。料理番組史上初めてレシピ解説に韻を踏むところから流れてくる映像のルーズ感、音楽のスムーズ感、見終わると清涼飲料水を飲んだかのような癒やし感があり毎回楽しく見ている。「鶏のから揚げ」(8月31日(日)Eテレ 前8:55~9:00ほか)の回では、曲中に「アイキャンフライ ユーキャンフライ 勇気と愛」と入れ、お肉をつけて寝かす時間を10分間のブレイクタイムと表現し、料理においてもフ

リースタイルを貫く感じがとても好感が持てる。この表現方法は昨今の若者には分かりやすいのではないかと思う。1つ難点は、番組の流れ、映像の奥深さ、音楽の心地よさのせいでレシピが頭に全く入ってこないところだと思う。ぜひとも「きょうの料理」のような長寿番組に育てていただきたい。

○ 趣味D o 楽「ニコライ・バーグマンが贈る 北欧スタイル 花のある暮らし」を見た。テーブルに飾るフラワーアレンジメントの番組で、大変好きだ。フラワーアレンジメントは高いセンスと専門の知識、特殊な道具が必要だとずっと敬遠していたが、一度も経験したことのない私でも作ってみたい、テーブルの上を華やかにセッティングし、お客さまを迎えてみたいと思うほど、すごくすてきな番組だ。ポイントも分かりやすく、とてもよい番組だと思う。

○ 趣味D o 楽「3か月でフルマラソン めざせ！サブ4」は始まる前から本当に3か月でフルマラソンを完走できるのかと興味を持って見た。生徒役として内藤大助さんと金田朋子さんが出演しているが、声優の金田さんの声がとても高く、番組が騒がしく感じる。内容をしっかり見て、自分のマラソンのフォームを見直したいと思って真剣に見ているが、金田さんの甲高い声で集中して見られないことは残念だ。2回分を見逃してしまったので、内容を知りたくて番組ホームページを見たが、内容はほとんど書かれていなかった。テキストがあることは知っているが、できればポイントだけでもホームページに載せてあるほうがありがたい。

○ 私は手話を勉強しているので「みんなの手話」をよく見る。長年、シリーズを見てきて、それぞれに丁寧な作りで、好感を持っている。今回はナビゲーターの三宅健さんと講師の早瀬憲太郎さんの会話にユーモアがあり、2人のやりとりを楽しみながら見ている。2人とも会話がアドリブでやっているのではないかと思うぐらい自然体だ。聴覚障害者と健常者の方が社会においてもそのように垣根がなく交流ができればよいと思うほど、2人のやりとりは心地よく、いつも楽しく見ている。番組ホームページの作りも丁寧で、手話の表現を動画で見ることができるので、おさらいをする際に役立っている。特に細かい手の動きは動画で何度も確認できるのでありがたい。「ワンポイント手話」と「NHK手話ニュース」も同じ時間帯で放送されるため、手話にたっぷり浸れる構成でよいと思う。どの番組も和やかな雰囲気、学ぶというよりもあつという間に「NHK手話ニュース」まで見終わってしまう。1つの生活番組や情報番組として視聴している感じだ。これからも期待している。

○ 「BS世界のドキュメンタリー シリーズ 壁崩壊25年 ヨーロッパは今…」

を見た。11月11日(火)の「ソビエト連邦 最後の日々」、12日(水)の「“左折禁止” 社会民主主義は退潮しているか?」、13日(木)の「ヨーロッパ 台頭するポピュリズム」、14日(金)の「スターリンの亡霊」を見たが、残念ながら放送が深夜なのでなかなか見られない。録画しておけばよいと思うが、もう少し早い時間に放送できないものか。番組は、この100年ぐらいの間の大きな転換期を迎えた世界の動向について、フランス、ドイツ、イギリスの放送局が作ったドキュメンタリーだ。もっと見やすい時間帯で放送してくれるとありがたい。

(NHK側)

「BS世界のドキュメンタリー」は、冬のスポーツ中継がない期間だけだが、翌週の午後6時から再放送をしている。

- 11月20日(木)のプレミアムヒストリー「飛鳥の大宇宙～キトラに眠るのは誰だ～」(BSプレミアム 後8:00～8:59)も興味深かった。キトラ古墳の埋葬者が誰なのかという、日本の歴史が塗り替えられるような大きな問題を取り上げていて驚いた。午後8時からの放送だったので、見やすい時間帯だった。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年10月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

10月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、17日(金)、NHK放送センターにおいて、6人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、金曜e y e「“異常気象”身近に迫る危機 ～命・暮らしを守るために～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

<金曜e y e「“異常気象”身近に迫る危機 ～命・暮らしを守るために～」
（総合 9月26日(金)放送）について>

- 防災の専門家として複雑な心境で視聴した。気になる点がいくつかあった。番組では、視聴者が撮影した映像を紹介していたが、危険が身近なところにあるということも分かったし、迫力も伝わったと思うが、一方で危険がすぐそこにある状況にもかかわらず、撮影し続けた行為が危険であるということもある。番組の趣旨とその意図は十分に理解できるが、今後も素人がスクープをねらって撮影に夢中になり、逃げ遅れる危険性を助長してしまうかもしれないと思った。視聴者の映像、特に自然災害のスクープを取り扱う際にはわざわざ撮影することにならないように、「身を守る行動を優先してください」といったフォローコメントがあれば解決できると思う。また、スタジオ出演していた気候学の専門家の解説が的を射ていなかったことも気になった。質問の投げかけ方が悪いのか、そもそもの台本の構成なのかは分からないが、本来の専門性が十分に引き出されていなかったのではないかと思った。

異常気象は何が原因なのかという問いについて、明確に答えていない点が気になった。また個人でできる対策として、大雨の際に、「風呂の水を流すな」とコメントしていたが、下水の排除方法には汚水と雨水を1つの管で流す合流方式、汚水と雨水を別々の管で流す分流方式があり、紹介された対策にすべてが当てはまるとは限らない。番組の最後に、自治体の方からのツイッターで、それを指摘するコメントが紹介されたのでよかったが、もしその指摘コメントがなければ排水システムを理解しないままに、風呂の水を流さなければよいというようなことを多くの視聴者に伝えていたのでないかと危うさを感じた。事前に台本等でどのようなコメントになるのか精査していないのか、もしくは予定にないことを突発的に話したのかもしれないが、その後の専門家のコメントの信頼性に不安を感じたのも事実だ。また、スタジオの話の流れと、そのあと流されるVTRとの内容の結び付きがかみ合っていない印象も持った。竜巻の防災は科学的な知見では発展途上のため、現状では防災面でできることや伝えられることは限られているが、それでも専門家2人があやふやな回答をして終わってしまったのは残念だった。全体を通し、意識啓発にはとても役に立つ番組だと思うが、ゲスト、視聴者の質問に対しての答えが適応していないところが少なからず見受けられ、その点は改良の余地があると思った。救いだったのは、ゲストの的場浩司さん、ベッキーさんのコメントが的を射ていたことだ。2人がゲストで本当によかったと思った。

- 前回の審議会で異常気象について、最近の進んだ科学技術、情報収集とそれを解析する能力を持って、攻めの防災に取り組んでいかなければいけないし、そういう時にNHKの役割も重要だという趣旨の発言をした。その話に应运えていただいたようなテーマであったため、興味深く視聴した。番組で、東京都の下水道局の職員がVTR出演していたが、施設の説明がとても分かりやすかった。1時間50ml程度の雨には、都市はある程度対応できるが、それを超えると下水道管の能力を超えてしまう様子も紹介されていた。アンダーパス構造の道路が冠水しやすいことは昔から分かっていたことだが、普通の道路でも冠水が頻発する現在、きちんとした対応を取らなければいけないと思った。その対策にどのような回答が番組の中で得られるのかと注目していたが、専門家のコメントについてはもっと納得がいく、専門という立場での回答をしてほしかった。一方、ゲストの的場浩司さんは積極的に対応していこうというコメントを多く発しており大変よかった。下水道の負担を少しでも減らすために、個々の住宅で雨水をため、都市に小さなダムをたくさん造ろうという発想は、きっと効果があると思った。日本はごみの分別問題や河川の汚染問題についても、どうにもならない状況からかなり改善してきた。多くの人が力を合わせると相当なことができるのと特に若い世代は実感している。こういった取り組みをうまく普及させるとよいと思った。自宅に貯水タンクを設置している一般市民と

して、生命科学で著名な中村桂子さんがさりげなく出演していたが、中村桂子さんがどういった方かを紹介していれば、著名な方も取り組んでいるという意味でよりインパクトもあり、普及につながるのではと思った。土砂災害については、80mm、100mm という雨が数時間降ると想定外の状況が起こることは、最近の例を見てもよく分かる。日本の各地で土砂災害の危険箇所があると番組で伝えていたが、現実にかかるという緊張感、危機感を感じた。NHKが開発した「DIGITALEARTH」を紹介していたが、今後、風がどう動くか、雨がどれぐらいたまるかも紹介できるようになるのではないかなと思う。台風19号の報道を見てみると、以前と違う風の動きや雨量の蓄積がとても分かりやすく表現されていた。最近の気象情報が日々進化しているのを番組で見せてもらったが、新技術、分かりやすい方法も使いながら国民の意識を変え、今までと違うということをいろいろな形で知らせてもらえるきっかけにこの番組はなったと思う。最近は大災害が多いこともあり、防災は以前よりかなり高く意識されるようになった。攻めの防災と言うと、ことばが適当でないかもしれないが、そういう時代に技術、データの蓄積をうまく活用した番組を制作してほしい。いろいろな地域でも、防災について協議されていると思うが、その際に教材として利用できるような番組も制作してほしい。

- 竜巻について述べたい。台風17号が四国沖にあったにもかかわらず、600km離れた栃木県で竜巻が起きた。その状況から、竜巻はまだ予知が難しいと思った。今回の竜巻では民家の屋根が飛び、農業施設にも大きな被害が出た。2月の大雪で被害を受け、ある程度復興したときに竜巻で被害を受けた農家もある。大きな被害の予知は難しいが、今回の番組のように大雨、土砂災害も含め、NHKが取り上げ、住民に情報として流していただけるのは非常にありがたい。土砂災害では群馬県下仁田町の取り組みが紹介されていた。最近はその地域でも、近隣の人との付き合いが薄くなったと感じているが、そんな中、住民同士で協力し合い、防災に対応するこういった仕組みづくりは大変参考になると思う。カップ雨量計などの身近で誰でもできることに意識を持って取り組んでもらい、大雨による災害への危機意識も啓発したい。番組全体としては、日本での異常気象の状況が分かりやすく説明されていた。異常気象の原因は地球温暖化という話があるが、たしかに竜巻などは数年前まで大きなものは経験がなかった。今後は、国民が異常気象の原因をもっと理解し、異常気象に対してできることがないかというところまで突っ込んだ話があればよいと思う。次の機会にそういう取り上げ方もしてもらえれば、視聴者も関心を持って見るのではないかなと思う。

- 表現が適切かどうか分からないが、楽しくさらっと視聴できてしまった。「“異常気象” 身近に迫る危機」という番組なのに、番組全体のトーンやアナウンサーの

雰囲気が高めで、逆にゲストの的場浩司さん、ベッキーさんのほうが落ち着いていたというイメージを持った。下仁田町の方や都市部の方も紹介され、身近という感じはあったが、それだけに若干危機感が薄れてしまった感じがする。マンホールから水が噴き出す映像や竜巻の映像は衝撃的で、引き込まれるものがあったが、異常気象の理由づけや裏打ちの説明がなく、最後まで興味深く見るというより、さらっと見られたところに逆に違和感を覚えた。番組自体は、幅広く見ていただくという観点でいえば視聴しやすく、いろいろな方に見ていただけたのではないかと思う。

- 身近に迫る危機ということだが、異常気象は自分で防げないため、異常気象が来たときにどう予防できるか、その予兆をどう知るかが重要だと思った。広島土砂災害の際も被害に遭われた方は「生臭い臭いがした」という証言をされていた。いろいろな技術は進んでいるが、カップ雨量計も含め、ローテクで予兆を把握することが重要だと思った。竜巻の予兆では急に寒くなるなどの話があったが、降水量が異常になる場合などの予兆をいかにローテクで把握するか。下仁田町のように、地域ぐるみでそういうことができればよいが、全員ができるわけでもないので、個人で予兆を知ることがどうできるのかがいちばん知りたかったところだ。異常気象は我々にコントロールできないことであるから、どうしたら避けられるのかに重点を置き、勉強になるような知識を提供してくれればと思った。いつもマンホールから水が噴き出す映像を見て思うのは、東京の地下水位がすごく上がっていることだ。例えば総武線の東京駅はアンカーで引っ張って浮かないように止めているのが実情だ。東京の中の水環境は、以前と比較しかなり変わっていることをこれから取り上げてほしい。東京駅が浮きそうになってかなり苦勞しているのは最近の話ではない。都市を取り巻く水環境がかなり変化していることも取り上げてほしいと思った。
- 視聴者が撮影した映像を見て、危険と隣り合わせだと感じた。映像を紹介するときに視聴者撮影というクレジットの場合と個人名が入っているクレジットの場合と2通りあった。どちらがいいのかというのは分からないが、名前が出てしまうと、本人も名前がNHKに出たということでまた頑張って映像を撮影しようとしてしまわないかと思った。個人名を出す必要がどこまであるのかということもあるし、公平中立ということも考え、悪影響を及ぼさないという意味でも表記については工夫をしてほしいと思った。全体の番組構成は盛りだくさんだったと思う。よくいえば盛りだくさんだが、悪くいえば何が核にあったのかがよく分からなかったという印象だ。ちょうど同じ時期に「NHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃」を放送していて、科学的な所見を紹介し、新しい知見を皆さんに伝えるというところに徹底していた。今回の番組は視聴者からの映像を中核に置きながらも、内水氾濫の仕組みの科学的な根拠を紹介したり、個人の取

り組みと行政の支援の問題、地権者という社会的な問題も捉えていた。また、住民の取り組みについても紹介していた。取り上げたテーマがバラエティに富んでいるというよりも、私には見えて何が肝だったのかがはっきりと捉えられなかった。番組の冒頭で住民の取り組みが始まっているという紹介があったが、やはりどのようにして被害を少なくするのが、視聴者に伝えるべきことではないかと思う。次回は住民の取り組みについていくつか事例を集め、それをお手本として紹介し、それがきっかけになって各地域の取り組みが広がるような番組を制作してほしい。

(NHK側)

貴重なご指摘をいただいた。気象のメカニズムについて中途半端な回答ではなかったかというご指摘もあったが、メカニズムよりは住民の目線でどうしたらよいのかということになるべく応えようという趣旨があり、その部分は簡略化してしまった。多くの視聴者が「NHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃」を見たとは限らないので、その辺りはもう少し加えてもよかったのかという反省が放送直後にあった。視聴者からの映像を使用する場合、一人一人と連絡を取り、希望があった場合に名前を入れさせていただく形を取っている。撮影にあたっては、危険性もあると思うので、扱い・表記については以後十分に検討する。今回は生放送だったが、台本でこういう趣旨のことは伝えるというものを用意したが、生で視聴者から寄せられる疑問の声に余すことなく答えようということでチャレンジした番組だ。そういう意味で風呂の水の件など、不十分で、答えきれないところもあったかと思う。そういうこともどうするかを含め、今後検討する。

- 視聴者からの投稿映像は現実に災害体験をした生の声が入っていて危機感が身に迫ってきて、あらためて自然災害の恐ろしさを感じた。情報の敏速化、すなわち確実な情報を短時間に多くの人々に伝えるメディアの重要性を感じるとともに、そのようなときこそ視聴者からの情報が多くの人々の命を救うことにつながると感じた。現実に起きている自然災害（集中豪雨・竜巻・突風）のほか、火山列島日本の抱える地震・火山災害なども含め、それぞれ、その土地で考えられる自然災害に対して群馬県下仁田町で使用しているような「防災マップ」を普及させて、一目で分かりやすい方法を考えてほしいと思う。 また、データ放送で非常時の防災対策について、定期的に「自分の身のまわりで出来る」防災のノウハウを放送したらど

うか。防災対策には地域のコミュニティーが重要になっている。高齢者はLINE、メールが使えない現実がある。テレビ、ラジオの重要性が考えられるのでその点も十分に考慮した放送に期待する。旅先や出張先での自然災害という場合も多く考えられ、帰宅難民というパターンもある。そのような特異な場合の防災情報の取得方法なども日常的に放送してくれるとよいと思う。自然災害に関しての放送は、今後重要になっていくと思うが、恐怖心ばかりをあおっても不安感がまん延して、特に高齢者の日常の生活を縮小ぎみにしてしまうことも考えられる。その点、番組の放送時間や頻度に十分配慮が必要となってくると思う。

- 短時間での大雨、大規模な土砂災害、竜巻など、まさに異常としか言えないようなことが身近に起きる昨今、気象についての新しい知識と、新たな防災の常識を身に付けなければ、身を守れないと実感している。そんな中で、この番組は、視聴者からの臨場感ある投稿映像で構成し、行政や気象庁などの専門的な取り組みや解説と合わせて、地域住民独自の取り組みも紹介しており、異常気象への対応について多角的な視点を与えてくれた。中でも、身近な地域での取り組み（例：下仁田町の行政の指示待ちではない独自の防災の取り組み）や、家庭でのささやかな取り組み（各戸で水をためる、豪雨中は風呂水を流さない等）が意外に効果があることなどが印象に残った。防災と言うと、どうしても行政や気象庁、報道などに情報提供や避難の判断等を頼りがちだが、それだけではだめで、一人一人が五感を研ぎ澄まして身の回りの状況や環境の変化を見逃さないようにすることや、地域ぐるみで日常的な準備や対策を重ね、個別の判断力を磨いておくことが、結局は身を守ることにつながることを、本番組を視聴しながら実感した。ただひとつ気になったのは、下仁田町の方々と生中継している折、スタジオからのゲストの質問と地元の方の答えがかみ合っていない場面があったこと。こうしたことは生放送ではよくあるのかもしれないが、せっかくよい取り組みをしていて、唯一生中継をしている場所だったのだから、もう少し何とかならなかったのだろうか。ゲストの質問は恐らく台本があるのだろうかから、できれば事前に先方（特にご高齢の方）に質問の趣旨を伝えておいて、うまく発言を引き出せるように準備してあげる方が親切だったのではないか。（準備しても生放送の緊張であんなった、ということもあるのだろうが…）また、町内会長の奥さんに対しての質問が「ダンナさん、かっこいいでしょう」と言うのは、少々お粗末では。せっかく地域のよい取り組みなので、女性の立場からの工夫や苦労等何か発言を引き出してあげられた方がよかったと思う。

<放送番組一般について>

- 「ドキュメント72時間」は作り込みがなく、ただ撮影し、どんな人にもドラマ

があるというメッセージが伝わり、大変よい番組だと思う。9月8日(月)の「夏・原発に一番近い駅」は、人がいない、荒涼とした感じが伝わってきて、リアリティを感じた。よく取材したと思った。10月10日(金)の「ディープ浅草・真夜中の喫茶店」は、たまたまそこで出会った人たちがどういうことを話し、どういう人生なのかがドラマチックに描かれており大変よかった。

- 10月12日(日)のNHKアーカイブス「シリーズ1964 第4回モノづくり 大国への道～新幹線を生んだ技術者魂～」は、内容はプロジェクトX～挑戦者たち～「新幹線～執念の弾丸列車～」という番組の再放送だったが、「プロジェクトX～挑戦者たち～」を見て、田口トモロヲさんのナレーションはしみじみと感じると、改めて思った。制作当時いろいろな工夫をされたと思うが、今見てもぐっとくるような作り方で、秀逸な番組だったと改めて思った。番組自体は「シリーズ1964」ということでシリーズものになっているようだった。私はこの回しか見ていないが、「プロジェクトX～挑戦者たち～」の再放送の前後に導入部と後半のまとめ部がうまく入っていて、新幹線に限らず広い話になっていた。作りも工夫されていると感じた。ゲストの国立科学博物館の鈴木一義さんのコメントに勇気づけられた。昔なぜそういうことができたのかと聞かれたときに当時の経営者の判断、戦中から続く技術力の蓄積と言いながらも、昔できたのだから今もできるはずだと言っていたのは番組を見ている側としてはぐっときたし、そういうメッセージはぜひ伝えていただきたいと思った。単なる再放送の枠を超え、よく構成された番組だったと思う。

- 10月12日(日)のマサカメTV「新幹線にまつわるまさかの目のつけどころ！」は、NHKアーカイブス「シリーズ1964 第4回モノづくり 大国への道」と比べると、伝え方がこうも違うものかと実感した。新幹線の技術の話でテーマは同じだったが、「マサカメTV」は技術者の苦労みたいなものがほとんど触れられず、新幹線は思いついたのでできてしまったという感じの伝え方だった。番組の構成が違うと思うが、技術開発でも伝え方でこれだけ伝わり方が違うのかとしみじみと実感した。

- 連続テレビ小説「マッサン」は私の周りでもとても評判がよく、楽しく見ている人が多い。私はドラマのモデルになった竹鶴政孝さんのことを仕事柄よく承知している。余市にも行っていろいろ見せていただいたこともあり、ドラマを楽しく見ている。今、竹鶴のウイスキーが手に入りづらくなっているそうで、出荷調整が入るほど人気が出ているそう。バーで若い女性が「マッサン割り」と言いながら竹鶴ウイスキーを飲んでいるのを見ると、NHKのドラマの効果ではないかと感じる。

- 連続テレビ小説「マッサン」は大好きだ。エリー役のシャーロット・ケイト・フォックスさんがドラマの魅力になっていると感じる。日本のあの時代に暮らすことに一生懸命に向き合おうとする姿に、今失われつつあるけなげさ、夫婦の愛、仲のよさなど見ていて心が温かくなる。これから夢を実現するまでにどのような展開があるのか目が離せない。一方で前回の内容を繰り返し見せられるところをしつこいと思うこともあるが、これからの放送を楽しみにしている。
- 連続テレビ小説「マッサン」は、最初は民放のドラマのように、泉ピン子さんの嫁いじめのような話になるのかと思ったが、全く違った。エリーのよい意味で空気を読まない反応に好感がもてると思った。題字も「マッサン」と書いてあるだけだが、私には大変好感が持てる。これからも応援したい。
- 9月24日(水)の「ライド ライド ライド～栃木発地域ドラマ～」(BSプレミアム 後 10:00～10:59)を見た。那須地域は原発の風評被害で観光客もかなり減り、最近は厳しいという話をよく聞く。そういう中でこの地域を取り上げてもらったことは地域の人にとってもよかったと感じる。那須のすばらしい景色、緑もあり、酪農家が多い地域でそういう人たちも出演していてよかった。地元信用金庫の平井守が融資に失敗し、自信をなくし、地元の自転車チームの那須ベンガーズの再生に取り組むことによって自信を取り戻すという話だったが、いろいろな面で前向きにチャレンジしていくことが大きいということが視聴者に伝わったと感じる。今は地域創生が言われているが、小さな地域にスポットを当て、地域の特色を表現できる番組はNHKならではの番組制作だと思う。小さな地域、そこに住む人たちが前向きに努力している、チャレンジしている部分をもっと取り上げてくれれば、地域創生にも役に立つと感じた。放送時間が短かったせいか、番組に厚みがなかったようにも感じたが、地域をうまく表現していたと感じた。
- 10月4日(土)のETV特集「沖縄 島言葉(しまくとぅば)の楽園」を見た。本番組を通し、沖縄の各島の言葉が、方言としてではなく1つの言語としてその廃絶が危惧され、今、海外の言語学界から注目されていることを初めて知った。今や高齢者しか話せなくなった沖縄の島々の言葉。それが「方言」ではなく実は独立した「言語」であるという視点に、まず驚かされた。そして、言葉の多様性は多様で豊かな価値観をもたらすこと、言葉は人々の世界観、その土地の自然や文化と深く結びついて存在していること、だから1つの言語の消滅は1つの世界が消えて行くことなどが、丁寧に紹介され、心に響いた。後半、独自の言語を維持するため「母語での教育を受ける権利」について紹介されていた。海外での、やはり廃絶が危惧された言語についての教育の取り組みも紹介され、沖縄での教育現場でのウチナーグチ教育も紹介され

た。本来の母語を話し、それを次世代へ伝えていくことは、確かにどんな民族にとっても自らの文化の問題であり、尊重されるべきものだ。目を開かれる思いだった。

- 「すてきにハンドメイド」については、以前も指摘したが、今回も指摘させていただく。9月30日（火）の「コットンパンツでリメイクバッグ」の回だが、中山エミリさんの発言は日本語がおかしく、とても気になった。「ぜんぜん同じなのに」「チノパン」「メモリました」ということばを使われた。中山さんはゲストではあるが、しっかり指導すべきでないかと思った。生放送ではないのであれば直せると思う。私もそうだが、仕事のうえでの親しみやすさとなれなれしさは違うといつも意識している。現場の方にもことば遣い、正しい日本語について、しっかり指導していただきたいと思う。また、説明しているときに裏方が机を動かしたのか、ガタッと大きな音がしたり、説明するときには内容、タイミングを間違えたのか、「すみません」という裏方らしい声も聞こえた。それをそのまま放送しているのが見るに耐えない雑な作りだ。放送時間の長い、短いにかかわらず、放送の質を落とさないように心がけていただきたい。

（NHK側） 「すてきにハンドメイド」に対し厳しい指摘をいただいた。ご指摘いただいた回をよく見たうえで制作現場と話し合い、対処する。個人によって感じ方も違うが、基本的に裏方がガタガタするようなところは出さないのがプロとして当たり前のことだと思う。

- BS1の「BSニュース」が好きだ。ニュースの内容がタイムリーであり、ほかの番組よりも分かりやすくいろいろと多くの情報を伝えていると思う。ニュース番組の中では「BSニュース」がいちばん好きだ。
- 10月10日（金）は東京オリンピックの開会式から50年ということで、それに関する番組がいろいろな形で放送された。「ひるまえほっと」に伊東四朗さんがゲストで登場していたが、ほかの出演者は東京オリンピックをリアルで知らない世代の方々に、伊東さんだけが体験されており、当時の様子を語るひと言ひと言が私のような世代には懐かしく聞こえた。夜には「1964から2020へ オリンピックをデザインした男たち」（BS1 後9:00～9:49）をととても興味深く視聴した。当時、私は小学生だったが、鮮明にポスターも覚えているし、そのほかのいろいろな競技のシンボルマークも覚えている。学校のクラスでもオリンピックのさまざまな話題が出るなど、東京オリンピックに向けいろいろなことが行われた時代だった。大変な事業に向かい、戦後からの脱却ということで日本がひとつになっていたと思

う。今ではシンボルマークは大会ごとに当たり前のように見るが、東京が最初に採用したと聞いて非常に驚いた。マーク自体が強烈なインパクトで、今でもよく覚えている。誕生秘話の再現ドラマはとても印象的だった。デザインの意識が全くない中、最後にできあがったデザインについて著作権を放棄するという文書にサインさせられ「世界のためだから」というひと言で話が進んでいたが、まさに当時はそうだったのだと改めて隔世の感を持った。いろいろなことを知っていたつもりだったが、知らないことがたくさん紹介されており、好奇心を沸き立たせてくれ、うれしかった。石津謙介さんや柳宗理さん、岡本太郎さん、横尾忠則さんなど、デザイナーもそれぞれ第一線で活躍される方々が結集され、日本が国際社会で通用するために精一杯立ち向かった形がよく描かれていた。2020年の東京オリンピックは時代背景が全く違うので同じようなことを求める気はないが、2020年なりの日本の総力、知恵、感覚を結集し、2020年はよかったといろいろな方がいろいろな形で思い出せ、語り合えるようなよい大会にしてくれたらと思う。NHKの役割はいろいろな意味で重大だと思う。

- 10月5日(日)に「秋空に舞う！日本一の花火～第83回土浦全国花火競技大会～」(BSプレミアム 後11:00～6日(月)前0:00)を見た。秋田の大曲や土浦の花火は花火師が精魂を込めている大会で、機会があれば見に行くようにしているが、最近は行けないことが多いためテレビでの中継を楽しみにしている。花火大会の模様を撮影するのは、夜であるということと、リハーサル等もないため大変難しいと思うが、この番組では花火のよさを上手に伝えていた。特にゲストで演出家の宮本亜門さんの説明がとてもの的確で、今まで見た花火中継の解説の中でも秀逸だった。色の変化、めりはり、起承転結、ストーリー性など、最近の進化した花火の世界が的確に感じられ、語彙も豊富で、すばらしい解説だった。カメラワークは花火にある程度集中しつつも、見るほうはそんなに単調にならずに見ることができた。花火自体もレベルの高いものがたくさん登場し、大変満足した。花火大会は現場で音を聞きながら見るのとは迫力が全く違うため、番組にするのは二の足を踏むかもしれないが、こういったレベルの高いものについては継続していただきたい。

- 10月第2週の「新日本風土記」は番組改定の時期だからか、過去の番組を「選」という形で放送していた。私は見ていなかった回だったのでうれしかったが、少々残念に思った。

(NHK側)

「新日本風土記」の再放送の件だが、10月10日(金)は各波を越えて東京にまつわる話を集中編成した。そのときに

かつて放送した「東京の夜」をお送りした。10月のそのほかの4週は新作を編成している。

- 10月13日(月)には「今日は一日“N響”三昧」(FM 後 0:30~6:50、7:30~10:45)が放送された。らじる★らじるで、スマートフォンから聴いていたが、スマートフォンの画面に、放送する曲目の一覧は表示されるが、どう操作しても今流れている曲の題名が分からなかった。自宅でのネットへの接続が悪く、途中で切れることもあり、曲紹介が飛んでしまったときに聴いただけでは題名が分からないままになってしまうことが何回かあった。今流れている曲がどうすれば分かるのか教えていただけるとありがたい。

(NHK側)

「らじる★らじる」では、番組表で音楽番組を選択すると曲目一覧などが表示されるようにはなっているが、今流れている曲に連動してその曲名を表示するような仕組みにはなっていない。

- 10月6日(月)の台風18号の報道についてだが、午前10時台のニュース「台風18号」関連の報道で渋谷駅と東京駅の中継をしていた。2人のアナウンサーの格好が真逆だったのが印象的で、渋谷駅の中継ではヘルメットを着用せず傘を差しており、東京駅の中継ではヘルメットを着用し傘を差さず、レインウェアを着用していた。東京駅では「今日は傘でなく、レインウェアを着たほうがよいと思います」とコメントをしていた。報道者の安全を守ることが第一義だと思う。台風では折れた樹木、看板などの飛来物の恐れがあるので、傘ではなく、ヘルメットの着用、レインウェアの着用での中継が当然のことかと思う。それができていた東京駅のアナウンサーを含むクルーとそれを指摘せずそのまま放送した渋谷駅のクルーには意識の差があるのか、NHKの災害時の報道態勢が統一されていないのかといろいろ考えた。台風等の自然災害の報道についてはアナウンサーの安全をしっかりと確保できるような態勢で報道していただければ、見ているほうも不安に思わなくてよいと思う。

(NHK側)

台風報道の際のヘルメット着用についてだが、どういうときにヘルメットを着けるかはリポートする場所の状況、周りに通行人がいるときの様子がどうなのかで個々に判断するケースが多い。台風18号のときにはリポートする場所に

よって対応が違っていただけるところはあると思う。台風
19号では台風の影響が及んでいる地域で顔を出しリポート
する場合、原則としてヘルメットを着用するようにという形
で対応した。

- この番組審議会でも何度も災害の報道についていろいろな意見が出ている。先月の視聴者意向を確認していて気づかされたことがある。8月の広島県の土砂災害の際に「第96回 全国高校野球選手権大会」をEテレに移し、総合テレビでは土砂災害の報道をした。そのことに対し、少なからぬ意見の中に「Eテレで見たかった番組が見られなくなって困った」というものがあり、気にとまった。最近では、地元自治体の災害情報メールを登録していると携帯電話にメールが次々着信するし、自治体も避難情報などを前倒しで出すようになったと思う。おおかみ少年のぐう話ではないが、そういうことが重なると、受け取る側がまひをし、まともに受け取れなくなってしまったことも将来起こりうるのではないかと。災害の報道について適切に、適切な人に、適切な時間に伝えることは大切だと改めて思った。広島県の土砂災害のことをよく考えると、たとえば広島県の災害のことは岐阜県の方はあまり関心がなく、報道として見ていた方が多かったのではないかと。御嶽山の噴火を広島県の方は報道として見るが、災害情報として見ていたかどうかということがある。そういうことを考えると災害があると全部災害情報に切り替え、全国へ流すことが本当に適当なのか、ではどう伝えればよいのかいろいろ考えた。地デジはマルチチャンネル化されているが、その仕組みをうまく使えないかと思った。メインチャンネルでは通常番組を放送し、災害情報はサブチャンネルで流しているというスーパーを出すということも可能だと思う。ハイビジョンで録画したかった、スーパーが入るのは嫌という視聴者も中にはいるかもしれないが、もともと見たい番組が見られないことに比べれば大きな問題にならないのではないかと。意見の中にも島しょ部の方が自分の島の天気情報が一切流れなかったという意見もあった。そういうものもマルチチャンネルを使うと島の天気情報も大きな災害については流すことができるようになるのではないかと素人ながらに思った。いずれにしても災害の報道はどのような方法がよいのか常に見直していただき、世の中にプラスになるように模索していただきたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年9月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

9月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、19日(金)、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成26年度後半期の国内放送番組の編成について、説明があり、平成27年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。その後、「目撃！日本列島エレベーターで宇宙へ～サラリーマンたち 夢への挑戦～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	大山 寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（(株)危機管理教育研究所代表）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（(有)古沢園代表取締役）
	山口 晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

<平成26年度後半期の国内放送番組の編成について

および平成27年度の番組改定へ向けた意見聴取について>

- ワンセグ独自サービスの「青山ワンセグ開発」で制作された番組は、深夜の時間帯などで放送してもらえると、そのときに見て関心を持ってもらえることもあるかと思う。

- Eテレの新番組「はりきり体育ノ介」は、小学校でのタブレットP Cを使った授業のための番組ということだが、興味深い。Eテレは、夜中に放送している、「10min. ボックス」など、いろいろな切り口で教育用の番組、学校の授業で使える番組を制作している。なかなか視聴者には気づいてもらえないかもしれないが、時代に即応したものを開発することは非常に重要だと感じる。体育の授業にタブレットP Cというのは想像がつかないが、いろいろな切り口の教育番組を放送していることを視聴者が知る機会があれば、他の教育番組との連動性が出てくると思う。そうしたつながりが持てるとおもしろいのではないか。
- 昨年度好評だったもの、これまでに好評だったものが、再度編成されるケースがわりと多く見受けられるが、新しい番組もあるとよいと思う。また、BSプレミアムなどで番組宣伝の番組が多く放送されているが、適切な頻度でお願いしたい。番組を周知することと番組宣伝をすることのバランスに工夫があるとよいと思う。
- 後半期に新しい番組がどんどん登場する感じを受けた。子どもたちにタブレットP Cで体育の授業を行う番組というのは、新しい取り組みとして興味深く感じた。逆上がりができない子どもにも、何が問題なのかが分かりやすく伝わる番組になればと思う。子どもたちがI Tを通じて、関心を広げることは時代の先取りで、すばらしい番組になると感じた。
- たくさんの視聴者がいろいろな立場でいろいろな意見を寄せていて、それを反映しながらの編成だと思うが、バランスが取れているよく出来た編成だと思う。先日、関東地方で強い地震があったが、かなり短い時間で実際に街に入っただけの取材を放送していた印象で、態勢がすばらしかったと思う。災害がいつどんな形で起こるかわからない時代だ。NHKの番組は皆が頼りにし、そこから情報を取ることが常になっている。その辺りもしっかりやっていただくことを織り込みながら、進めてもらえると大変よいと思う。
- 大変期待している。特に連続テレビ小説「マッサン」は、予告編を少し見たがとてもおもしろいと思う。「ファミリーヒストリー」は、家族は大事な核だと思うので期待している。音楽が好きなので「亀田音楽専門学校」はおもしろい番組になるのではないかなと思う。岡田准一さんの「ザ・プロファイラー ～夢と野望の人生～」はとてもおもしろい企画ではないか。「世界入りにくい居酒屋」は、入りにくい居酒屋とはどんなものなのか、ぜひ見てみたいと思う。時代の要求に合った番組を編成されていて、さすがNHKだと思う。

- 新しく始まる番組もそうだが、一度終わって再度採択された番組もあり、楽しみな構成だと思った。新しく始まる番組ではEテレの「しごとの基礎英語」があるが、もう一度英語を頑張ろうかという気持ちになった。
- 学校放送枠の中で「学ぼうBOSA I」があるが、前回の番組審議会でもお願いしたように、防犯、いじめ、生活事故も含め、子どもが安全について学べるようなもう少し幅広い視点の番組づくりができるとういと思う。来年度に期待したい。
- 将来的なことだが、東日本大震災関連の番組を今後どうしていくのかは、悩みどころかと感じる。やめてしまうと批判があるだろうし、続けるにしてもどこかで見切りをつけなければいけない。そろそろ考えなくてはいけないかと感じた。ラジオ第2の「視覚障害ナビ・ラジオ」のタイトルについてだが、私たちは大学で「障がい」と書くようにしており、マイナスのイメージの「障害」は使用しない。その表現で大丈夫なのかが気になったので確認していただきたい。例えば、海外では「Physically challenged」というようなポジティブな表現に替わってきている。むしろNHKだからこそ、積極的に違う表現を使ってもよいのではないか。

(NHK側)

視覚障害者団体にも相談したが、「障害」の文字については問題と思っていないとのことだった。文字を変えたからと言って問題は解決しない。放送で伝えてほしいのは、取り巻く社会に「障害がある」ということ、この障害を取り除こうということだと言っていた。このような反応を受け、番組タイトルに、国の文書で使われる「障害」の文字を使用した。今後状況が変われば、それに応じて対応していきたいと思う。

- 全体的によくまとまっていると思う。「5分でわかる『花燃ゆ』」と「5分で『マッサン』」などはダイジェスト番組とのことだが、今まで「Nスペ5min.」が放送されていたように、今回もそういう形で視聴者の方によく分かっていただくのによりい機会かと思う。「NHKは番組宣伝が多い」という話を私もちらほら聞くので、5分でもしっかりよい番組にしていきたいと思う。

(NHK側)

番組の宣伝が多すぎるというご意見について。NHKの場合CMがないので、ステーションブレイクを挟むことで緊急ニュースなどに対応する枠を確保している面もある。また、

さまざまな調査で、新たに始まる番組などを周知するのに最も効果的なのは、新聞や情報誌やインターネットなどではなく、放送で流す番組スポットであるとの結果が出ている。今後もバランスに気をつけながら編成していくつもりだが、そういう事情があることもご承知おきいただきたい。

- 時々、子どもと一緒にNHKのアニメを視聴するが、Eテレを見ていると幼稚園、小学校低学年向けのアニメが多い。総合テレビでは「団地ともお」があるが、対象年齢がよく分からない。先日、「アニメーションは七色の夢を見る 宮崎吾朗と米林宏昌」（総合 8月8日(金)後10:00～11:13)を見たが、BSプレミアムで宮崎吾朗さんが監督を務める「山賊の娘ローニャ」を放送するとのことだった。これは、BSプレミアムだけでなく、地上波でもいずれ放送してほしい。今回はBSプレミアムで先行して放送するのかもしれないが、大人でも見られる品質の高いアニメとして、地上波でも放送していただければありがたい。

<目撃！日本列島「エレベーターで宇宙へ～サラリーマンたち 夢への挑戦～」

(総合 8月30日(土)放送) について>

- 「エレベーターで宇宙へ」という大変インパクトのあるタイトルで、興味深く視聴した。昔、科学雑誌が何かで、将来宇宙へエレベーターで行けるようになると見たような気がするが、現実にはNHKが番組を制作する状況にまでなっていることに大変驚いたし、興味深かった。宇宙エレベーターの大会が開かれていて、19チームが参加し、技術を披露し合っていることも興味深い情報だった。「チーム奥澤」の4人は情熱とロマンを持ちながら、まさに夢を追いかけしており、生き生きと、はつらつとした表情や生活ぶりがうまく記録されていた。特にプログラムを担当している飯田幸孝さんの妻が、夫が夢を追っている姿に共感し、サポートしているのもとてもよい感じだった。番組としては、宇宙エレベーター構想が最近どうして実現の可能性が高まったのか、以前はハードルが高かったものが現実味を帯びているという背景を誰でも分かるようにコンパクトに説明していると、さらに迫力が出了気がする。また、宇宙までエレベーターで行くとなると、空気はどうなるのか、ケーブルはどう張るのか、飛行機はぶつからないのか、雷が落ちたらどうするのか、強風が吹いたらどうなるのかなど、素朴な疑問がいくつもあると思う。そういった疑問のいくつかを例に挙げ、対策や課題などにも触れてもらえれば、見終わったあとに納得感が得られたと思う。情熱を持っている人が壮大な夢を追いかけいているというヒューマンドキュメンタリーとしては、伝わるものがあったと思う。

○ 4人の男性がそれぞれの専門分野の知識を生かし、壮大な夢物語に挑戦しており、男のロマンを感じた。夢物語ではあるが、実際に関わっている人の情熱をしっかり捉えており、ただの夢ではなく、かなり科学的にそれぞれの分野で問題などをクリアし、2,400メートルまで行くことに成功したというのは興味深かった。また、そういうことに取り組んでいる人たちがいることにも驚いた。風による影響の問題、大気圏の問題、重量の問題など、いろいろクリアしなければならない問題、現実にかかる物理的な困難みたいなものが多々あると思うが、そういう夢物語もあってよいのではないか。しかも、単なる夢でなく、100年後、50年後ぐらいに実現するかもしれない。大変興味深かった。

○ 宇宙エレベーター構想の話が世の中に出たとき、雲をつかむような話だと思った。今回の番組で実現可能な技術だと感じたが、内容を見ると、実現可能とはいえ、実現までにどれほどの年月がかかるのか、やはり遠い夢なのだと感じた。しかし、人間はこれまであきらめずに開発をしてきたから、航空機、海底トンネルなどの今日の発展がある。私が生きている間には無理でも、未来では当たり前となるかもしれない宇宙エレベーター技術がこの時代から始まったという現場を見られたのはうれしい限りだ。細かいことだが、冒頭のナレーションで「不思議な機械が空へ向かって飛んでいきます」とあったが、エレベーターはフライヤーでなく、クライマーなので、飛ぶという表現は違和感があった。「空へ向かって進んでいます」「上昇しています」のほうが、現実にはベルトを滑って上昇している状況に合っているのではないかと思った。また、基本的なこととして、宇宙エレベーター構想とはどういうものなのかを簡単によいので説明があるとよかった。宇宙エレベーター構想について、初めて聞く人にとっては、よく分からないままに番組が始まったという印象になったと思う。大会に向けた目標として2,400メートルを掲げていたが、それまでの2倍の距離を達成するという目標がどれほど難しいものであるのかについても補足説明があれば、研究開発の苦労、努力が視聴者により伝わったのではないか。大会の様子を伝えるカメラワークはすばらしかった。実験のスタート地点から全体像を把握できる状況、そこに適切なナレーションもあり、クライマーがどのような状況にあるのか、ストレスを感じることなく見られた。自分が宇宙エレベーターに乗っているかのような臨場感があり、すばらしかった。何年先か、何十年先か、はたまた何百年先か、宇宙エレベーターの技術が発展していく様子をこれからも継続して番組で取り上げていただきたい。実現したとき、または限りなく夢に近づいたときに今回の番組を含め、撮り続けてきた映像は貴重なものになるのではないか。その日が来ることを期待している。

○ 宇宙エレベーターの大会で、何メートルまで上がったのかということを伝えてい

たが、宇宙エレベーター構想は、何をもって成功と言えるのかと感じた。宇宙エレベーターができ、月まで行けたら成功なのだろうが、今の時点でもいろいろな課題がある。ブレーキのことなど技術的な部分は理解できたが、今後どのような形で進んでいくのかを知りたいと思った。誰も取り組んだことのないことを達成しようということだが、途中でくじけないのかと思った。ふだんの仕事がある中で、模索しながら進めていて感心した。宇宙へのこの夢が日本発の技術で達成できればすばらしいことだし、さまざまな問題が解決され、先に進めばすごいことだと感じた。

- 宇宙エレベーター構想は言葉ぐらいしか聞いたことがなかった。番組を見て技術開発が進んでいることを知り、期待感を持った。実際に宇宙エレベータークライマーの大会があることを知り、興味深く見た。奥澤翔氏のかぶっていたヘルメットに「安全第一、ロマンは第二」と書いてあったが、日本のものづくり精神の根幹が垣間見えたのではないか。ロマンのためにやっている開発に対し、安全のことをちゃんと踏まえていることに感動した。また、現実的なコスト面、資金調達方法、苦労話、サポーターの有無など、そういうことについて、具体的に詳しい説明があればもっと親近感がわいたと思うし、ほかのいろいろなものづくりに挑戦している方々への励みや参考になったのではないか。また、大会の様子、いろいろなクライマー、その特徴などの技術的なことももう少し詳しく知りたかった。もっと放送時間の長い番組を作ってもらえればと思う。

- 宇宙エレベーターについて全く知らなかったので驚いた。全く知らないことをテレビで目撃することは番組を作る重要な出発点だと思う。とにかく途方もない話だというのが第一印象だ。3万6,000キロメートルが最終目標とのことだが、たった2,400メートルでやっと成功という世界なのだから途方もない。その途方もない宇宙の話なのに、工場で手作り感満載で何かを成し遂げようとしている。しかも、彼らの本業ではない。奥澤さんはサラリーマンということだったが、仕事はどうしているのか、この人はいったい何者なのかが今一つ分からなかった。会社でサポートをしてくれる人がいるのか、家庭や、どういう専門性があるのかなどが見えてくればヒューマンドラマにもなる気がした。飯田さんについてのエピソードは番組内でも少し紹介されており、この開発がある限り何があっても生きていけると言っていた。「夢、目標があることは人間を支える」というメッセージを伝えていて、そこはなるほどと思った。技術的なおもしろさには人を引き付けるところがある。クライマーが2往復しただけで、そこに手に汗握るドラマがある。そういう点では興味深い番組で、そこが1つの魅力になっていると思う。技術を追求する姿、夢を追う姿があることをもう少し補強する中身があれば、もっとおもしろくなったと思う。何十年もNHKがこの技術を追っていけば現実となる日が来て、100年前はこう

だったという映像紹介がされると想像すると興味深い。長い目の取材を続けるとおもしろいのではないか。

- 今の時代、新しいイノベーションを起こしたり、自分の夢に挑戦することができない環境の中、4人のグループが自分たちの夢に向かって挑戦していることがひしひしと伝わってきた。今スポットライトが当たっている事象に対してはいろいろな番組で取り上げられるが、小さなグループが自分たちの夢を追い、挑戦していることを番組で取り上げたことは素晴らしいことだ。いつまでも子どものころの夢、自分のこれからの理想を追求する必要があると教えられた気がする。素晴らしい挑戦だと思うので、1回の番組で終わらずに、何かの機会にさらに進化したことを伝えられれば、もっと現実味があるものとして受け止められると感じた。いくつになっても夢をもちたいと教えられた。
- 3点ほど疑問を感じた。1つ目は金銭面のことだが、工場を借りるお金、資材の調達、大会の出場の交通費などいろいろお金がかかるはずで、どうしているのかが全く不明で触れられていなかった。2つ目は時間の問題だ。ワーク・ライフ・バランスということが言われているのに午前1時まで働くことを、「夢を追っている」と表現していいものかという気がした。これを趣味と言えばよいが、本人は趣味でなく、本気でやっていると感じた。仕事を終えてから、開発をすると、生活はどうなっているのか。それでは生活が成り立たず、健康を害すると思った。3つ目は宇宙エレベーターの意味、社会的な価値がやや分からないことだ。10年ぐらい前に宇宙エレベーターの話を聞いたが、宇宙エレベーターの課題はクライマーでなく、ケーブルの技術が大変難しいということだった。そういったことをちゃんと説明したほうがよかったかと思う。ひとつ興味深かったのは、大会のときに各グループが独自に目標を設定できるということだ。取材されたグループは往復してくることを目標としていたが、重いものを運ぶなど、独自の目標をもって頑張っているところはよい大会だと思った。そういったことをもっと取材してもよかったと思う。
- 内容時間が短いこともあり、見終わったあと印象があまり残らなかった。取り組んでいる方々の内面の掘り下げがもう少しあったほうがよかったのではないか。今回の大会では、ブレーキの工夫をするという技術的な面に焦点が当たっていたので、番組としてもそこはかなり着目したと思うが、それ以前の「チーム奥澤」のチームワーク、メンバー間の交流、役割分担など、具体的に今回の大会、前回の大会でどういう貢献をしていたのかという部分がもう少し掘り下げられていると感情移入ができ、印象に残ったのではないだろうか。淡々と事実を伝えるだけでなく、もう少し人間に着目すれば、ひょっとすると違った印象が残ったのかと思う。クラ

イマーにカメラを付け、下りてくるところを撮った映像が何回かあったが、風に振り回されて、くるくると回っていた。乗り物酔いする人は見ていて気持ち悪くなるのではないかと思った。最近光が点滅する際に注意していると思うが、乗り物酔いをする可能性のある映像はどういう扱いをしているのかと気になった。

(NHK側)

基礎情報をたくさん入れることができず、難しいところもあるかと思ったが、24分という番組の放送時間の中で表現する限界もあった。いただいた意見は大変参考になった。彼らの仕事のことで、日常があまり充実していないのではないかという話があったが、チームのメンバーはもともと宇宙に関連したJAXAや旅行代理店のような会社に就職したかったができず、趣味として頑張り、そちらに生きがいを見つけた方々だ。仕事と趣味については、うまくバランスを取りながら取り組んでいると思う。宇宙エレベーター構想が実現した際には、貴重な資料映像になればよいと思う。

<放送番組一般について>

- 8月から9月にかけてはNHKらしい突っ込んだよい企画が続いた。8月6日(水)のNHKスペシャル「水爆実験60年目の真実～ヒロシマが迫る“埋もれた被ばく”～」(総合 後10:00～10:58)は大変考えさせられた。
- 8月は戦争を振り返る番組を多く放送していたが、いろいろなアプローチがあった。8月17日(日)のNHKスペシャル「いつでも夢を～作曲家・吉田正の“戦争”～」と8月30日(土)の「伊福部昭の世界～「ゴジラ」を生んだ作曲家の軌跡～」(Eテレ 後11:00～11:59)を見た。戦争の時代を知っている作曲家2人、戦争や政治は音楽と遠くなく、密接に絡んでくる、絡んでしまうことを知っているがゆえに作曲家も責任を感じつつ、戦後を生きたと読め、興味深く、強い印象を持った。メッセージとしてもよかったと思う。9月10日(水)の歴史秘話ヒストリア「オラたちの関ヶ原～天下分け目の合戦VS. 農民～」は、戦争というものがいかにふだんの生活を踏みにじるものなのか、またそれでもたくましく頑張る庶民の力みたいなこともほうふつとさせるおもしろい切り口だった。戦国時代というと、どうしても英雄たちの話になりがちだが、その裏にいる人間のことをちゃんと押さえていて興味深かった。ただ、田畑で稲を踏みにじる場面で、稲が明らかに造花とわかり、さ

すがにお粗末な映像だった。視聴者の多い番組だと思うので、もう少し気遣いがあったとしてもよい気がする。今回のように巧まずして戦争について考えさせられる番組が連携している印象を持つこともある。そういうことにも配慮していただき、よい番組を作っていただきたい。

- 8月15日(金)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「戦後69年 いま “ニッポンの平和”を考える」(総合 後7:30~8:43)は、大事な大きな問題を取り上げてくれた。集团的自衛権、閣議決定、憲法9条問題など、戦争と平和について本気で考えさせられた。
- 8月30日(土)のNHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER 地球大変動の衝撃 第1集「異常気象“暴走”する大気と海の大循環」は、以前では考えられなかったような猛暑や豪雨、大雪や竜巻など、観測史上最高、観測史上初めてということがここ数年に頻発していることがよく分かった。これまで断片的に理解していた現象が、地球規模で見るとどういうことなのか、とても分かりやすく解説していて合点がいった。偏西風が気象に関係することはよく知られた話だが、今年の冬には偏西風が蛇行しているところで止まってしまい、それがカリフォルニアの干ばつ、北米の大寒波につながり、結果として日本での台風の進むスピードや100ミリを超える雨などいろいろな異常気象にも影響している。そういったことがCGを使いながら説得力のある形で説明されていた。これだけ解明されてくれば、社会生活にできるだけ影響が出ないような対策を講じないといけなくなる。スーパーセル、巨大積乱雲により、今までは考えられないような風が吹くことがあるかもしれない。例えば長大橋も風速何メートルまで耐えられるというようなことを基準として設計しているが、その基準を超えたら橋は落ちてしまう。そういったことがひょっとすると現実になるのかという恐怖感も強く持った。これからは、どうやって災害を最小限に食い止めるのか、というところに次の番組制作の視点が進むべきだろうと感じた。今起こっている異常気象について説得力のある番組のおかげで、理解が深まり、またこれからどうしていくべきかという気持ちを強くさせられた。第3集、第4集もあるので期待している。
- 9月7日(日)のNHKスペシャル「新宿“人情”保健室～老いの日々によりそって～」は、新宿の団地に開設されている、暮らしの保健室に密着し、淡々と活動の様子を報告した番組だったが、登場した看護師がすばらしかった。高齢化社会について、全国的にどこも頭を痛めていると思うが、一つ大きなヒントを与えたよい番組だった。東京の中心にもかかわらず、あんなに丁寧にやさしく人に接することができる方がいて、多くの高齢者にとって救われる場所だと感じた。そういうテーマ

を見つけ、追いかける発想もすばらしいし、実際に取材し、これだけの番組に仕上げる奥深さ、幅広さ、器量の深さに感心した。私たちが直面する問題をいろいろな形でうまく番組にしていると感じた。

- 9月14日(日)のNHKスペシャル「臨死体験 立花隆 思索ドキュメント 死ぬとき心はどうなるのか」(総合 後 9:00~10:13)は、久々に死や心について深く考える機会を与えてくれた番組だった。立花さん自身がぼうこうがんという病気を患い、死を近くに感じる中、命をかけた番組制作だと思った。世界の研究者を取材し、貴重な意見を得られたことはすばらしいと思う一方で、本来のテーマは死ぬとき心はどうなるのかということだったが、臨死体験、人間の意識、心の話、哲学といったように、番組内でテーマが複雑に絡み合い、今何を解明しようとしているのか理解に苦しむ部分もあった。難しい小説を読むように繰り返し見ることで奥底にあるメッセージを読み取れる番組ではないかと思うので、今後、自分自身でも考えていきたい。
- 「L I F E ! ~人生に捧げるコント~」は、かつては好きでよく見ていたが、最近は見るに堪えない。特に衝撃的だったのは、8月7日(木)の回の「NHKなんで」というコントだ。NHKのディレクターにふんする内村光良さんがムロツヨシさんに、NGを出すなとか、目立ちすぎだというような厳しい指導をするのだが、まるで大人のいじめのようでとても不快感を覚えた。いじめで子どもの人間関係が深刻に問われる中、大人がそういったものを見せてよいのか、配慮が足りないのではないか。
- 8月13日(水)の「さかなクンのギョギョ魚発見! ~東京湾スペシャル~」(総合 後 8:00~8:43)は、東京湾の魚図鑑的な番組に終わらず、歴史的、地理的な背景も紹介しながら、なぜ東京湾は魚の種類が豊富なのか、東京湾で取れる魚のおいしさや料理のコツなどをしっかり分かりやすく説明しており、さまざまな知識を得ることができた。
- 「超絶 凄(すご)ワザ!」はよく見ている。4月17日(木)の「究極の反発力を目指せ」で、ホッピングでゴムとバネを戦わせていたが、同じ素材で戦わないとフェアではないと思った。同様に9月4日(木)の「夢のロープを目指せ」(後編)では、ワイヤとスーパー繊維で草相撲を行った。同じ素材で戦わせた場合こそ技術の差が出るのではないかと思うので、素材ではなく、本当の技術だけで戦うようなテーマの対決も見てみたいと思う。

○ 9月4日(木)のクローズアップ現代「道は険しい? “減塩社会”への挑戦」について疑問がある。日本人は諸外国に比べ、塩分摂取量が高いために高血圧になり、不健康であるということだったが、確かに塩分過多は体によくないかもしれないが、比較した国が日本よりも平均寿命が短いイギリスだったのは説得力に欠ける。ちなみに2014年度、WHOが発表した平均寿命では、日本は1位で84歳、イギリスは19位で81歳だ。国民のカロリーオフに比べ、減塩食料品への関心度の低さが問題視されていた。実際は、その後に紹介された減塩食料品をつくる過程で食品添加物を大量に入れることに対し、国民が危機感を覚え、その結果減塩食料品の売り上げが伸びていないということではないかという疑問を持った。現実問題として塩分は保存料も兼ねており、減塩の梅干し等を使用される保存料にもなりうる添加物などは高血圧とは別の健康問題に発展するおそれがあるのではないかと危惧する。そこをNHKが推奨してもよいのかと疑念に駆られた。また、広島の小学校で行われていた減塩への取り組みはすばらしかったが、番組の中では一貫して「薄味」ということばをキーワードにしていたことに違和感を覚えた。実際に見せていた手作りドレッシングのレシピからは、塩分量を調整するだけでなく、酸味、香りを強くするなどうまみを補う努力をしていることが見て取れた。が、それには全く触れられておらず、ただ薄味であることを全面に出していたことに違和感があった。短絡的に薄味と連呼するのではなく、塩気を弱めてもなお別のアプローチでおいしく食事を取り、健康になろうという提案をしてほしい。塩をとるか、食品添加物をとるか、その2択しかないような番組になっていたと思う。

○ 9月16日(火)のクローズアップ現代「復興コンパクトシティ～被災地が描く未来のまち～」を見た。コンパクトシティという考え方自体にも賛否両論あるので、コンパクトにやっているからよいのかどうかはもう少しバランスをもった放送が必要だと感じた。大変難しい問題だとは思いますが、取材を幅広く行っていただく必要があると思う。

○ 「ニュースワイド茨城」の番組内で「みんなで! いばらナイト」というコーナーがあるが、茨城県内の各市町村で一大ムーブメントを起こしている。茨城県内の各市町村を順にアナウンサーが回り、特産品、地元住民、名所などを紹介する番組だ。各市町村は順番が来るたびに住民を動員するなど、いろいろ趣向を凝らしている。人気の理由としては茨城県には民放局がなく、県民がNHKに期待していることと、テレビに慣れていないことを逆手に取ったNHK水戸放送局の企画力の勝利のように思う。生中継で放送されているが、おそらく市町村側から紹介したい情報の量が多すぎ、アナウンサーに大変な負担をかけているのではないかということが画面上でよく分かる。たまにアナウンサーがかんでしまう、コメントが矢継ぎ早で意味

不明というときもあるが、それも番組の1つの味ということで、あえて直さないでいただきたいと思う。

- 毎回欠かさず見ている番組は「連続テレビ小説」と「大河ドラマ」だ。連続テレビ小説「花子とアン」は時代背景が非常に分かりやすく、当時の衣装、大正時代のヘアスタイルなどを見ることで、当時の生活ぶりが分かる。山梨の原風景は農村らしさや貧しさも表現されていて、心打たれた。終わってしまうのは残念だ。戦国時代のヒーローを取り上げる番組はよくあるが、「軍師官兵衛」は、原作者の人物の見方や、黒田官兵衛の目線、考え方でいろいろな人物像が描かれており、大変楽しく見ている。
- 「ロンリのちから」は高校講座の1つで、論理的思考を学ぶ番組だ。三段論法、否定の論理、仮説形成、類比論法など、ドラマ仕立てで分かりやすく説明している。演じている俳優も知的で、見始めるとチャンネルを替えることができない魅力に引き込まれる。
- 青山ワンセグ開発の中から派生したドラマだと思うが「青山ワンセグ開発 私の部下は50歳」はわずか5分のドラマだ。20代のキャリアウーマンの部下に50歳の新入社員が配属され、いろいろな世代間のギャップを双方感じながら進行するという設定だ。最近ではありえる状況で、世相を切り取った作品だ。俳優が2人しかいないが、演技もすばらしく、シチュエーションコメディとして、興味深く見ている。Eテレでは昔から突然アバンギャルドな番組が制作され、驚かされるが、ぜひともこのままニッチで、知的で、とがった番組を制作していただきたい。
- 8月24日(日)の日曜美術館「故宮 皇帝たちの至宝」を見た。前回の審議会でもNHKスペシャル「シリーズ 故宮」について「日曜美術館」でも取り上げていただきたいという話をしたが、まさか予定に入っていると知らず、思いがけず見られてうれしかった。番組の内容としては「四庫全書」の話、乾隆帝(けんりゅうてい)の文化財の話など、NHKスペシャル「シリーズ 故宮」とかなり重複していた印象だ。もう少し「日曜美術館」らしい演出でもよかったと思う。人気のある作品について、じっくりと解説付きで見たかった。
- 8月11日(月)のBS1スペシャル 山本五十六の真実(前編)「真珠湾への道」(BS1 後9:00~9:50)、(後編)「遺された手紙」(BS1 後10:00~10:50)は、70年たってようやく山本五十六の実像が分かってきた。そういう歴史の真実はなかなか分からないものであると感じさせられた。

- 8月12日(火)のBS1スペシャル「女たちのシベリア抑留」(BS1 後 9:00～10:49)は、何よりも感動し、考えさせられた。シベリア抑留の問題は小説家や画家が多く作品に描いているが、約60万人が旧ソ連に連行され、その中に数百名の日本人女性が含まれていたということだが、今まで聞いたことがなかった。シベリア抑留問題で女性問題は一度も出たことがないと思う。彼女たちは体験をほとんど語ることなく、社会から忘れられてきた。満州、樺太で生まれた者には日本への帰国を果たせなかった者もいる。そういう無念さをよくぞ出してくれたと評価したい。
- 9月4日(木)の英雄たちの選択「関東大震災 後藤新平・不屈の復興プロジェクト」は本当に驚いた。後藤新平がリーダーシップを発揮し、震災後の東京を復興させた姿がよく描かれており、後藤新平のことを大いに見直した。今の政治家に見せたい番組だ。
- 9月11日(木)のマキハラといっしょ(再)「榎原敬之&玉置浩二“田園”で夢の初コラボ！」(BSプレミアム 後 11:15～12日(金)前 0:14)、は、玉置浩二さんを好きなので見た。もう一人のゲストとして、フラメンコギター奏者の沖仁さんが紹介されていたが、すばらしい方だった。そういう方を紹介していただけてよかった
- 8月10日(日)に四国へ台風11号が上陸した。ちょうど家にいて、私が住んでいるあたりでは断続的に雨が降っていたため、NHKを見たが、四国に上陸するというので、四国の避難勧告や交通情報について、常時ニュースとテロップなどで伝えていた。私は関東地方の情報が知りたかったため、民放にかえた。民放では東京駅の様子を中継しており、関東の状況が分かった。また、1時間に800ミリという雨量はどのぐらいなのかを説明して注意を促しており、大変インパクトがあった。その後NHKを見たところ、人けのない東京駅からの中継で、特に混乱はないことを伝えていた。かたや民放では新幹線の改札口近くからの中継で、疲労感のある乗客が通っている映像が紹介されていた。混乱しているのかしてないのか、どちらなのか分からなかった。ただ、もし新幹線に乗る前だとしたら民放の情報のほうが有効ではないかと思う。ラジオ第1も聴いたが、淡々と気象情報を伝えながら、時々気象予報士の解説が入り、知りたい情報が入ってきている感じがした。その日のその時点の現場の状態を伝える手法として、画面に出ている情報が、掲示板的になっていると感じた。私がたまたま見た1、2時間の出来事ではあるので、その後に情報をいろいろ伝えていたとは思いますが、テレビから情報を得るときは、そのときどうなっているのかが重要なので、その辺の工夫をしていただけるとありがたい。

- 最近気になっているニュースが、広島での大規模土砂災害についてだ。地球温暖化の影響で大雨が多くなり、今年は西日本を中心に戦後最悪の日照不足という報道も伝えられている。関東地方でも2月の大雪や、5月の高温、6月の長雨による農作物へ影響や、台風11号などによる、大きな被害が出ている。最近是这样いった異常気象により、いろいろなところに被害が出るだけではなく、経済的にも大きな影響が出ている。今回の、広島で大きな災害があったというような、断片的な異常気象を伝える報道だけではなく、将来可能性として起こりえる異常気象による災害について、総合的にどういう対策をとるべきなのか、国民が認知できるような番組制作を心がけていただきたい。
- 子ども向けにも、大人向けにもそうだが、災害は風水害、地震災害、火山も含め、減ることはなく、むしろ増えるという地球規模の現象を考えれば、防災をテーマに掲げた番組、国民の防災力向上に資するような番組があってもよいのではないかと思う。
- 9月11日(木)は、9.11の話がもう少し放送されるだろうと思っていたが、ほぼ「国際報道2014」で取り上げているのみだった。9.11ではたくさんの方が理不尽に亡くなった。どうやって悲しみを乗り越えてきたのかは東北の話にも共通すると思う。もう少しきちんと取り上げていただきたいかった。
- 全米オープンテニスについてだが、なぜNHKで見られないのかとたくさんの意見が来たかと思う。決勝について、WOWOWでの生中継の直前にNHKでは録画で放送すると宣伝していたが、気づいた人がどれだけいるのかと思った。また、放送がなかった準決勝、準々決勝の方がむしろ良い試合だった。錦織圭選手はけがが多く、決勝まで行くと思わなかったのかもしれないが、次はちゃんとNHKで見たい。
- 知り合いの大学の先生が「きらクラ！」の中で、ご自身が投稿した原稿が読まれ、番組ステッカーが当たったと大喜びしていた。聴取者との小さな積み重ねとして、双方向性はすごく大事だと感じた。そういった双方向性をこれからも大切にしていきたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年7月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

7月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、18日(金)、NHK放送センターにおいて、7人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、知るしん。×ヤマナシQUEST「県民対抗！長野VS山梨クイズで旅する南アルプス」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
委員	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	岡田 芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	国崎 信江（（株）危機管理教育研究所代表）
	内藤 久夫（（株）内藤代表取締役社長）
	古澤 宏司（（有）古沢園代表取締役）
	山口 晃平（（株）山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜知るしん。×ヤマナシQUEST

「県民対抗！長野VS山梨 クイズで旅する南アルプス」について＞

- クイズそのものは県民にとってはそんなに難しくないだろうと感じたが、その裏側にある事柄は知っているようで知らなかったことが意外とあり、とてもよかった。雨畑硯（すずり）は大変有名だが、黒色粘板岩という材料が地形の変化によって、海のない山梨に出土するようになった理由がよく分かった。同じく海のない長野県で出る塩水の話もあり、その対比がとても良かった。ライチョウもよく撮影できたと感心した。ライチョウに出会えるのか、見ていてハラハラしたが、臨場感があってよかった。最後の長野県側の質問の中で、山とともに暮らす人の「毎日山を見て、自分もがんばらねばならないと思う」ということばが秀逸だった。私も山の中に

住んでいるので、気持ちがよく理解できた。番組全体で、何か指摘する部分を強いて挙げるならば、長野VS山梨という対戦形式にする必要性を感じなかったことだ。視聴者の参加を促すためとは思いますが、県によって回答結果に大きな差もなく、何か工夫が必要だと感じた。長野と山梨双方が南アルプスを通じ、お互いによさを理解できた点はとてもよかったと思う。可能であれば長野の方と山梨の方がどこかで一緒にクイズに回答するような場面があれば、合同制作した意味がますます強くなったのではないかと思う。

○ 内容は盛りだくさんで、それを飽きさせないようにうまく構成していた。南アルプスを紹介するのに、関わりの深い長野と山梨での対抗クイズ形式を採用したことで、単なる紹介ではなく、メリハリがうまくつけられた番組になっており、巧みな制作手法だと感じた。オープニングでの雄大な富士山や南アルプスの空撮、地図情報、見どころを短くまとめたVTRなど、分かりやすい導入となっていた。「アルプスの少女ハイジ」を模したアニメキャラクターを使ってクイズを展開する方法もよかったと思う。双方向での放送だったが、視聴者の参加状況をリアルタイムで伝えるなど、先端の技術をうまく利用していた。クイズそのものは、正答率の高いものばかりであったが、番組への参加感も高まり、価値があったと思う。ライチョウを紹介する中で、日本列島が大陸と陸続きだったこと、氷河期があったことなどがさりげなく紹介されていた。黒色粘板岩についても海底からの隆起や造山運動で山梨に出土するようになったこと、また塩水がわき出ようになった地形の変化についての説明もあった。いずれも今ある現象を紹介しているが、地球規模の歴史にも思いをはせることができ、奥行きが感じられる番組だと思った。雨畑硯（すずり）の話題でも、松本清張氏の小説や、地形の特徴など地元の事柄に関連させながら幅広い話題を展開していて、平板ではない、奥行きのある内容だったというのが全体を通しての印象だ。単に南アルプスを知るだけでなく、知的欲求もうまく満足させ、時間の長さを感じさせないように巧みに構成されていた。地方の放送局が協力し、番組を制作する事例がどれぐらいあるのか分からないが、大変よい事だと思うのでこれからも大いに取り組んでいただきたい。

○ 南アルプスの映像はすばらしく、迫力があり魅力的だった。南アルプスの成り立ちの解説も分かりやすかった。ライチョウについても、“神の生き物”という導入があり、うまく紹介されていた。天空の花畑を紹介する部分では、高山植物のウマノアシガタ、シロバナノヘビイチゴ、釜無ホテイアツモリソウなど、とても興味深く視聴した。特にスズラン100万本の群生は魅力があった。登りながら見る、朝露のころに見るといった鑑賞のポイントも紹介されていて、楽しく見ることができた。そのほか、雨畑硯、塩水が出る村、さくらんぼの話題なども興味深く見ることがで

きた。また、飯田市の下栗の里で紹介された上昇気流の見事な映像、生活や暮らしの中に自然がうまく溶け合っている様子もよかった。一方、最近NHKでは民放のような略語がかなり多い。「知るしん。」という番組タイトルも70歳代の人が聞くと分からない。若い人にはよいだろうが、NHKでは慎重に番組名をつけてほしい。クイズ形式についてだが、クイズにしてしまうことで、映像のよさ、自然のよさが伝わりにくくなっている面もあるのではないか。視聴者参加を促すためにクイズを取り入れたのだと思うが、もっときちんと見せたほうがよいと感じた。視聴者の対象は一般向けか、子ども向けかがよく分からなかった。アニメが大自然の画面の中に入ってくるということについて問題があるという気がした。アニメの声優の声とナレーション、出演者の声、自然の音などがかなり入り乱れていて聞きにくいところもあった。画面もかなり複雑で、映像、解説、アニメ、クイズ、本の紹介と重層的になるので分かりにくかった。画面の展開や切り替えが早すぎたのも気になった。また、山の名前、植物の名前の表記については、漢字の場合はふりがなをつけてほしい。

○ なぜ塩水がわき出るのか、プレートがどう動いたのかななどを図を使って説明していたが、分かりやすく興味を喚起させる仕掛けになっていた。映像はきれいだったが、きれいであるほどアニメが出てくることには違和感をもった。映像の美しさには奥行きのある世界を感じるが、そこに平板なアニメが出てくると、せっかくきれいな映像を見ていたのに、と感じてしまう。アニメキャラクターの起用は親しみをもたせるためだと思うが、そこまで必要があるのかと感じる部分もあった。また、県民対抗である必要性も感じなかった。双方向という機能を紹介する意味でクイズの回答をボタンで押すというのはいりかもしれないが、タイトルにまで県民対抗とつけるほど対抗性をアピールせずとも番組内容として十分におもしろく、魅力も伝わり、新しい知識を得られるものであった。それだけに、なぜ双方向というとクイズや対抗形式等の番組演出になってしまうのか疑問に感じた。もう少し違う活用方法が今後出てくるとよいと思った。ライチョウを見つけた際、大声で歓声を上げていたが、バードウォッチングでは逆に鳥が逃げてしまわないように静かにするのが普通だ。自然の中にいるときのふるまい方について、もう少し配慮していただきたい。

○ 今回の番組では初めて知ることばかりだったが、南アルプスの魅力を存分に伝える番組だったと思う。南アルプスで厳しい寒さに適応し生きる動植物の姿、その土地で支え合いながら暮らす人々の姿、いくつもの奇跡が重なって存在する資源、冒頭とエンディングで見せる美しいアルプスの景色は本当にすばらしく、一言でいえばNHKらしい番組だったと思う。ナビゲーターに「アルプスの少女ハイジ」のハ

イジに似た女の子を起用したのはよかったと思う。かわいらしい声で、さわやかで、明るい印象だった。番組の構成と合っていたと思う。また、クイズ形式だったことから最後まで飽きずに視聴できた。一緒に視聴した自分の子どもたちは、特に珍しいライチョウに感動したり、洞窟に入ってすずりの原材料を掘り出すシーンなどに、わくわくしながら見入っていた。身近にある塩を塩水から作るなどにも興味をもったようで、繰り返し見ていた。クイズについては、回答の状況がシンプルに表現されており分かりやすかった。自分が出した答えと県民別の回答を比較でき、自分も参加しているわくわく感があつた。回答結果もアニメを使うなど工夫が凝らされており、長野VS山梨という印象を強くすることもなく、どちらも応援したくなるような演出だった。飯田市の急斜面に暮らす下栗の里で、畑を維持していくのは大変だろうと思った。あれほどの急斜面の土地での生活、仕事上の困難さを、どのように乗り越えているのかが伝えられたらもっとよかったと思う。子どもたちが急斜面を利用して遊ぶ様子も紹介されていたが、坂道をあれほどのスピードを出して自転車で走る姿には危なさも感じた。むしろ、もう少しほかの人々の暮らしについて丁寧に説明したほうが内容としてよかったと思う。雨畑硯を紹介するのに、松本清張氏の作品を引用していたが、そこで出てきた惨殺死体のイメージ映像があまりにリアルでとても暗い気持ちになり、子どもには見せたくないと思った。イラストなどで十分だったのではないかな。唯一不快に思ったシーンだった。

- 南アルプスというキーワードからいろいろな方面へ展開していく番組で、興味深く視聴した。1つのすずりの中にも、地質学の話から伝統工芸の話までを結びつけるストーリー性を盛り込んでおり、楽しく視聴した。全体としては、美しい映像も含んだガイドブックのようなイメージを持った。また、1つ1つの話題については、掘り下げて別番組であらためて紹介してほしいと思った。この番組を山梨県と長野県でしか視聴できなかったことは残念だ。全国向けにも放送し、そこからさらに「新日本風土記」「美の壺」などの番組で今回紹介されたすずりや、周辺の方々の生活を掘り下げて取り上げることもできる。その足がかりになれるすばらしい番組だったのではないかと思った。県民対抗のクイズは子どもに見てもらうには有効な要素だと感じた。全面的な対抗形式は必要でないかもしれないが、クイズがあると子どもは飽きずに最後まで視聴できると思う。最初から最後まで楽しく飽きることなく視聴した。

- 短時間でうまくまとめられた番組だった。クイズの後に科学的な解説もしっかりされていて、視聴者も納得して見られたのではないかと思う。南アルプス地域が登録されたユネスコの「エコパーク」とは何なのか、ということの解説があればもう少し理解が深まったと思う。双方向機能の活用については、ライブ感や視聴者との一

体感もあると思うが、対抗形式にして最後に勝ち負けを決めることに意味があるかは検討の余地があると思う。双方向機能については、もっとさまざまな活用方法があるはずだ。全国放送で使っている手法だけではなく、地方局ならではの手法を考えられればおもしろいと思う。番組冒頭で紹介されたオコジョは本編では登場しなかった。また塩水を利用した塩作りの歴史などもあまり詳しい解説がなかった。おそらくそれぞれ取材はしていたが、結果的に取り上げられなかったのではないかな。そういう素材も今後引き続き何かの形で生かせればよいかなと思う。塩水を飲んだときの「塩から～！」とか、自転車で下りてくるときの「速っ！」など、語尾を言わないことばづかいが気になった。アナウンサーであれば正しいことばを使ったほうがよかったと思う。甲府局と長野局の合同制作であったが、今回は完全に別々に作り、放送のときだけ一緒にやっている感じがあった。実際は大変だと思うが、たとえばアナウンサーが相手の県へ行ってレポートをすれば、制作側も他県の方にどう説明しようとか、他県の人からはこう見られているということが伝わるのではないかなと思った。1つのアイデアではあるが、そんな工夫もできるのでないかなと思う。

（NHK側）

クイズや対抗形式に関しては、通常双方向を実施する場合、スタジオでのトークの間に集計をする形式が多いが、今回はスケジュール的に難しかったこともあり、スタジオの替わりにアニメを入れる事にした。アニメにクイズ、対抗形式、というのは安易だったかもしれないと反省している。手法については今後も考えていきたい。松本清張氏の作品のイメージ映像がリアルすぎるというご指摘については、テンポを変え、引き込んで見てもらう目的だったが、配慮が足りなかったと思う。今後もバランスには十分注意したい。今回取材し、番組で紹介したもの以外にもいくつか取材した項目はある。番組に入らなかった部分は山梨と長野それぞれの県域ニュースなどでレポートにして紹介している。1つ1つのテーマを掘り下げて番組を制作してほしいというご意見があったが、現在甲府放送局で南アルプスをテーマにした「新日本風土記」を制作している。また、長野放送局では山プロジェクトを展開しており、北アルプスや南アルプスも含めてリサーチし、今後もさまざまな形で番組を制作していきたいと考えている。アナウンサーのことばについては、もっと配慮をしなければいけないと思う。

番組で使うことば、どういうことばを選ぶかは大事なことで、選ぶときによく吟味することが重要だ。ご指摘いただいたことは現場にもきちんと伝える。

<放送番組一般について>

- 6月22日(日)のNHKスペシャル「民族共存へのキックオフ～“オシムの国”のW杯～」は、内戦を戦った3つの民族の混成チームとなったボスニア・ヘルツェゴビナが初めてワールドカップに出場することになったことを紹介していた。日本人は民族問題、宗教問題に疎い部分があるが、ただのワールドカップではない、民族共存へのキックオフということに深く感銘を受けた。また、元日本代表監督のオシム氏が一生懸命に尽力していることにも胸を打たれた。今後も、スポーツそのものを取り上げる際などに、その裏にある世界も掘り起こしてもらいたい。
- 6月28日(土)、29日(日)に2夜連続で放送されたNHKスペシャル シリーズ故宮 第1回「流転の至宝」(総合 28日(土)後 7:30～8:28)、第2回「皇帝の宝 美の魔力」(総合 29日(日)後 9:00～9:49)は、作品を紹介することにとどまらず、作品の背景にあるものもよく掘り下げていて、躍動感と迫力のあるよい番組だった。特に第2回「皇帝の宝 美の魔力」は諸外国から羨望されていた磁器を巧みに外交に取り入れていた明時代の様子について、イラストやアニメなどを使い、分かりやすい形で紹介していた。1本の象牙から何層にも球を掘る象牙多層球についての解説では、西洋で旋盤が発明され、その旋盤に特殊な工具を組み合わせることで何層にも球を掘ることが可能になったこと、中国ではより中国らしさを出すために龍の彫り物とか、透かし彫りをするようになったことなどが、分かりやすく説明されていた。作品自体のすばらしさに加え、掘り下げ方がとても丁寧だった。清の時代の乾隆帝が作った「四庫全書」が丁寧に保存されていることにもびっくりしたが、その中の記述に日本からの文献があったことは感動的だった。スケール感もさることながら、当時の世界の動き、歴史の背景、産業技術のようなものも含め、うまく表現されていて、さすがNHKだと思った。
- NHKスペシャル シリーズ故宮 第1回「流転の至宝」、第2回「皇帝の宝 美の魔力」を見た。第1回「流転の至宝」では故宮の宝がどのような歴史的経緯をたどったのかがしっかりと説明されていた。アニメをうまく使っていたため、臨場感があり、視聴者に伝わりやすかったと思う。第2回「皇帝の宝 美の魔力」では中国の歴代皇帝が治世のために美術文化をいかに利用したかを紹介していた。視聴す

る前は、企画展と連動した美術品の紹介番組かと思ったが、よい意味で期待を裏切られた。展示の案内も俳優2人を起用し、落ち着いた良質な空気感が出ていた。第1回の最後で15分ほど、コレクションの紹介があったが、作品数など少ない感じがした。「日曜美術館」などほかの番組で、しっかり取り上げてもよかったのではないかと思う。以前、ロバート・キャパの作品展が開催された時も「NHKスペシャル」と「日曜美術館」で違った角度から取り上げていて、両方を見ることがおもしろかった記憶がある。今回もそういう企画があればよかったかと思う。

- 7月3日(木)の超絶 凄(すご)ワザ!「目指せ!奇跡のコマ 落ちずに回れ いっつまでも」は、どちらのコマが長く回るかという対決だったが、18分近くコマが回り続ける映像を放送し続け、その間に解説などが入っていた。テレビ的にはありえないことかもしれないが、かなりスリリングでおもしろかった。正面から現物をしっかり見せる方がどんな仕掛けをするよりもスリリングだと感じた。こういう試みはぜひ続けていただきたい。
- 「首都圏ネットワーク」で「ストップ!詐欺被害」というコーナーがあるが、詐欺被害が多い中で、短く、あまり深く突っ込まないものの、事例をあげて警鐘を鳴らす番組を放送し続けるのは日常的に見る番組として、効果的な取り組みだと思った。
- 7月4日(金)の特報首都圏「世界遺産 誕生までの舞台裏～富岡製糸場～」を見た。世界遺産登録が決まったすぐあとの放送だった。番組では、富岡製糸場の歴史と世界遺産に登録された理由を、短い時間の中で具体的に紹介していた。富岡製糸場の生糸、繭は産業的に日本の近代を支えたものであると同時に、キリスト教文化を日本に広めたという精神的な側面もある。そういう精神面にも焦点を当てた番組をぜひ制作してほしいと思った。
- 7月1日(火)の夕方5時ごろ集団的自衛権が閣議決定され、翌日の7月2日(水)は民放各社一斉に朝の番組からこの件について報道していたが、NHKでは、「あさイチ」の冒頭と途中で少し触れた程度で、ほかの民放の同時時間帯の番組と比べるとしっかり取り上げていなかった。日本の歴史を動かすような大切な問題に対し、番組の内容を大きく変えることなくさわり程度しか放送されないことに対して違和感を覚え、残念だった。1日に行われた首相官邸前での抗議行動についても、民放では2日の朝に報道していたが、NHKではまったく報道されていなかった。3日の「クローズアップ現代」では集団的自衛権について取り上げられ、放送後に政府から圧力があつたのではないかと週刊誌の報道があり、またそれに対する菅官房

長官の異例の反論もあった。真偽のほどは分からないが、政府の圧力に屈することなく、国民にとって公正な情報、国民の声、国民が望む情報を必要なタイミングに放送できるNHKであってほしい。

- 集団的自衛権についてはしっかり報道してほしい。報道を受け取る側は、伝える新聞社や放送局によって、こういう報道になるだろうということをそれなりに判断し、新聞や番組を見ている。そんな中でNHKの報道は圧倒的な信頼感を持たれている。送り出す側もその自負があると思う。いつまでも、報道はNHKが一番よい、NHKを信頼しようと受け取られるようにお願いしたい。
- NHKの集団的自衛権についての取り上げ方には不満を感じる。戦後、平和を維持してきた日本にとって大変重要な問題であり、NHKには、もっと鋭く追及してほしい。NHKもいろいろな面で報道しているが、もう少し危機感をもって報道してほしい。

(NHK側)

集団的自衛権の問題について意見、指摘をいただいた。この問題は毎月のようにNHKの世論調査でも取り上げているが、25%が賛成、25%が反対、40%がよくわからないという結果で、賛成と反対が真っ二つに割れるような問題となっている。NHKとしてもこのテーマが浮上してきた3月以降は「NHKスペシャル」で3回、「日曜討論」で7～8回、また憲法記念日の特集や折に触れて「NHKニュース7」、「ニュースウオッチ9」の特集企画で取り上げてきた。当日も「NHKニュース おはよう日本」、昼のニュース、「NHKニュース7」、「ニュースウオッチ9」、「NEWS WEB」でも時間を相当数かけ報道した。指摘のあった官邸周辺での抗議行動については、昼のニュース、「NHKニュース7」、「NEWS WEB」で取り上げている。しかしながら、新聞や雑誌等でNHKの報道についてもさまざまな意見をいただいている。この問題については引き続き取材し、さまざまな意見を幅広く取り上げ、少しでも分からない人に伝え、できるだけ詳しい情報を届けられるように報道を続ける。

- 7月に南木曾町で起きた土石流についての報道で、空撮映像を3Dの地形に落とし込んで見せるという手法が使われていた。空撮や航空写真の映像を使って解説す

ることはよく見られるが、あらためて3Dにするとこれだけ視聴者に伝わりやすいのかと驚いた。地形に沿って災害がどう起こったのかが、立体的に伝わってきた。またヘリコプターの空撮映像が、静止画の3Dに落とし込んでも十分に見るに堪える高精細な映像だったことにも驚いた。今後も同様の手法で解説していただきたい。次回から工夫を加えるとしたら、被害に遭われた方の家とか、土石流の方向について映像に何らかのマーキングをするとより分かりやすくなると思う。そうすればもっと解説との連携が取れるのではないかと思う。

- 7月13日(日)の大河ドラマ「軍師官兵衛」は本能寺の変を取り上げており、大きな山場だったと思う。宣伝的な意味合いだと思うが、さまざまな番組で本能寺の変を取り上げていた。7月9日(水)の歴史秘話ヒストリア「本能寺の変 犯人はオマエだ! ヒストリア探偵VS 戦国最大の未解決事件」は、織田信長を倒した黒幕と目される人間がいるという謎解きで展開していたが、將軍の足利義昭、イエズス会のオルガンティーノ神父、公家の吉田兼見など、それぞれにそれなりの理由があって興味深かった。「軍師官兵衛」の本能寺の変の回を見るにあたって、こういった番組が周辺を固めていたのはタイムリーな編成だった。
- Eテレの「戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 知の巨人たち」は非常によい番組で、注目している。3年がかりの取り組みの一環で、8本放送するそうだが、すでに第1回「原子力 科学者は発言する 湯川秀樹と武谷三男」(Eテレ 7月5日(土)後11:00~6日(日)前0:29:30)、第2回「ひとびとの哲学を見つめて~鶴見俊輔と“思想の科学”」(Eテレ 7月12日(土)後11:00~13日(日)前0:29:30)が放送された。7月19日(土)に第3回「民主主義を求めて~政治学者 丸山眞男~」(Eテレ 19日(土)後11:00~20日(日)前0:29:30)が放送されるそうだが、集団的自衛権の問題を考えるうえでも戦後史の大きな証言になると思っており、8本だけではなく、継続して番組を制作してほしい。
- 戦後史証言プロジェクト「日本人は何をめざしてきたのか」は昨年7月の第1回目から関心をもって見ている。戦後史といっても証言できる方が高齢となってきた。NHKも膨大な取材の資料や映像を保有していると思うが、今の視点で見て欠けている部分を今のうちにしっかりと補強する意味でも、意義のあるプロジェクトだと思う。NHKスペシャル「未解決事件」のように今の視点で見たときに当時の人から証言を得て、新しい事実が出てくことに期待したい。テーマの取り上げ方については、現代の視点から考えた課題が多い印象をもっている。昨年のシリーズは、沖縄の問題から始まって震災による問題を取り上げていた。今年度の「知の巨人たち」も今われわれがもっている課題について取り上げている感じがする。戦

後史と言っても60年以上あるので、取り上げる課題はもう少し幅広く設定してもらえるとありがたい。とても暗いテーマが多く、1時間半見るのがつらくなることがある。戦後史はこんなに暗かったのかと思うぐらいだ。NHKでは「プロジェクトX～挑戦者たち～」で元気な日本の姿、昭和の大人たちの姿を発信していた。このプロジェクトでも見ている人が元気になるようなテーマや、番組の作り方も考えてほしい。

- 7月6日(日)の日曜美術館「生きた、描いた、恋した～関根正二の青春～」のアートシーンは特別編で、案内人の井浦新さんが兵庫の羅漢像を訪ねる旅を紹介していた。井浦さんの折り目正しい態度にも好感がもてたが、名も知れぬ人が作った五百羅漢や石仏を紹介するとともに、地元の人々と羅漢像との関わりについても紹介し、美術やアートが暮らしの中で育まれ、しみこんでいる様子を伝えていた。「日曜美術館」としては異色な感じがしたが、静かに心を打つ美しい映像で、アートとは本来こういうものだとしみじみ感じた。本編である天才画家の人生を見た後にしっとりした心にしみる内容はよい取り合わせで、センスがあると感じた。
- 「日曜美術館」を毎週見ている。美術、芸能、文学関係の人たちはほとんど見ており、私も友人とよく話題にしている。7月13日(日)は「色彩はうたう ラウル・デュフィ」、7月6日(日)は「生きた、描いた、恋した～関根正二の青春～」を放送していた。日本の美術界は展覧会が百花りょう乱だが、「日曜美術館」は美術を見る指針として位置づけられていると思う。
- 「スーパープレゼンテーション」を毎週見ている。世界にはこういうすばらしい人がいると教えられる番組で、現代のさまざまな仕組み、知識や技術について、優れた才能を持つ人によるプレゼンテーションが大変興味深い。
- 「にっぽんの芸能」は大切な番組だと思う。日本が世界に発信している「おもてなし」の心の基礎みたいなものが番組の中にあるのではないと思う。もう少し力を入れて制作いただくとありがたい。
- 教育番組に子どもの安全に関する専門番組があってもよいのではないと思う。現在は「学ぼうBOSAI」という防災に関する番組はあるが、子どもが行方不明になる事件、誘拐、交通事故、水難事故などで子どもたちの命が奪われている。防災意識を深めようというだけでなく、子どもたちの身の回りにある危険についてもしっかりと教育できるような専門教育番組があってもよいと思う。

- 7月4日(金)の新日本風土記「寿司」は、日本中のお寿司の成り立ちを紹介していたが、京都の情報について偏重した内容だった。寿司は江戸の握りと上方の押し寿司だけではなく、柿の葉寿司とか、東北の田舎の寿司もある。そういうものを深く、広く掘り下げていればと思った。
- 7月5日(土)のザ・プレミアム 浮世絵ツアー 東海道名所歩き「愛知～京都の巻」(BSプレミアム 5日(土)後 7:00～7:59)は、昔の浮世絵と現在残っているものがどう違うか、どう同じかを比較していた。想像以上に浮世絵が今に伝えるものがたくさんあること、東海道は古来からの交通発達により文化の集積度が高いことを感じた。東海道の紹介もよかったが、案内役の林家三平さんと吉木りささんの掛け合いもとてもよかった。特に吉木さんのコメントが分かりやすく的確で、好感がもてた。
- 7月6日(日)の「音で怪獣を描いた男～ゴジラVS伊福部昭～」(BSプレミアム 6日(日)後 11:00～11:59)は、映画「ゴジラ」シリーズを放送する前のタイミングでの放送だったので、番組宣伝的な内容だろうと思って視聴したが、予想に反して中身の濃い大変よい番組だった。ドラマ仕立てで伊福部さんの生涯をたどっていたが、ドラマ特有の嫌みもなく、心地よく見ることができた。伊福部さんがどのようにしてあの曲にたどり着いたのか、ゴジラの鳴き声をどうやって作ったのかなど、丁寧に過去を掘り下げ、当時の関係者へのインタビューなども含めて、よく取材されていた。伊福部さんは被ばく者であり、ゴジラは水爆実験の影響で生まれた怪獣という設定なのも不思議な縁だと感じた。60年前の古い映画だが、現代の科学の問題点をあそこから指摘していたのかと考えさせられ、その映画に伊福部さんの音楽がよりいっそう厚みをもたせ、価値を高めていることが分かった。伊福部さんがテーマ曲だけでなく、ゴジラの鳴き声と足音をどこで流すのか、楽譜に落とし込んでいたというのは、その緻密さに感心するばかりだった。何十年たってもゴジラの音楽がアメリカ映画の音楽にも影響を与えており、人に感動を与える仕事は歴史に残ると痛感した。
- 7月12日(土)のグレートトラバース～日本百名山一筆書き踏破～「第二集 紀伊半島・大峰山から南アルプス・北岳」(BSプレミアム 12日(土)後 7:00～8:29)は、こんな途方もない企画をよく立てたものだったと思った。チャレンジする田中陽希さんは途方もない体力と脚力の持ち主であるが、撮影するスタッフの苦労も並大抵ではないだろうと思った。名峰の景色もすばらしかったが、今回特によかったのは人がなかなか近寄れない南アルプスの南部、聖岳、赤石岳で、よい山だとあらためて感じた。空撮もあり、番組のホームページを見ると無人のヘリコプターで撮影してい

ると分かった。あまり高すぎない位置での映像で臨場感がよく出ており、さすがNHKだと思った。恵那山での田中さんのコメントには、南アルプスに挑戦する前の緊張感や苦しさがよく表れており、鉄人も弱みを見せるという心の動きをうまく見せていた。また、田中さんの応援に駆けつけた人が感激で涙ぐむシーンについても、人間らしさが出ていてよい場面だと感じた。ただ景色を見せる番組でなく、人と自然の関わり、人と人の関わりを考えさせる優れた番組だった。番組のホームページについても、リアルタイムで歩いているルートなどが分かりやすく紹介されている。そのあたりのPRをもっとしてもいいと思う。次回が楽しみだ。

○ 2014 FIFAワールドカップサッカーについて。日本はグループリーグで敗退してしまったが、今回のワールドカップは全体としてよかったと思う。カメラが何台も使われていたし、FIFAが取り入れた新しいゴール判定についても紹介されていた。オフサイドは分かりにくいルールだが、判定も旗が上がるたびに映像でその状況を伝えており、サッカー中継もずいぶん進化したと感じた。試合自体の質も高く、一流のものは心を打ち、感動を呼ぶものだと感じた。サッカーのワールドカップは本当に国を代表して戦っている感じがある。サッカーは、国の経済力などがあまり関係なく、地球全体に浸透している競技であり、それをまとめ上げ、テレビでふんだんに見られるのはとてもよいことだと思う。日本のサポーターが会場でゴミ拾いをしていたことで、世界的に評価されていたが、日本でサッカーを見る人のレベルも上がっており、今回の結果も含め、しっかりと受け止め、次へ進んでいけるというようなことをNHKの中継を見て感じた。

○ 「週刊ブックレビュー」という番組があったが、よい番組だった。今は本の出版文化が1兆6,000億円程度といわれ、新聞には常に出版物の広告が掲載されているにもかかわらず、書評番組は少ない。「週刊ブックレビュー」では、著者へのインタビューや本好きの声などを通じて、どんな本を読むべきかを興味深く解説していた。復活していただけるとありがたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年6月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

6月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、20日（金）、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「なるほどスゴイ！富岡製糸場」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
委員	新井 幸人（写真家）
	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	国崎 信江（（株）危機管理教育研究所代表）
	国府田厚志（いちご農家・JAはが野代表理事専務）
	坂本 敬子（（株）月の井酒造店代表取締役社長）
	内藤 久夫（（株）内藤代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（（有）古沢園代表取締役）

（主な発言）

<「なるほどスゴイ！富岡製糸場」

（総合 5月16日（金）後8:00～8:43 群馬県域）について>

- 世界遺産登録直前ということで訪れる人が増えているそうだ。観光バスは何か月も先まで予約一杯という報道も聞いたので行ってみたいという思いはあるが、余計に行けなくなっているというのが実情だ。取材VTRとドラマ仕立てでの紹介があり、すばらしい所であることが少しずつわかってきた。富岡製糸場だけを取り上げた番組は過去にそれほどなかった気がする。視聴者に富岡製糸場の概要を知らせるというところの意義でもわかりやすかったと思う。富岡製糸場総合研究センター所長の今井

幹夫さんがインタビューに出ており、40年間も関わり合いを持っているということだった。限られた時間なので限界はあるが、もう少し初めの頃の話も聞けたらよかったと思う。民間企業が大事に保存していたものを富岡市に寄付したわけだが、そういういきさつを伝える際に、その企業名を出しても構わないと思う。途中で投げ出してしまえば保存はできなかったという点で果たした役割はとても大きい。そういう情報も伝わるとなおよかった。世界遺産になったあとの利用を含め、折に触れて取り上げてほしい。

○ 番組を見て、タイトルどおりに本当にすごいと感心した。木骨レンガ造りの建物がしっかりとそのまま残っている。割と近年まで操業されていたことによるということだが、繰糸機がまさに使えるような状態で保存されており、古い歴史を感じさせない状態だった。世界遺産に近々登録されるということもなるほどという感じがする。私も子どものころは自宅で養蚕をしていた。自宅の中でカイコを飼い、冬の間は家の中でも広く暖かいわれわれよりもよい環境で飼っていた。毛虫は外にいとすごく嫌がられるが、カイコだけは体につけても触っても何の抵抗感もないのは、子どもの頃から触れてきたことと、換金するものとして一定の評価や価値があったからだとも番組を見て改めて感じた。番組からは、当時、世界でいちばんの品質で、輸出量も日本でいちばんということがよく分かった。初代工場長の尾高惇忠の苦労がよく表現されていた。女工が集まらない理由はワインにあったという話も、おそらくあの時代ならそのようなこともあっただろうという感じがした。それを自分の娘を働かせることによって解決した場面もよく理解できる作りになっていた。和田英は操業して2年目に行ったわけだが、そのときには、能力給が9円～25円という明確な階級があった。8時間労働、日曜の休日など、今の時代の労働条件の基礎がそこで作られたことや、日本の産業が育ってきた歴史が感じられた。堺屋太一さんの解説もわかりやすく、とても説得力があった気がする。ゲストの緒川たまきさんの表現の柔らかさが心地よく、よい人選だったという気がする。

○ 世の中に富岡製糸場への興味が広がっており、地域ぐるみで、みんなで世界遺産にしようということで活動している。富岡製糸場を愛する会はたったの20人から始まり、保存運動を10年間一生懸命取り組んできた。町おこしがいかに大事か、世界へ投げかけること、そこに響かせることが大事だと分かった。工場長の再現ドラマに引かれる感じもあり、真剣に見た。全国に技術を伝える模範工場として富岡製糸場ができたということで、全国のマップに赤丸で示した分布図になっており、こう広がったというのは分かるのだが、有名なところは名前を入れると分かりやすかったと思う。緒川たまきさんのコメントはとても聞きやすく、共感を持てるところが多かった。

○ 私のところも子どもの頃は養蚕が盛んな土地柄で、カイコのおしりが黄色くなって繭を作る状態にするときは学校が2、3日休みになった。番組では、富岡製糸場の施設自体の規模や歴史的価値、いろいろと関わってきた人のエピソードなどがうまくまとめられ、富岡製糸場を理解する入門編としてよくできていたという印象だ。43分と比較的長い時間だったが、全く長さを感じずに見ることができ、とても上手に作られていた気がする。再現ドラマもあり、具体的な過去のいろいろな手記などの記録もあり、史実に裏打ちされた迫力を感じながら番組を見ることができた。ところどころに差し込まれていた堺屋太一さんのコメントが的確で、番組を引き締めていたと思う。日本の産業が今日ここまでになっていることの端緒の部分在这里が担っていたということ、その後の労働条件などいろいろなことの近代化の礎がまさにここにあるというあたりも、分かりやすくうまく説明していたのではないと思う。内容はよかったのだが、スタジオが淡い色調の印象で、ゲストの前後にも花がたくさんあったが、黄色だった。出演者も似たような色合いの服なので、もっとメリハリをつけるか、事前に分かっていたら違う色使いもあったのかと感じた。世界遺産に何とか登録しようと町おこしに関わっている人もたくさんいるが、そういう人にも励みになったと思うし、いろいろな意味で地元を活性化させるよい番組だった。

○ 5月21日(水)の歴史秘話ヒストリア「富岡製糸場 世界遺産へ～世界を魅了した女子たちのシルク～」を見たが、とても勉強になった。糸を紡ぐときに糸が切れ、新しい糸を紡ぐときのタイミングが難しいということは祖母からよく聞いていたが、番組で再現されていてよくわかった。地元にも歴史がある製糸場があるが、地元紙やタウン誌で特集が組まれることもある。自殺した女性が多かったとか、労働が厳しかったとか、養蚕というと暗いイメージがあったが、今回の番組を見て、とても華やかに感じた。現代に通じるすばらしい社会的な雇用条件だったわけだが、富岡製糸場には暗い事情はなかったのかと思った。どこの部分を見て世界遺産にするのか、世界遺産の基準についても知りたいと思った。

(NHK側)

労働の環境については、民間に払い下げられてからは富岡製糸場でも病気になったり、辞めたりする人が少なからずいたと聞いている。明治初期の頃は官営だった。場内に診療所が併設されていて、女性たちの健康管理も手厚くされていたと伝わっている。安い労働力としての見方ではなく、全国各地に技術を伝えるために女性たちが里帰りすることを前提として来ているということがある。ある種の学校として技術指導者を養成する機能も持っていた世界遺産の評価は、施設の保存状態がよいこ

ともさることながら、そこからうかがえる当時の日本人たちが初めての輸出産業と言ってもよいと思うが、生糸産業を築いたエネルギーのようなものが海外から評価され、それを物語る証拠として富岡製糸場と関連施設が検証に値するだけの保存状態になっていることが評価されたと理解している。

- 小学生の頃はどの学校でもカイコを飼うことが当たり前で、カイコは身近な存在だった。当時を思い出し、懐かしいと思って見た。富岡製糸場については建物のすばらしさが世界遺産に認められるきっかけとなったという思いしかなかったが、番組で開業までの歴史、生糸の品質で世界を魅了したこと、工女の就労と昇級システムなどが丁寧に紹介されており、富岡製糸場が近代日本の礎になったすばらしい存在であったことを知ることができた。スタジオは富岡製糸場が世界遺産に認められる見通しとなり、そのお祝いのように感じられる設定で、花を飾るなど華やかさがあり、お祝いムードでよいと思った。ゲストも親しみを感じる、好感を持てる人で、コメント内容も富岡製糸場への思いを気取らずに素のまま思いを伝えていた。有識者の解説も分かりやすく、情報に重みがあり、適任だったと思う。番組の構成も再現VTR、スタジオでの解説、クイズなど、それぞれの情報の理解を深めるのに最も効果的な演出がされており、テンポもよく、43分があつという間に感じられた。番組に引き込まれるようなすばらしい構成であったと思う。BGMのリズムを変える効果的な演出や、構成の中でBGMを使い分けるなど、細かいところまで気遣って番組が作られており、番組への思い、これを伝えたいというこだわりが伝わってきた。改めて前橋放送局はすごいと思い、番組づくりの技術の高さを感じる本当によい番組だった。富岡製糸場が世界遺産に認められるまでの中に民間企業の力があつた。企業が建物を保全したからこそあの状態で保存されていたわけで、富岡製糸場の歴史の一部であったと思う。強調する必要はないとしても、企業名をさらっとでも伝えたほうがよい、できれば企業の思いにも触れたほうがかえって印象はよかったのではないかと思う。

(NHK側)

保全していた民間企業は年間相当なお金をかけている。操業停止後、10数年にわたり3人の職員を常駐させており、会社にとって利益が出なくなっても常に建物の管理にあたらせていた。固定資産税も含めると相当な赤字を重ねての維持管理だった。市、県もそういうことを高く評価している。売名を防ぐというNHKの観点から言わなかったということではなく、そうした発言が出て何ら問題がないのではないかと考えていたが、たまたまゲストの人たちも固有名詞をあえて控えたのかと

思う。施設の価値を認めた維持管理があつてはじめて今回の世界遺産登録になったことは評価されてもよいのではないかと、と地元でも見られている。

○ 富岡製糸場という歴史の教科書に建物の錦絵が出ていて、明治期の殖産興業のシンボルだったことぐらいしか知らなかったが、番組を見て多くの貴重な考え方を教わった気がする。いくつかのセクションに分かれていたが、それぞれのポイントが最初に箇条書きで一続きのことばで示されているのは分かりやすかった。最初に古い時代の価値観を乗り越えなければならなかったという紹介が出てきた。そのひと言を最初に聞くと、あとの説明がとても分かりやすく、説明のしかたがよいと思った。初代工場長の尾高惇忠の苦勞が、新しいものを創造するもののよい手本として現代にも通用するのではないかと思った。レンガ造りの建物のレンガの話題や、工場の労働条件のことなど、社会の変革に果たした富岡製糸場の役割は大きいとしみじみ感じた。富岡製糸場を保存し、世界遺産へと導いた地元の人たちの今の時代の努力と企業の理解、協力を知り、大したものだったと思った。昔の人たちの新しいものを作る苦勞と現代における古いものを維持し、何とか世に残し顕彰していこうという新旧の対比、バランスも分かりやすくてよかったと思う。こうした番組を見ると新しいものへチャレンジすることへの勇気をもらえる。町づくりに携わる者の市民運動の高まりや、どうやらよいのかというヒントを与える番組だったと思う。自分の住んでいる周りの地域資源について歴史的な価値を評価し、見直すよききっかけになるかと思う。ゲストは全体を通して適切なコメントをしていて、番組に厚みを持たせていると思った。尾高惇忠のことは知らなかったが、富岡製糸場を立ち上げるのに尽力した渋沢栄一の義理の兄だ。そのあたりのことも紹介すると分かりやすいかと思う。官営から民営に移ったときの企業は3社を経ているという解説で企業名を出せば抵抗もあまりないのではないかと思った。スタジオもよかったが、現地で座談的に行えばもっとよかったと思う。

○ 明快なコンセプトというか、ポイントを押さえていくと自然と世界遺産への道が開けるのかという印象も持った。番組のまとめ方がうまく、ポイントも分かりやすく的確であったと思う。最後も文字として常に現役工場として稼働してきたとか、常に現代性を保持してきたとか、明治時代は大胆だったといったことが出ており、それらの視点をしっかりと見せることで、見ている側もはっきりとした枠組みで見える感じがした。そこが富岡製糸場入門編としてバランスよくできていた要因ではないかと思う。維持管理がとても大変で、お金もとてもかかる。今回は入門編なのでさらっと木とレンガが出ていたが、木とレンガが組み上がっていて雨漏りしたら大変で、140年も維持するのは本当に大変だったと思う。それを民間の企業が年間で億単位のお金をかけてまで貴重だと思ったのは、明治に生糸を作ることが時代を変えていったこと、

日本を世界に出していったからということにつながる。明治のパワーもわかるし、日本人たる気概、そこを大切にしようということの反映として建物を大事にしようとなったのかと思う。その辺りのことは違う番組で出てきたらおもしろいと思う。歴史秘話ヒストリア「富岡製糸場 世界遺産へ」を先に見ていたの、使い回しをしているのかと思った。連携企画になっていたようだが、これを見ただけでは連携企画とは分からない。本来は「なるほどスゴイ！富岡製糸場」を先に見て、あとで「歴史秘話ヒストリア」を見るべきだったと思う。再現ドラマの部分だけを考えると、「歴史秘話ヒストリア」のほうがドラマチックで、渡邊あゆみアナウンサーのしみじみとした声も入ってきて、ドラマとしては分かる感じがする。実はこうだということを聞くと分かるが、単体で見るとつながりはよく分からなかった。スタジオのしつらは生糸や明治のことなのでそういうイメージのものがあってもよいと思う。生糸の実物をゲストが触ってコメントをするということがあってもよい気がした。「すばらしくて鳥肌が立った」というゲストのコメントが、今では主に褒めことばとして使われていると思うが、何度も聞くと気になった。富岡製糸場については意外と知らないことがあると分かり、それが世界につながり、日本が世界を席けんしていたことに驚いた。あんな細い絹糸で世界一になったというのは、今後日本の経済、手仕事を考えるうえで、もしかしたらヒントになることもあると思うので、別番組で続けてほしい。

- 番組としてはよくまとまって作られていると思う。番組は、富岡製糸場の歴史を伝えるという方針で作ったのではないと思う。歴史秘話ヒストリア「富岡製糸場 世界遺産へ」の素材も相当使っていて分かりやすかった。イコモスに世界遺産のPRをするビデオではないかというぐらい、歴史的なところに過分に注目しているのではないかと感じた。群馬県民も富岡製糸場に行ったことがないとか、知らない人がたくさんいると思う。その中で群馬県域の番組として今の富岡製糸場にどういうものがあるのかももう少し紹介するとよかったのではないと思う。昨年夏に富岡製糸場へ行ったが、実際に行くところと見るところはあまりない。ガイドツアーがあると見られるが、見られる建屋も2つぐらいしかなく、中はほとんど見られない。寄付されてからそれほど時間はたっていないし、これから見るところが増え、観光的な魅力も増えると思う。今公開されていないところでも取材ということで見せてもらい、富岡製糸場へ行くといろいろなものが見られるということがもう少し伝わるとおもしろかったのではないと思う。番組の制作のポリシーとして歴史を伝えたかったというのが前提にあると思うので、混ぜてしまうとテーマが揺らいでしまうが、そういうものも取り上げると群馬県域としてはよかったのではないかという印象を持った。民間企業がこの場所は「売らない、貸さない、壊さない」というポリシーをもって保全していた。今後その点も取り上げてもらいたい。画面の右上にゲストの表情が本当に小さく映っていた。入れるのであればもっと大きく入れてもよいのではないかと思ったが、あえて入れる必

要があったのかどうかと疑問に思った。

（NHK側）

今あるものがではなく、それを作り上げた人たち、作り上げようとしたこと、それが日本にもたらしたものがすばらしいのだと思う。民間企業の功績があったゆえにとってもよいかもしれないが、地元では富岡製糸場という見方でなく、町にある大きな民間工場としか見られていなかった。そのため、操業停止後も地域の公共財産と思われるまでに紆余曲折があった。一時は忘れられていたような存在、全国の人に必ずしも有名ではない存在だったものを世界遺産にまで階段を上っていった地元の人たちの努力は、富士山や小笠原諸島とは違った意味ですごいものがあったのだと思う。明治時代の人の偉業と無名なものを世界遺産にした地元の人たちの快挙を、普遍的なヒントを持ったものとして捉えてほしいというのは、制作側の隠しテーマのようなものとして持っていた。

<放送番組一般について>

- 前回の放送番組審議会で、5月11日(日)のNHKスペシャル “認知症800万人” 時代「行方不明者1万人～知られざる徘徊の実態～」を話題にしたが、埼玉県の上田清司知事が認知症の行方不明者を早期に発見できるシステムを全国レベルで構築したほうがよいと国に働き掛けるという発表があり、その後、警察庁で行方不明者を捜すシステムを県単位の警察レベルでなく、警察庁の全国レベルで行う考えがあるという報道がされた。それぞれがそれぞれの立場でいろいろと考える時期に来たのだと思う。NHKが一連で取り組んでいる番組は、それを決断するかなり有力な後押しになったのではないかと思う。そういう視点で今後も番組の制作を続けてほしい。
- 5月18日(日)のNHKスペシャル「流水“大回転”」は、すばらしかった。時間とお金をかけ、海上保安庁が協力し、空と海から、陸地には定点カメラを設置し、北海道大学の研究者のデータも参考にするなど、これだけのものができるのはNHKならではのと思った。条件があれば誰でもできるかいうとそうではなく、取り組んだプロデューサー、スタッフの情熱がなければ番組はできないと思う。流水は一晩で接岸したり離岸したりと生き物のような敏感な動きをする。暖流の対馬海流が宗谷海峡からオホーツクへと流れることで流水の大回転ができるということだ。映像はすばらし

いと思うと同時に、流水の海が世界でも屈指の豊かな海であることも今回学んだ。視覚的に見て珍しい現象を捉えたということだけではなく、いかに豊かな海であるかを科学的に証明した点でも、今回の流水大回転は意義があったと思う。NHKは、これからも日本の自然の不思議に科学的に挑戦するなど、いろいろ取り組むと思う。日本の自然は繊細で壊れやすく、破壊されやすい。植物だけではなく、外来種に弱いのが日本の生き物だと思う。一見あまり派手さがなくても日本固有のものに目を向け、貴重な日本のものを紹介してほしい。

- 5月24日(土)、25日(日)のNHKスペシャル エネルギーの奔流 第1回「膨張する欲望 資源は足りるのか」、第2回「欲望の代償 破局は避けられるか」は、エネルギー開発によって人類がさまざまな恩恵を受けているが、その先にある怖さを捉えた番組だった。エネルギーに頼っている今の世界から将来に向けて、それによる怖さや、環境汚染や温室効果ガスを出さない原子力を取り入れることにも相当な覚悟が必要で、廃棄物が際限なく増えていく現状を的確に捉えた番組になっていたと思う。逃げることのできない難問にしっかり向き合っていかなければいけないという構成になっており、視聴者にも考えることを求める番組になっていたと思う。
- 5月22日(木)の超絶 凄(すご)ワザ!「究極の滑らない靴〜アイスリンクを克服せよ!〜」は、作業靴を製造するメーカーと東北大学のチームが、油にも氷にも滑らない究極の靴を開発する対決だった。開発にあたって靴底にガラスの繊維を混ぜた樹脂を使ったり、かんじきのような作り方をしたりという違った視点から、氷の上を走ることで対決していた。番組がきっかけとなってエンジニアチームの中では転倒防止用製品の開発につながっている。番組での対決がおもしろいだけでなく、必要に迫られた技術を実際開発することにつながるよい番組になっていると思う。
- 5月24日(土)の「土曜スタジオパーク in 山梨」は、生放送で甲府市の山梨県立文学館からの中継だった。吉高由里子さんと窪田正孝さんがゲストで、生放送のよさがよく表れていた。2人が登場する際には拍手がなかなか鳴り止まず、司会が抑えていた。山梨でのこの番組に対する期待と喜びがあふれていた感じが画面から伝わってきた。番組の裏話、素顔の裏話があり、聞いていて嫌みもなく、それぞれの個性、人柄のよさがよく表現されたよい番組だった。
- 6月2日(月)、9日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀 本田圭佑スペシャル 第1回「密着“世界一”への道」(総合 後10:00~11:13)と第2回「独占インタビュー エースの覚悟」は、本田圭佑選手に密着した500日の記録で、3年間取材をした取材力とその内容については深いものがあり、見応えがあった。特に本田選手の人柄をう

まく捉えていた。外国でのインタビューに答えるときに「1日の過ごし方はつまらない。練習して食べて寝るだけ」とさらりと言っただけの人間性も出ていた。今日6月20日(金)の「日本」対「ギリシャ」(BS1 前6:40~9:10)は0対0の引き分けで、結果がよければもっと力が入ったのだが、まだ1次リーグ突破の若干の可能性があるということなので期待している。新聞のテレビ欄では、左端を縦に読むと「日本ガンバレW杯」となる粋な演出があり感心した。

- ことばが時代とともに変化するのは当然のことで、時代に応じて正しい日本語のあり方も変化していくものと思う。6月4日(水)のためしてガッテン「ヤバイ！目の疲れ頭痛 まとめて劇的改善DX」を見たが、タイトルで「ヤバイ」と使っていた。番組の中でそのことばが出てくことはあると思うが、タイトルに使うのは歴史が変わったのかという気がした。いろいろなことが変化すると思うが、NHKでの基準はあるのか。

(NHK側)

ことばについては、NHK放送文化研究所に専門の用語委員会があり、国語学者、放送に携わった人間など、多角的な構成で検討している。ことばは生き物なので調査の結果なども踏まえ、ここまでは許容できる、ここは時期尚早という議論もしてまとめている。用語委員会での検討結果が局内に周知され、番組制作現場、ニュース現場にフィードバックされるようになっている。

- これからの日本が避けて通れない、すでに直面している問題がある。6月17日(火)のクローズアップ現代「介護で閉ざされる未来～若者たちをどう支える～」は、若者が親の介護のために自分の人生を犠牲にしているというような視点の番組だった。実際に取材に応じた人は就職したばかりの会社を辞め、介護をするという状況になっているということで、かなり具体的なことを見て衝撃を受けた。義務教育の段階でそういう状況の人もあるし、就職したての20代でそういう状況の人もある。これは大きな問題だと改めて強く認識した。番組では先進国のイギリスまで取材に行っており、イギリスは介護者支援法が定められ、介護する人が悩みを相談できるケアラズセンターのようなものがあり効果を上げていることも報告されていた。日本では要介護者、介護される側の人については制度がある程度出来てきたが、介護する側についてはまだ乏しいというのが現状だと思う。ある程度の年齢になり、そうした状況になるのは理解ができる気もするが、人生これからという若い人がはまってしまっかなか抜け出せないでいるというのは、しっかりとした制度を作らないといけないと

いう気がした。その問題を指摘したこの番組を興味深く見た。NHKはエネルギーの問題にしても、自然の問題にしても、日本が直面している問題にいろいろな切り口で、すばらしい視点で番組にしている。これまで経験がなかったが、社会の中で出てきた避けて通れない問題について、継続して取り上げて視聴者の啓発につなげてほしい。

- 「くらし☆解説」が気に入っている。番組の趣旨からすれば当然かもしれないが、10分間という短い放送時間にもかかわらず、充実した内容で、視聴者目線での解説をしている良質な番組だ。この番組を成功させるかぎは、解説の質はもちろんのことだが、岩渕梢キャスターが視聴者の目線で繰り出す質問のすばらしさにあると思う。解説委員にさらに説明を求める質問が、視聴者のそこが知りたいというポイントを押さえており、番組として理解を深める構成になっているのではないかと思う。これからも質問の質の高さを維持し、番組も続けてほしい。
- 集団的自衛権の問題などはどこかの議員が地元に戻って地元の人にアンケートをとると、はっきりした意見を持っている人は少なく、分からないと答える人が多いという記事を読んだ。分からないと思っている、自分の意見を決めかねている人がたくさんいる。日本は意見を持たなければいけない状況にあると思う。そのためにも、もう少しわかる番組を工夫してもらいたい。FIFAワールドカップの関連番組をあらゆるジャンル、あらゆる方向から取り上げて一般に浸透できるのであれば、もっと難しい問題や政治的な問題に関しても工夫できるのではないかと強く感じた。

(NHK側)

集団的自衛権については、例えば5月6日(火)に解説委員が出演した大人ドリル「今さら聞けない…集団的自衛権の“いろは”」(総合 後6:10~6:44)を放送している。ご指摘を踏まえ、そうした番組を今後もしっかりと放送したい。

- 5月25日(日)の茨城スペシャル「小澤征爾指揮 水戸室内管弦楽団演奏会」~NHK水戸 県域放送10周年記念~(総合2 後2:00~3:59.25 茨城県域)を見た。小澤征爾さん渾身(こんしん)のベートーベンの「交響曲第7番」で、録画して何度も見た。モーツァルトの「オーガエ協奏曲」のソリスト・フィリップ・トンドゥルさんもとてもよかった。小澤さんの指揮する演奏を映像で見る機会は少なくなると思うので、これからもNHKでたくさんの映像を残してほしい。
- 6月6日(金)のヤマナシQUEST「山梨県民限定!『花子とアン』ブーム 徹底

取材！」を見た。連続テレビ小説「花子とアン」を通じ、地元ではどのような影響が出て、どのような活動が行われているかという紹介があった。村岡花子にゆかりのある場所を案内する地元のボランティアの人たちのフットパスの運動が紹介された。いろいろな活動を紹介するよい機会だったと思う。そんなことをしている人がいるのかと知らなかったことがたくさんあった。「連続テレビ小説」の前2作の評判がよく、村岡花子については山梨でもあまり知られていなかったこと、山梨が舞台になる期間が短いことなどから不安もあったが、地元では温かく受け入れられ、盛り上がりが見られる。いろいろな地域の活性化に役立っている。韮崎市に民俗資料館があり、そこが教会のシーンのロケ地になっている。昨年1年間で1,100人ぐらいしか来ていなかったのが、ロケ地となって4月から2,000人も来ている。「連続テレビ小説」の効果はすごいと改めて痛感した。方言についても今までネガティブなイメージしかなく、全国でいちばん汚い、イメージの悪いことばと言われていた。「て」などは相当はやっている。大げさにいうと自分たちの方言という文化をもっと大切にしないといけない、誇りに思ってもよいのでないかという感じが生まれ始めた。それは「連続テレビ小説」のよい影響だと思う。多くの地元の人は「顔が黒すぎる、何とかならないか」と言っているなので、検討してもらいたい。

- 連続テレビ小説「花子とアン」を楽しんでいる。花子が山梨にいるときは実家の農作業と学校という暮らしで、東京にあこがれる様子がよく出ていた。山梨で暮らす花子の母親、朝市の母親もそうだが、農作業を行う者が昼間はすすけた顔でもよいのだが、夜の食事のときもあれほどすすけた顔なのは強調しすぎではないかという感じがした。
- プレミアムドラマ「プラトニック」を見ている。野島伸司さんの脚本だ。トレンドドラマを多数ヒットさせた野島さんがNHKで脚本を書くのは初めてだと思う。暴力、いじめ、自殺問題、人間の暗い部分を独自の視点で切り取っている作品が多い。社会問題や命に関する何かを投げかけようこのドラマを作っているのだと思う。最終回まで楽しみにしている。
- BSプレミアムでも放送しているが、7月13日(日)から総合テレビで韓国ドラマの「太陽を抱く月」が始まる。日本の一般的な国民感情は韓国との外交上のあつれきから嫌韓に関する書籍がベストセラーになるほど、韓国の印象がよくない。これまで韓国ドラマが民放でもずっと放送され飽きがきている状況の中で、ようやく韓国ドラマから「ダウントン・アビー 華麗なる英国貴族の館」に変わったが、また韓国ドラマに戻る。海外ドラマが韓国ドラマに偏りすぎているのではないかと思う。ほかの国のすばらしいドラマもあるはずだ。BSプレミアムでも8月3日(日)から新しい韓国

ドラマ「奇皇后」が始まる。どのような基準で韓国ドラマを選ぶのか聞きたい。

(NHK側)

韓国との政治的な理由から韓国ドラマを放送しないという判断はない。日本と韓国の政治状況がどうであれ、国民レベルでの文化の交流は大事だと思う。多すぎるのではないかということは議論があると思うが、一方でニーズもあり、「ダウントン・アビー 華麗なる英国貴族の館」に変えたことで、なぜ韓国のドラマをやめたのかという声も相当来ている。全体のバランスを取りながら考えたい。

比重としては、韓国ドラマが1番多いわけではない。アメリカ、イギリスのドラマも数多く放送している。基本的に海外ドラマはおもしろいかどうかで選んでいる。次に視聴者のニーズがあり、喜ばれるかどうかの計2点だ。政治的な理由などで選んでいるということは1つもない。「冬のソナタ」もおもしろかったので放送したらどうかということがきっかけだ。いろいろな意見がいろいろな人から寄せられていることは確かで、それも踏まえてこれからの編成を考えようと思う。

○ 5月24日(土)のE TV特集「歴史と民族から考えるウクライナ」を見た。場所が遠いこともあり、ふだん関心があまり高まっていないと思う。民族の問題、宗教の違い、産業化の度合いの違いなどいろいろな背景が説明されていた。石川一洋解説委員が現場の話をされていて、臨場感が伝わってくるようで、説得力がありよかった。解説委員だけの説明では事態の一部を切り取ったようなリポートという感もあるが、スタジオに何人かの専門家がいて専門家の持つ情報、見解が披露され、番組に厚みが出たのではないかなと思う。外務省関係をはじめ幅広く人選されていたが、視聴者にとっては堅いイメージの人が多かったので、人選には工夫が必要だとも感じた。いろいろな人がいるので多様な価値観、情報を持っている人を幅広く集めたほうが、視聴者もいろいろな判断ができるのではないかなという印象を持った。今回の番組でも配慮されていたが、今後も人選には偏りがないように、引き続き考慮してほしい。

○ 6月5日(木)のすてきにハンドメイド「カーブで描く“スイーツ”モチーフのキルト」は、初心者向きではなく、ある程度経験している人が楽しめる内容だと思った。キルトは生活の中でどのように活用するのか、作る楽しみは何だろうという初心者からすると、キルトの楽しさが伝わらない中でスイーツに関するデザインの話や実務的

な作り方を紹介する内容だった。加えて、方向性として今回は「パートナーシップキルト」に参加する人向けの内容で、ついていけない感じがした。特に気になったのは作業をしている人の爪だ。ほかの指はネイルアートをしているのにいちばん目立つ親指だけネイルアートがはがれ、筋が入っていた。手順よりもその爪に目が行ってしまうのが残念だった。出演者の意識の程度以外に、それを作る番組側が撮影する際に撮影する角度などをしっかりと打ち合わせしていたら、あの状態の爪で出演することはなかったのではないかと思う。顔ではなく手を中心にした作業を見せる中で、その部分はもう少し意識する必要があると思った。せっかくのよい内容も、たかが爪のことでそちらに意識が集中してしまうのはもったいないと思う。

○ 6月17日(火)に再放送で趣味D○楽 京都で磨く ゆかた美人 第二回「すっきり見える ゆかたの着付け」を見た。何気なく着ているゆかただが、ゆかたにはマナーがあり、普段着のゆかたは綿、裸足、帯も半幅でよく、よそ行きのゆかたは絹(ろ)、足袋を履き、ちゃんとした帯をして、襦袢(じゅばん)にえりまで付けるという基本的なことを学んだ。歩き方も示されていて、なるほどと思った。とてもよい番組に出会えた。車の乗り方についても、着物を着たときの車の乗り方はとても難しく、どのようにすればよいのかと悩んでいたが、この点も示されており、こうすればよいのかと思った。降り方はどうなのだろうと思ったのだが、そこは取り上げてなかったので紹介してほしかった。

○ 「使える！伝わるにほんご」は、外国人のための日本語の実用的なもので、日本語を再発見するようなどころがあり、おもしろい番組だ。外国の人がどう日本人を見ているか、どう日本語と格闘しているかが分かった。深夜の放送なのでもう少しよい時間帯にこのネタで楽しい番組ができたらいと思った。

○ 6月11日(水)に再放送で釣りびと万歳「毛ばりで誘え！ヤマメと一騎打ち～加藤るみ 埼玉・秩父へ～」(BSプレミアム 後0:30～0:59)を見た。「テンカラ釣り」という日本古来の毛ばり釣りに挑戦していた。出演者が師匠となる人にテンカラ釣りを教わって釣り上げるというもので、番組としてはよかったが、もっと深い釣りのテクニックがあるとなおよかったと思う。釣り番組が少なくなっているので寂しい思いをしている釣り好きの人は結構いると思う。踏み込んだ内容がこの番組の中でもできれば釣り人のファンが増えると思うし、釣りをしている人は満足すると思う。番組の中では、ヤマメの郷土料理を見せたり、鍾乳洞を見たりと地域のいろいろな魅力を発信しており、番組自体は釣りの素人が見ても秩父の川はよい、釣りをしてみようかという誘いになっていたと思う。

- 政府の規制改革会議などによって農業改革、農協改革の話が出ている。先ほど答申されたばかりだが、地域の協同組合運動として果たしてきた役割もある。こういう機会なので規制は改革しなければならない、競争力のある産業を作らなければならないという考え方と同時に、今まで果たしてきた役割もしっかり伝える番組を作ってほしい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年5月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

5月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、16日（金）、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成25年度関東甲信越地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。

続いて、につぼん紀行「ぼくらの秘密基地～東京・光が丘公園～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長	秋田 典子（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）
委員	新井 幸人（写真家）
	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	国崎 信江（（株）危機管理教育研究所代表）
	国府田厚志（いちご農家・JAはが野代表理事専務）
	内藤 久夫（（株）内藤代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（（有）古沢園代表取締役）

（主な発言）

<につぼん紀行「ぼくらの秘密基地～東京・光が丘公園～」

（総合 5月5日（月）放送）について>

- NPOのスタッフが見守る中、子どもの遊びの規制を取り払った公園が東京都内にあることにまず驚いた。11年前に地域の母親たちが立ち上げ、毎週金土日に運営しているということだった。危険だとか、けがをしたらだれが責任を取るのかとか、たいへんな反対があったと紹介されていたが、当然出てくる話だろうと思った。地域の

人たちがそれらを乗り越え、こうした取り組みを行っていることに感銘を受けた。私は子どものころに森や山が近くにあったので、番組にあったように木に登ったり、自分たちだけの場所を作るなどし、それはとても楽しい経験だった。学年を超えた同級生だけではないつきあいがそうした体験の中で自然に育まれていた気がする。そのようなことによって、結果としてわれわれの世代には先輩と後輩の秩序ができていた感じがしている。番組では、特に秘密基地を作るグループに焦点を当てていた。関わった子どもたちの上下関係や、ルールを守らなければ仲間として認められてもらえないなど、自分たちで活動する主体性がそうした環境の中で育つのではないかと思った。そうしたことがあるべき姿なのではないかと強く思った。現在は「モンスターペアレント」と言われるように親が学校などの教育の場にさまざまに口を出すため、教育現場が委縮してしまうと聞くことが多い。この取り組みに対してもいろいろなことがあったのだろうと思うが、それを乗り越えたNPOの取り組みは力強い。こうした取り組みはぜひ取り上げてもらいたい。とてもよい番組だった。

- 番組を見て率直におもしろかった。私も子どものころに秘密基地を作った。風邪をひいて3日ぐらい学校を休むと上級生に秘密基地を乗っ取られてしまうという悔しい思いをしたことがある。上級生に乗っ取られないようにどう守ろうかと仲間同士の連携があった。最近公園で子どもたちが遊ぶ姿を見なくなった。番組を見た後で近くの公園へ行ったが、子どもは学校の校庭で遊んでいる。放課後に学校の校庭で何時まで遊んでよいということで子どもたちが遊んでいる。学校の先生が目があるから遊んでもよいとなっているのかもしれない。学校の校庭で遊ぶことが楽しみだと子どもも話しており、放課後に遊べる場所が自分が子どものころとはずいぶん変わってしまったようだ。この番組が作られた背景には、保護者世代に訴えたいメッセージもあったように感じた。私たち世代では、我慢をすとか、仲間に入るために努力をすといったことは、子どものうちに自然と培われていたものだが、今の子どもたちにはそうしたことがなくてもどうにか過ごしてしまうということが番組の中でよく見えた。しかしそれでは、子どもが大人になり社会に出る際に、コミュニケーションが取れず、うまく社会活動をしていけないという危惧もある。この公園ではNPOの大人たちが目を光らせ、子どもがけがをしたらすぐに救護にあたっていたし、たき火など火を使うことも可能だったが、そのような経験を通してこそ、子どもたちは将来、よい大人になれると感じた。この番組を見て自分たちの地域も変えなければいけないと胸に響いた保護者もいると思う。基地を作ってみんなで遊ぶなど、みんなで何かをすということとは大切な事だと思う。都会の公園の出来事にすぎないと思って見始めたが、見ていくうちになぜこういう番組が放送されたのだろうと考えが深まり、いろいろなことを感じた番組だった。大人、保護者の世代に向けて積極的に放送するべきだと思った。

○ 番組では都会の公園の様子を淡々と追っていた。少子化できょうだいも少なく、学校、地域もそうした環境の中で子どもに対して以前とは違う関わり方をしなければならず、これからの子どもの育て方については、新しい時代に対応できるところまで社会が進んでいないと日ごろから感じていた。大人が口を出さず、子どもたちを自然の中で自主的に遊ばせているだけで、いろいろなものを子どもたちなりに得て成長していく様子がとてもシンプルにうまく描かれており、よい番組だったというのが全体的な印象だ。私の住んでいる地域では毎年桜や紅葉の時期にライトアップのイベントを行っている。夜は冷え込むので小さなたき火をし、お客さんに火に当たってもらっているが、火を知らない子どもが最近かなりいる。特にたき火のような形で燃えている火はほとんど知らないようで、家がオール電化になっている子どもは、火を見たことがないのかもしれない。たき火は風が来れば煙が回って煙になることもあるが、それもわからず、小さい子どもは何が起こったのだろうという目をして火をずっと見ている。中には火を触ろうとする子どももいる。あの火が大きくなると火事になってしまうことも知らないのだろうし、マッチもすれないのではないかと思う。火の取り扱いを知らない子どもが結構いることに驚いた。うどん打ち、そば打ちを体験させると包丁をまともに使えない母親もたくさんいる。最近魚を料理する際にはさみで切る人もいるそうだ。そういう中で木に登るとか、板を敷いてロープを縛るとか、みんなで協力して何かを作ることが淡々と描かれていて、子どもたちが目をキラキラと輝かせ、いろいろ工夫し、知恵を使い、コミュニケーションを取っている様子など、よい形の取材ができていたと思う。練馬区・光が丘の人たちが11年前からリスクのあることをあえてやろうと決断したこともすばらしいと思う。この番組を見て大人たちが危ないからと子どもたちに自然とのかかわり、刃物、火との関わりを持たせないことがどうなのかと考えるよいきっかけになったと思う。鋭いところに切り込んだ番組だったという印象だ。

○ こどもの日に、大人たちに自分の子どものころの気分を思い出させる番組だったと思う。ずっと子どもたちに張り付いていたからかもしれないが、かわいい笑顔やむくれる様子など、自然な感じが撮れていたのも、なおさら昔の自分を投影して番組を見た人も多かったのではないかと思う。撮られたいとカメラの前に出てくるような子どもではなく、自分たちの行っていることに集中している子どもたちの姿をしっかりと撮っていたことに好感をもった。この公園での取り組みは、その裏にいる覚悟のある母親たち、遠くで見守るNPOの人々、地域の人々があってこそだと感じ、その後で現代の状況をしみじみと考えた。そもそも公園が存在しないところではできないのか、このような守られた状態で週3日限定でないとできないということに関して、時代の抱えている問題、状況に思いを至らせた。全国に500ぐらいこのような取

り組みがあるそうだが、番組を見てよいと思った大人たちがこの方式を取り入れることができたらいと思う。この取り組みを行っていくノウハウや乗り越えるべき課題などいろいろあると思うが、どうしたら子どもたちをのびのびと遊ばせることができるのか、そのノウハウが紹介されると、現代のこのような状況の中で生きていくうえでの知恵、コミュニケーションの取り方、リーダーシップの発揮のしかたなど、そういうものを身につけるよい機会につながると感じた。何かの機会に違った形の番組でも紹介するとよいと思う。とても楽しい番組だった。

- 番組で紹介されたようなNPOの取り組みで運営している公園があることはまったく知らず驚いた。私の住んでいるところは田舎で何の制限もない。火遊びは駄目だと思うが、木登りもできるし、親もNPOも見えておらず、勝手に遊んでいる。そう思って近くの公園をよく見ると危ないと思うような木登りをかなりの子どもたちがしていた。こうした取り組みをしなければ子どもたちが自由に遊べる公園がないということは残念だ。番組が訴えたかったのは何なのかと考えたが、2つあると思う。1つは、自由なのびのびとした自然の空間でこそ子どもらしく生き生きと遊べ、仲間意識が育ち、自力で問題を解決していく力が身につくと思うので、子どもはのびのびとした空間で育てるべきだということだと思う。最初は仲間に入れなかった子どもが意を決して再挑戦するが、その心の変化の過程がもう少し詳しくわかるとよりおもしろかったのではと思う。もう1つは、もっと全国に広げていくことで、いじめ、差別を減らす力になるのではないかということだと思う。かつての母親たちの努力によってこうした仕組みができあがったということだが、その当時、行政はどうしてそこまで踏み込んで決断したのか。よい取り組みで、もっと広がればよいと思うので、そういうことも訴えたかったのだろうと思う。番組のねらいは小さな人間模様、人間ドラマを描くことが主であり、その心の動きが中心だったと思う。さらに発展させ、子どもが遊ぶことはどうあるべきか、地域ごとに特徴もあると思うが、できるだけ広く生かすことができるような、子どもたちの暮らすよりよい社会につながるような番組づくりを期待したい。子どもがどんどん成長する姿がよくわかり、たいへんよい番組だったと思う。

- 11年前に母親たちが立ち上げたということだった。遊びなので木に登ってすり傷を作るといのは日常的にあることだと思うが、たとえば小さな子どもが木から落ちて足を骨折したなど、これまでに大きな事故はあったのか。

(NHK側)

11年間でいちばん大きかったのは、取り組みが始まって2年目に木に登って落ちた子どもが足を骨折したことだそうだ。

当時は母親たちも、区も、安全管理は本当に大丈夫かという手探りの状態で進めていたが、そのときは骨折した子どもの親が「これは息子の責任だから気にしないでほしい」と言って、大きな問題にはならなかったということだ。

- 基本的に自分で遊んでいれば自己責任だ。その事例で言えば、たまたま両親の理解があったのだと思う。組織で取り組んで子どもたちを遊ばせるとなると、けがをしたときにだれが責任を取るのかということがある。たとえばスポーツやレクリエーションなど、地域の子ども会の行事に対応する保険もある。このようなことに取り組むうえで大人が万が一のときに 100%対応できることはないだろうが、フォローできるような、あるいはNPOの母親たちが個人攻撃されないような仕組みがあるならば、それを紹介することで、自分の子どもにもあのようなことを体験させたいと思う親はたくさんいると思う。限られた放送時間の中で限界はあると思うが、番組の中でそれらのことにも触れるとさらによかったと思う。そうすれば、自分の地域でも取り組んでみようとする人が、もっと出てくるのではないか。番組自体は意義のあるものだったと思う。こうした形で取り組まないと子どもが自由に遊べないというのは情けないというか、寂しいことだ。機会があれば今回の取り組みの背景についても取り上げてもらいたい。
- 番組は都会っ子の成長物語というテーマだった。1人の男の子をクローズアップし、友達との関わりの中で成長を見せており、その様子が本当にほほえましかった。一生懸命にだれの手も借りず、自ら問題解決していこうとするがんばりもあり、一度はうまく行かなかった友達に対しても広い心をもって受け入れる姿もあった。大人もできないようなところを子どもたちはそれぞれの成長過程の中で他人との関わりを学び、がんばっているところが伝わってきた。秘密基地づくりの楽しさも伝わってきて、放送が終わってもすがすがしさ、懐かしさを感じ、とてもよい番組だった。NHKのほかの番組でも企画してほしいことがある。番組冒頭でも触れていたが、都市公園が子どもにとっての遊び場でない現実があり、ボール遊びも大声を出すこともできない、制限だらけの公園が多く、大人が子どもの遊び場を奪っている現実に触れる番組も制作してほしい。この問題は都市公園に限らず、学校にも影響が及んでいる。たとえば学校の運動会の徒競走でスタートにピストルを鳴らすと地域の人がうるさいということでピストルを鳴らせないとか、体育の授業で「大声を出すな」と苦情が来ることなどがある。昔からあった学校の付近に新興住宅地が造成され、そこに多くの人が住むようになったときに学校に対して苦情がくる。大人の事情で子どもの活動が遊び場だけでなく、学校現場でも制限される。それに対し、そうではないと対応する先生がなかなかおらず、地域とのあつれきを生まないようにと子どもに制限をかけて

いる。外では大声で遊ばないようにというばかげたことを言わなくてはならない社会になっている。子どもは自然環境の中で遊んで五感を使ってさまざまなことに興味をもち、いろいろな人と関わる中で自分の行動様式を見つけ、自分のペースで創意工夫し、挑戦し、失敗し、それを乗り越えていく。遊びは人間形成の中で重要な要素であることは間違いない。NPOはそれをしっかりと今の子どもたちに伝えなければならないという理念をもって活動していて、光が丘団地以外にも全国で144件運営している。そういう遊び場が特別な場所であってはならない。どこにでもある身近な存在に大人がしていかなければいけないと思う。このような現状を大人が作ってきたのだから、それを回復するのも大人の役目だと思う。そうしたNPOの活動そのものの紹介もあってよいと思うし、社会的現状をどこかの番組で伝える必要があると思う。東日本大震災の被災地でも子どもの遊び場が奪われている。震災から3年たって、体を動かさないストレスによってイライラしたり、無気力になったり、被災地の子どもに悪影響を及ぼしている。大人が勝手に学校を避難所に決め、校庭に仮設住宅を建て、子どもの遊び場を失わせたため、体育の授業もできず、仮設住宅があるので運動会もできないし、部活動もできない。ことごとく体を動かす場所を被災地で大人が奪っている。日本は子どもを守る社会でなく、厳しい環境におき、それをしかたがないと言う大人が多い。日本社会のそのような構造が遊び場を奪っても平気という状況をつくっていると思う。単に和やかな番組で終わらせるのではなく、あらためて多くの人々に対して、日本が子どもにどのような環境をつくっているのかということについて問題提起ができればよいのではないかと思う。

- 火遊び、木登り、そういうことを自由にできる空間だが、一方で内気な子どもたちにはやや来づらい、排他性のある空間という両面を持っていると思う。社会性を身につけるひとつの場として有効だが、プレイパークが必ずしもすべての子どもにとってパラダイスではないと思う。だれのための公園なのかという問いを立てるとすれば、そうした空間をつくることで、たとえばお年寄りには排除されるし、とても難しいと思った。自由に遊んでいるように見えても、一方で与えられた空間であることも番組を見て改めて感じた。マトリョーシカ人形のように開けても開けても与えられた空間が出てくるというような、公園、遊び場の行き詰まりを感じた。私たちの業界でも子どもは木登りをするものだとか、自然に触れたら心身が健全になると言う人が多い。体に障害、問題があっても病院でずっと過ごした子どもが健全でないのかと言われるとそうではないと思う。多様な子どもの育ちがある中の1つとしてこのようなものがあると思って見てもらおうとよい。

- とても印象的な番組だった。今は子どもの遊ぶところが少ないと思う。私は地方都市だが都市部に住んでいる。学校から携帯メールで、不審者情報が月に1回ぐらい送

られてくることがある。公園で放課後に子どもを遊ばせることが親としても難しい時代だ。学校も放課後になると子どもをさっさと帰してしまう。先生が放課後の子どもたちの活動にまで責任をもって監督できないことが背景にあると思う。自分が子どものころは放課後には時間ぎりぎりまで遊ぶとか、公園に行くとか、町中で路地を駆け巡るとか、そういうことでよく遊んでいた。子どもの遊ぶところがない中で番組のような取り組みがあること自体が新鮮だった。よい活動だと思うからこそ、周りのボランティア、親、行政やシステムがどのように設計され、維持されているのかということにも関心をもった。番組の中ではそういう人の声をほとんど取り上げていなかった。「にっぽん紀行」のホームページには「ささやかな、しかし本物の『人間ドラマ』を発見する紀行ドキュメンタリー」と書いてある。番組の趣旨からすると子どもに焦点を当て、特に秘密基地を巡る仲間意識とか、参加意識のようなものを取り上げたことは番組としてあまりぶれておらず、よかったのではないかなと思う。このテーマは継続的に別の形で取り上げるともっと広がっていくのではないかなと思った。子どもに取材していたが、正直に自分の感情を語っていた。取材期間は1か月程度なので、取材している大人と深い面識はなく、関係もできていない段階であれだけの本音の感情を引き出したのはすばらしいと思った。子どもにカメラを向け、しっかり取材をしたカメラマンは子どもとの関係をうまくつくり、本音を引き出すよい取材をしていたと思う。

(NHK側)

この番組の提案者はカメラマンで、ニュースのレポートである場を一度取り上げていた。カメラマンには同じぐらいの年齢の子どもがいて、興味をもって見つめ続けてきた。ほかのスタッフは若い人間ばかりで、みんなでいろいろな工夫をして子どもとの距離を縮め、取材を行った。われわれも制作をしながら子どもはすごい、すばらしいと感動する反面、やはり与えられた場でしかないとも思った。厳しい場面もあり、これはいじめに近いのではないかなとか、子どもだけの世界なので生々しいこともあった。いろいろなことを感じ、いろいろと悩みながら番組を制作した。今回は子どもたちの人間ドラマのような形に収れんしたが、この公園の運営はどのように行っているのか、母親たちはどんな思いなのか、ボランティアはどうなっているかなど、番組の中に入れられなかったこともある。どちらにしても少子化の中で子どもたちがよい環境で育ってほしい、それは大切なテーマだと思っている。違う側面からもいろいろな番組を作りたいと思う。

<放送番組一般について>

- 3月29日(土)、30日(日)、4月5日(土)、6日(日)のNHKスペシャル「人体ミクロの大冒険」を見た。自分が健康を維持するためにはこうするだろうとか、こうすれば風邪をひかないとか、こうすれば老化を防げるとか、こうなると動脈硬化を防げるとかという概念が番組を見て変わった。タイトルからは医学的なことや病気に関する内容を意識しなかったのだが、番組を見ている自分自身が気づかされることが多く、今までの知識が違ふと感じさせる番組だった。とてもわかりやすく、ためになった。深く入り込んだ作りはNHKならではのもので、NHKでなければできないと感じた番組だった。
- NHKスペシャル シリーズ 廃炉への道を、4月20日(日)の第1回「放射能“封じ込め”果てしなき闘い」(総合 後9:00~10:13)と25日(金)の第2回「誰が作業を担うのか」(総合 後9:00~10:13)を見た。原発の問題は科学的な観点からレポートを続けてほしいとこの場で話をしたが、今回の廃炉の件についてもよくできた番組だと思う。40年間という廃炉の工程表の内容を理解でき、たいへんなことと再認識した。アメリカのスリーマイル島、旧ソビエトのチェルノブイリの事例も挙げ、国全体で取り組まなければいけないという意識を国民に伝え続けてほしいと思った。スリーマイルの記録についても膨大なフィルムを解析し、貴重な映像を抽出し、取材する側もそのような労力をかけていることに感服した。一方、気になったところがいくつかあった。専門家の検討会を作ってNHK内で検討していたが、最後に総括した専門家のコメントがあまりにも一般論的すぎて、具体的な話がなかった感じがした。専門家の意見を伺うのであればもっと詳しいところまで踏み込んでほしかった。スリーマイルの人員確保のこともアメリカではうまく人員確保をしたということまでしか取り上げていなかった。いかにして確保できたのかももっと掘り下げて取材をすると、日本の事例にうまく提言ができるのではないかという印象を持った。第2回で廃炉の作業を元請けから下請けにどんどん出しているという話で人員確保が難しいという紹介があった。取り上げ方を見ると単に上から下へどんどん落としているような感じがした。実際の現場は専門性に応じ、いろいろな業者をうまく使っていると思う。ピラミッド構造にし、そこで人件費が流れるという図だけを放送すると下に全部丸投げをし、無駄なのではないかと誤解を招くような危惧をもった。その点も若干補足してくればよかった。第1回で廃炉の作業の現場を紹介するときに東京電力の人も出ていたし、メーカーの人も出ていた。メーカーの若い人材に廃炉のためにがんばってほしいという気概をもってもらうためにも、臆せずメーカー名を出し、がんばっているところを伝えてもらいたい。今後もテーマ設定と取材に大いに期待している。

- 5月4日(日)のNHKスペシャル「宝塚トップ伝説～熱狂の100年～」を見た。
5人のトップを同時進行で番組構成する方法は珍しく、よかったと思う。5人のトップの個性、魅力が十分に紹介されていて、宝塚歌劇団を知らない人でもかなり理解が進んだのではないかなと思う。トップになるための道のり、トップでいるための苦労が並大抵でないことがよくわかった。印象に残ったことはいろいろあるが、花組の蘭寿とむさんが格別だった。自分の歌を録音して聴くとか、細かい振りを楽譜に書き込むとか、首席の人も努力の人なのだとよくわかった。注文をつけるとすれば、宝塚100周年は、創始者である小林一三の「清く、正しく、美しく」という理想から始まっているということも紹介されるとよかったと思う。特殊な世界である宝塚歌劇団に興味深く見ることができた。

- 5月11日(日)のNHKスペシャル“認知症800万人”時代「行方不明者1万人～知られざる徘徊の実態～」は、たいへんタイムリーな話題だった。今までは認知症で行方不明になったケースが相次いでいても、事故ではないということで情報が公開されていなかった。それがこの番組で行方不明となっていた人の身元が7年ぶりに判明し、翌日の「ニュースウオッチ9」などでも伝えられていた。警察などにかかなり刺激をもたらした番組だと思う。栃木県でも平成25年に認知症、あるいはその疑いで身元が不明になっている人が135人もいる。60%はその日のうちに発見されているが、35%は2～7日を要して発見されている。65歳以上の人が多いそうだが、7名は残念ながら死亡で発見されたと公開されている。今回の番組では、NHKの番組編集の基本計画に沿った国民の生命と財産を守る公共放送としての役割がしっかりと番組に生かされていると思う。これからもこういう番組を作ってもらいたいと強く感じた。

- NHKスペシャル“認知症800万人”時代「行方不明者1万人」を見た。日本は高齢化社会ということで認知症がいろいろ話題になっており、少し前に、愛知県で認知症の家族が鉄道の線路で事故を起こし、裁判で遺族にも損害賠償が請求されるというニュースがあったので、タイトルを見てどういうことなのかと興味をもって見た。行方不明者が年間9,600人余り、そのうち351人は亡くなっているという数字が出ていたが、かなりの数字なので驚いた。行方不明の事例がいろいろ紹介されており、全国各地でいろいろな形で取材されていた。内容からして受け入れてもらいやすい取材ではないと思うので、作り上げるまでにたいへんな思いで取材をしたのだろうと思いはせながら番組を見た。アンケートなどでどういう状況にあるかも数字でわかりやすく出ており、番組全体もわかりやすい構成だったと思う。北海道釧路市のSOSネットワークについては、行方不明者が出ると最初に警察に届けがあるのだろうが、そこから自治体、地元のFM局、タクシー会社、ガソリンスタンドなどの事業所に連絡

が回り、徘徊者を探す先進的な事例が紹介されていた。すごいシステムができていると感心した。なぜ全国で普及しないのだろうかと思っていたら、個人情報保護法やいろいろな兼ね合いでなかなか普及しないという問題点も指摘されていて、とてもわかりやすかった。群馬県館林市で7年間行方不明になっていた人がこの番組をきっかけに東京都台東区の人と判明したニュースもあり、NHKの力はすごいとあらためて思った。その前にも大阪市内の介護施設で暮らす人の身元がNHKの報道をきっかけに明らかになった。こうした事例が社会にたくさんあるのに警察、自治体があまり真剣に熱意をもって取り組んでいる感じがしない。一応受け付け、一応情報を流したが、7年たった人も名前を誤入力していたために検索で合致しなかったようだ。顔写真が登録できないなど、ほんのわずかな努力をもっとしていればと思った。社会全体で新しい仕組みを作っていくなど、関係者にはこの問題にどう取り組んだらよいのだろうか真剣に考えるよいきっかけになる番組だったと思う。今日審議会に来るときにラジオを聞いていると、「徘徊（はいかい）している方がいるかもしれないのでやさしく声をかけましょう」という内容の話があった。「夏は暑いので熱中症になるかもしれない。声をかけにくい、水を飲みますかということで声をかけたらどうか」とかなり具体的な内容だった。形にしたい、実際に効果を上げたいという気持ちがわかるような形でメッセージを上手に出していた。当事者の動きが鈍いとしたらNHKがうまく刺激し、よいシステムができるきっかけになればという思いで見た。大切な番組だったのでないかと思う。

- NHKスペシャル“認知症800万人”時代「行方不明者1万人」を見てショックを受けた。自分が将来どうなるのだろうか不安になった。行方不明だった人の身元が判明したことよかった。7年間の大きな変化に衝撃を受け、見守る人もたいへんだったと思うが、どこにいるのか、どこに行きたいのかがわからない本人がいちばんつらかったのだろうと思う。番組では時間に余裕がなかったので取り上げられなかったのだろうが、本人がいちばんつらかったのではないかということが伝わるとよりよいと思った。
- 4月22日(火)の地方発ドキュメンタリー「園長がハンターになった～格闘する旭山動物園～」に衝撃を受けた。旭山動物園の坂東元園長が自ら銃を持って獣害のもとであるエゾシカを撃つ決意をした。人気のある動物園の園長がどれだけの覚悟で銃を持つことに至ったのかを考えると胸が痛んだ。この番組は動物園の園長がハンターになるという裏切りがあり、また、2年間密着取材をし、園長を信頼していたNHKの取材者を園長がある意味で裏切っていた。NHKの取材班はエゾシカを撃つところを取材したいと思っていたのだが、園長がそれを内緒にしていた。後で子どもたちに授業をしているときに実はエゾシカを撃ったという話をし、NHK側もびっくりしたと

いう話だった。動物を自らの手であやめることとか、自然とどうやって共存するかなど、いろいろな問題を指摘しているよい番組だったと思う。銃を撃った後は、人間の本能なのか、どうしても笑みが出てしまうようだ。一般の人たちも映っていたが撃った後に笑っていた。坂東園長が撃った後にどういう顔をするのか気になって見ていたが、すごく覚悟をしていたようで、撃った後も深刻な顔をしていたのが印象的だった。エゾシカ問題は難しい問題だ。どこかでわれわれが増やしてしまったエゾシカを自分たちで殺さなければいけないことに直面し、それにしっかりと向き合っているのが坂東園長だとよくわかった。

- 4月25日(金)の「しあわせニュース2014春」(総合 後8:00~8:43)を、タイトルを見てどんなしあわせニュースがあるのかと関心をもって見た。各地域のニュース素材を集めていたが、しあわせというか、ほのぼのというか、単なる話題みたいなものもあり、玉石混交という感じもした。それをうまく盛り上げて番組にしていたと思う。大分放送局から出ていた水上と水中を撮るカメラを技術現場の人が作ったことを紹介した後で、その開発者が実際にスタジオのカメラマンをしている演出はおもしろいと思った。番組はシーズンごとに放送するということなので、いくつか指摘をしておきたい。番組全体では話題が16件もあり盛りだくさんだった。16件並べてしまうと単調になるし、視聴者も飽きると思う。ある程度の区切りで総括をし、タレント、ゲストがコメントをするという構成にしているのではないかと思うが、ニュースを流し、ゲストにコメントをもらってもうまく使い切れていない感じがした。通り一遍のコメントをもらうだけなのでもったいないという感じがした。民放であれば、とりあえず出演者がいればそれだけでにぎやかな演出になるということによいと思うが、ニュースを流す番組であればもう少しゲストをうまく使うか、それ以外の方法で視聴者を飽きさせない構成を考えてもらいたい。司会が桂文枝さんという大御所だったが、使いきれていない感じがしたので、その辺りは改善してほしい。番組の中で投票のシステムがあった。最後に取り上げたのが甲府放送局の盲学校に贈られるオルゴールの話題だったが、最後に紹介され時間も長く、感動させる内容で、投票でも1位になった。いかにもそれをねらって投票システムを取り入れたのではないかと思うほどだった。投票をするのは制作側にしてみればダイレクトに反応がわかるのだろうが、意外な反応が出るぐらいの仕組みをうまく取り入れほうがよいと思う。制作側の意図したとおりに反応が返ってくるのもいいかなものかと思った。

- 5月1日(木)のクローズアップ現代「極点社会～新たな人口減少クライシス～」を見た。これまで高齢者問題というと高齢者の増加、超高齢社会について消費動向や後継者問題という社会的影響について語られることが多かった。地方で高齢者が減少し、さらには地方の若い女性が都市部に流出することで限界集落ではなく、消滅集落

という危機にある地方があることをこの番組で知った。若い女性が地方から出ればそこでは子どもが生まれないわけで、子どもの人口も減るという研究のシミュレーション結果は、地方にとって消滅に向かっているという大きな脅威を示したと思う。若い女性が働く場所、収入を得る環境が地方では限られていて、その1つである介護職も高齢者そのものが減少し、福祉施設も空きが出るようになり、職場も失われようとしている。番組を見てそうした現実には大きな衝撃を受けた。「クローズアップ現代」ならではの鋭い視点で社会の課題を紹介するよい内容だったと思う。ただ、介護、医療は労働力の需要が高まっている職種であるとはいえ、ほかにも女性が活躍できる場所は保育士、幼稚園教諭、アパレルなどさまざまある。今回の内容は介護職だけを取り上げ、働く場所がなくなり、地方から流出してしまうことだけを印象づける設定があり、共感できない部分もあった。女性が地方から出ていく理由について多様な視点で深く掘り下げ、取材してほしい。地方において女性が求める職種と求人とのニーズが合致しない現状とか、女性が都市部にあこがれをもつとか、女性の働きやすい環境は大手企業のほうが充実しているという内容もあるかと思う。そういう問題まで掘り下げ、広く、なぜ地方から女性が流出しようとしているのかというところが伝わるとよいと思った。今回の場合は研究者を立て、その研究内容、研究成果を頼りにする番組づくりをしていたので、研究範囲にないような視点は取り上げられにくいのかと思った。しかしながら、今回のテーマは新たな気づきを与えるすばらしい内容であったことは間違いないと思う。

- 5月14日(水)のクローズアップ現代「追跡“出家詐欺”～狙われる宗教法人～」を見た。警察の犯罪情勢のデータだけでは見えてこない新しい犯罪手口を紹介していた。犯罪被害の防止に役立つよいテーマであったと評価したい。今後は家庭裁判所における安易な改名や、不活動宗教法人の解散についての法整備など、さまざまな対応策が急がれる。この番組がきっかけとなって社会が変わっていくのではないかと期待している。今後もこのような番組づくりをしてほしい。
- 5月1日(木)と8日(木)の超絶 凄(すご)ワザ!「最強の紙箱を目指せ」前編、後編を見た。段ボールメーカーと紙箱職人の対決で、上から強度を与える耐圧強度でも、落下させて中の玉やガラスが割れないようにする競い合いでも、両方で段ボールが勝ったが、私は紙箱職人の技術にとっても感心した。特に設計図面を書かず、直接紙に線を書き、フリーハンドで切り取る姿はすごいと言うほかなく、まさに“凄ワザ”だと思った。できあがった箱、緩衝材のフォームの美しさは段ボールではとうていかなわないと思った。どちらも設計の力がすばらしく、見ていて気持ちがよかった。前編で両者が競っているにもかかわらず、仲間意識のようなものが芽生え、握手をしている姿を見てすがすがしいと思った。今後両方の業界によるコラボレーションで世界

最強の紙箱が作れるかもしれないし、そういう可能性も感じさせる番組だった。競うことは単純な図式だが、考えてみれば常にものづくりのレベルアップを支えてきた根源だったとあらためて感じた。致し方ないことだが、紙箱職人は1人ですべて行っていたが、段ボール会社はグループで行っていたので、紙箱職人が気の毒な印象を受けた。番組を見ていて気になっているのが女性アナウンサーの服装だ。今回は1トンの重量をかけるとか、高い位置から落下させるということで機械も大がかりで危険な場所だったが、女性アナウンサーのスカートにハイヒールという格好が、現場に携わる人間から見ると違和感を覚える。出演者は作業服だし、そうした現場なのでせめてパンツにかかとの低いパンプス程度にしてもらいたいと思った。野球のグラウンドでインタビューをするときに女性アナウンサーは服装に気をつけ、スカートをはかないようにしている。そういうことと同じではないかと思う。そうすることで番組の雰囲気をもっと締まったものになるのではという気がした。今回の番組で、紙が持つ特性を多くの人に理解してもらえたと思う。これからもこの番組はいろいろな“凄ワザ”を競っていくことで、取り上げられた業界が技術力の向上につながり、若い人が番組を見てもものづくりに興味をもってくれればよいと思った。

- 5月3日(土)にアリスのおいしい革命「ひろがるアリスの思い」(総合 前 1:45～2:05)を見た。スローフードの母と言われているアリス・ウォータースさんの活動を紹介していた。アメリカのファーマーズマーケットに買い出しに行き、生産者とそこで情報交換、意見交換し、その日のメニューを考えており、料理人としても素晴らしいと思った。日本でも生産者と一緒に直売を行いたいのだが、衛生面の法規制があまりにも厳しく、難しい。肉は包装し、賞味期限を打たなければならない。チーズなどの発酵食品は発酵が止まるぐらいの密閉包装をしなければならず、アリスさんの考え方を日本に取り入れようと思ってイベントを行っているが、結局日本では同じことはできない。生産者の思いをファーマーズマーケットを通じ、いろいろなイベントで発信していこうという思いは素晴らしいが、日本では厚生労働省の定める衛生に関する法律があつてなかなかうまくいかない。番組は、生産者が手塩にかけてつくったよいものをファーマーズマーケットで売って、地域のコミュニケーションを図るというマルシェの様子と食育に触れていた。アリスさんの地元の中学校が荒れ果てて非行が絶えない中、どうにかして子どもたちと学校を本来の姿に戻せないだろうか考えた取り組みが食育だった。おいしいものとか、生産者の思いを伝えれば子どもたちは敏感に反応する。おいしいものを食べてもらえれば、それで食育はある程度よいという考え方をしており、そのような形で子どもたちに食育を取り入れていったらよいのかと思った。甘いもの、からいもの、しょっぱいものということではなく、食材ができる根本をみんなで考えることでその学校は非行から再生され、子どもたちが生き生きとみんなで活動を楽しむようになり、食育菜園の授業を楽しみに学校へ来るようになった。

たと聞いて、なるほどと思った。スローフードや、有機栽培ということばは日本でもよく聞く。日本でも少し前まで当たり前だったことが、今では生産現場を見る機会もなく、ウシやブタの肉もどのような過程を経て食肉になっているのかも知らない。そういうことを取り戻し、見るべきものは見て、感じるべきものは感じるような教育をしていく必要があると思った。アリスさんという世界的にも支持されている人のもとにはそういう活動があるのかと感心した。

- 5月12日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「まず動け、未来はその先にある 真鍋大度」を見た。今回はプログラマー、アーティストの真鍋大度さんが、最後の部分を生放送で見せるということはどうなるのかと思った。真鍋大度さんが新しい発想を作り出す取り組みの中で、仕事は頼まれたからするのではなく、自分がおもしろいと思うから行うという姿勢に興味を引かれた。最先端を作り出す流儀は「繰り返される失敗の先にこそ未来が眠っている」ということばに強く出ていたような感じがする。P e r f u m eの衣装に投影する演出は話題になったが、最先端技術の裏には努力があることもあらためて感じた。最後のスタジオでのライブはダンサーとラジコンヘリとのコラボレーションがすばらしかった。生放送ということもあり、時間の関係で最後は尻切れのような終わり方だった気もするが、努力はすばらしかったと思う。
- 「まちかど情報室」を毎回おもしろく見ている。5月16日(金)の朝5時台の「NHKニュース おはよう日本」では、用意されたV T Rが前日放送のものだったのか、鹿島綾乃アナウンサーが正しいV T Rに切り替えるまでの間をうまく繕っていた。鹿島アナウンサーの対応の早さにはさすがベテランアナウンサーだという気がした。その後に、その前に放送された大相撲とプロ野球の結果画面が前日のものではなく、前々日のものだったと訂正された。結果を放送するのに違ったものがそんなに簡単に放送されるものなのかと驚いた。
- 4月26日(土)のS W I T C Hインタビュー 達人達(たち)「石川さゆり×千住博 見えないものを描く語りきれないものを歌う」は、歌手の石川さゆりさんと日本画家の千住博さんは同じ年で、私とほぼ同じ世代ということもあり、興味深く見た。スペシャリスト同士がお互いの職場に訪ねていくが、前半は石川さゆりさんからのリクエストもあったようで、石川さゆりさんがインタビュアーとなって千住博さんの話を聞く形だった。芸術としての千住博さんのすばらしいものを見ることもできた。2人だけの会話の中で成立させる感じの作りになっており、1時間という番組でじっくりと見ることができた。2人の空気感もあるが、お互いの主張も、一緒にその場において聞いているような感じの作りになっており、心地よい番組だった。途中からインタ

ビューアーを交代して、千住博さんが石川さゆりさんのスタジオを訪れたが、プロのインタビューとは違った感性が出ていた。友達になった同士がそのまま本音で話しているような空気感もあり、おもしろい番組だった。

- 5月7日(水)にグレーテルのかまど「“端午の節句”のかしわ餅」を再放送で見た。好きな番組だが、かまどのことば遣いで「木の葉」を「きのは」、「手慣れた手つき」、「カシワの木が生息している」と言った部分があり、違うのではないかと思った。Eテレなので日本語の正しさについては確認をしたほうがよいと思う。せっかくのよい番組なので、細かいこともしっかりとした日本語で伝えてほしい。

(NHK側)

指摘された点は注意したい。

- 「植物男子ベランダー」をおもしろいと思って見ているのだが、どういう層をターゲットにしているのかがわからない。「趣味の園芸」を見ている人とはかなり違うのではないかと思う。5月7日(水)の「“フラワー・ラブ”の巻」では「愛しの草冠」のコーナーでラッキョウという漢字を出し、ラッキョウのたとえとしてプロレスラーの木戸修さんを出していた。植物に興味がある人と昔活躍したであろうプロレスラーがどう結びつくのかがわからなかった。渋い番組だと思う。登場人物の中に植物学者がいるが、仕事でつきあっている植物学者とほとんど同じで、特徴をよくとらえていると思う。かなりマニアックな番組で、この番組を思いついた人もすごいし、その企画を通したNHKも懐が深いと思う。ぜひ続けてほしい。
- 世界でいちばん星が美しいと言われているニュージーランドのテカポ村を取り上げた5月8日(木)の世界で一番美しい瞬間(とき)「星降る村“天の川”輝く瞬間 ニュージーランド・テカポ」を興味深く見た。旅人は中村慶子アナウンサーで、出しやばりすぎず、ほどよい感じでインタビューをしており、NHKアナウンサーの旅人はよいという印象をもった。単に美しい星空を見せるだけではなく、数組の人々を通して星空の魅力を紹介していた。その中で日本人の元パイロットの紹介があった。テカポは2年前に星空保護区の認定を受けたが、その認定に向けた取り組みの中心人物が日本人だった。きれいな湖、きれいな山並みがあるとリゾートホテルを建てようとか、湖にボートを浮かべるといことになるが、そういう観光開発にストップをかけたということだった。観光が悪いということではないが、開発にストップをかけ、町の明かりも家庭の明かりも外に漏れないようにするとか、街路灯も足元だけを照らすようにするなど、美しい星空をみんなで見よう、守ろうと取り組んでいた。世界中にすばらしい日本人はたくさんいるのだろうが、日本人の活動が世界でいちばん美しい

星空を見られるテカポ村に貢献していることにうれしくなり、星空も余計に美しく見えたように思う。星を撮っている知人に聞くと、このような取り組みは日本でもあるということで、岡山県井原市美星町が光害防止条例を施行し、美しい星が見られる条件を守っている。ニュージーランドの世界一の星空を映像で見たが、日本でも美しい星空が見られるところがあるのであれば、別の機会に紹介してほしい。星空そのものがすばらしく、美しいものは美しいと素直に共鳴できたすばらしい番組だった。あまり外国を舞台にした番組は見なかったが、折に触れ、「世界で一番美しい瞬間（とき）」を見たいと思う。

- NHKを見ていて気になるのが番組紹介をするPR番組だ。スポットなどPRが多すぎるとずっと思っていたが、これはよいと思ったものが1つある。NHKプレマップ「AEDの普及で突然死を防げ！」では、NHKがAED使用のプロジェクトを立ち上げたことが紹介されていた。仕事上、AED研修を必ず年に一度受けているが、使う日が来なければよいと心の中で思っている。AEDを使うのは勇気があることだと実感しているが、使えば命を救うことができるので、たくさんの人が使えるようになればいい。「ニュースウオッチ9」、「あさイチ」、「NHKニュース おはよう日本」などのほか、ラジオの「NHKジャーナル」でも放送していたようだが、あらゆる角度からAEDを使おうというキャンペーンが行われていることを「NHKプレマップ」で知った。一般の人がAEDを使用できるようになってから10年という区切りでニュースとして取り上げているのかぐらいに思っていたが、プロジェクトを立ち上げ、多角的にあらゆる側面からAED使用をうながすことはNHKでないとできないと思った。公共放送は、社会的な問題について、多くの人にその必要性をしっかりと届けることができるメディアだと思う。それを行っていることに公共放送としての意味を感じた。今回の「NHKプレマップ」は取り組みとして見えたということによってよかったと思う。

- 人口減少社会についての一連の番組が放送された。NHKの「DATAFILE. JPN」のホームページでは、社会の諸課題に対するかなり詳細なデータが出ており、今後も期待している。4月6日（日）には「女性が消える社会」がアップされた。5月8日（木）に日本創成会議が2040年に20～30代の女性人口が半数以下に減ると推計される自治体を発表し、新聞などでも大きく取り上げられたが、それに先んじ、人口減少に関するいろいろな情報をNHKが出したことは評価できると思う。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成26年4月NHK関東甲信越地方放送番組審議会（議事概要）

4月のNHK関東甲信越地方放送番組審議会は、18日(金)、NHK放送センターにおいて、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、金曜e y e「わがまちの大逆転」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	敦井 一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
委員	新井 幸人（写真家）
	伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
	国崎 信江（（株）危機管理教育研究所代表）
	国府田厚志（いちご農家・JAはが野代表理事専務）
	坂本 敬子（（株）月の井酒造店代表取締役社長）
	内藤 久夫（（株）内藤代表取締役社長）
	藤木 徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
	古澤 宏司（（有）古沢園代表取締役）

（主な発言）

<金曜e y e「わがまちの大逆転」（総合 4月4日(金)放送）について>

- 全体的に楽しい感じで、さまざまな発想による地域おこしの取り組みがあり、ヒントに満ちている内容だった。最初に出てきた茨城県小美玉市の事例で、「ホールは見るものでなく、自分たちで使っていくものだ」というコメントが、ホールの館長を務めているわたしの心に響いた。番組を視聴していて75分は結構長く感じ、番組の途中で視聴をやめてしまうこともあるかと思った。そう考えると、にぎやかで散漫な感じをプラス面もマイナス面も含めて持った。投票で数字が上がっていくと勢いづくというよさはあると思うが、ゲストコメンテーターが大逆転と判定することは必要な

かったのではないかと感じた。コメンテーターは的確なコメントをすればよく、散漫な感じをまとめてくれると見ている側も腑（ふ）に落ちる。地域でさまざまに起きていることをまとめる視点があると散漫な感じもしなかったのではないかと思った。神奈川県の話題に関しては、NHKの県域のテレビ放送がないからか、取り上げ方が少なかった。地域によって差をつけず、いろいろな地域の取り組みを見たいと思った。

○ わたしも75分を長いと感じた。茨城県小美玉市のプロジェクトにかかわっている知人がいるが、企画の最初のころは変わり者といったような扱いがある中で、ごく少ない人数からみんなで輪を広げていった。NHKが取り上げてくれたことは当事者たちにとっては感無量だったのではないかと思う。「大逆転」というタイトルを見てうれしく感じた。東日本大震災からの復興についても、うまくいかないこと、悲しいことがクローズアップされることが多い中で、成功したという話題は見えていて気持ちがいい。こうした番組を増やしてほしいと思う。この番組をきっかけに茨城県の各市町村でこうした取り組みが広がり、最後は茨城県大会というところまで盛り上がればおもしろいと期待している。山梨県のSNSを活用して観光客を誘致するという話題があった。私たちの町でも、ターゲットを絞っていかにお客さんを取り込むかという似たような取り組みがある。あるアニメの舞台になっている茨城県東茨城郡大洗町にはたくさんの人が訪れており、商工会の青年部の人たちが一生懸命にいろいろな情報を発信し、訪れる人たちが喜ぶようなイベントを企画している。こんなに狭いコミュニティをターゲットにされていてこれでよいのかと初めは思ったが、次第に客層は広がり、最近では台湾など、海外からも訪れる人もいる。町もいろいろな意味で視野が広がり、直接関係のない店でもアニメのシールを張るなどいろいろな発想をし、工夫をするようになった。ピンポイントで情報を投げかけることは悪いことでは決してないと体感している。

○ 関東エリアでも県域放送が充実してきたので、各県の地域おこしの話題を集めた番組にしようという意図を感じた。最初の茨城県小美玉市の話題はよく取材もされており、内容も感動的なものだった。特に最後の部分で高校生が森山直太郎さんの「さくら」を歌ったのを聴いて、心に響いてくるものがあつた。山梨県でのインドネシアにターゲットを絞ったSNS作戦は今どきの取り組みで、ブログなどの口コミに頼る宣伝方法は今では避けて通れない手法だという感じがした。長野県の松本山雅フットボールクラブの話があつたが、栃木県でもサッカーチームはあり、県民が歌を歌いながら応援するスタイルが定着している。野球では宮城県の東北楽天ゴールデンイーグルス、北海道の北海道日本ハムファイターズのように、地域を盛り上げるにはスポーツを通じてというのが王道という感じがする。地域おこしの1つの材料としてよいものを取り上げていたと思う。新潟県からは間伐材で作った木質ペレットのために、スト

一歩まで作ってしまった古川正司さんの取り組みを紹介していたが、個人の大逆転という感じがした。地域の町おこしを地域の力で行っている話題を紹介する番組と思って見ていたのだが、茨城県小美玉市のような地域の力もあれば、山梨県の話は行政の部分がかなり濃い感じがし、新潟県の話は個人の力の話だと思った。大逆転とひとくくりにするには若干統一感がない感じがした。また、伝え方についても、VTRを使ったものと、パネルを使って紹介するものがあり、あえてそういう形を取ったのかも知れないが、地域によって扱い方に差があると感じた。もっとさまざまに取材をし、ある程度バランスをとってほしいと思う。群馬県のウェブ漫画は活動休止中の話で、あえて取り上げる話なのかと思った。手探り状態だとは思いますが、材料をしっかりと集め、地域おこし、地域の特色を伝えてもらえればと思う。

- 75分は長いという印象をもったが、今後もこの番組は75分で放送するのか。

(NHK側)

「金曜eye」は75分の放送時間で1年間に8本放送する予定だ。

- 行政もわが町の1つになると思うが、茨城県の地域、山梨県の行政、新潟県の個人の取り組みの紹介で、そのあたりはまちまちだったという印象がある。“わが町の”ということであれば、できるだけ地域の力を合わせたもので統一したほうがよかった。新潟県の古川さんは間伐材で木質のペレットを作ったが売れず、火災にも遭った。その中で専用ストーブを作るというのはすごいことだと思う。新潟から日本海沿いに北上すると、間伐材だけでなく、マツクイムシの被害に遭った松林を伐採したものが野積みになっている。そういうものが新しい形で燃料として再利用されることになると、林業関係も含めよい形が生まれると思う。地域が何かを使って町おこしをしようとする、単発的なお祭りのようなことはできるかもしれないが、継続していかないと元の静かな町に戻ってしまう。このような点をどう考えていけばよいのかなど、いろいろな思いで番組を見た。

- タイトルが「わがまちの大逆転」ということで、私自身、地域おこし、町づくり、地域のイベントなどに長く取り組んできたので興味をもって番組を見た。取り上げられた事例の中で、特に茨城県と山梨県の事例は、番組のテーマに則したよい内容だったと思う。ヒントにさせてもらった。地方ではいろいろなホールがあるが、思うように活用されず、その運営に悩んでいるところも多い。茨城県の事例は地域住民に自ら運営、企画も行わせ、予算もある程度任せる形で行っており、興味深かった。オーディションをしっかりと行い舞台に立つということで、専門家に指導を受けることも義

務づけている。それぞれ30人以上応援団を集めることなど発想が柔軟で、地域のイベントに関わってきた人間としてもこれならばうまくいくと感じた。地方で何かしようとする、いろいろな意味で腰砕けになることがある。多くの人が日本中のあちこちで一流のもの、よいものに触れていて、それを地方で行おうとするとどうしても落差が出てしまう。地方らしさが出ればよいのだが、つたないケースになることがよくあり、それが最終的に中途半端に感じられ、お客様から拍手をもうひとつもらえないという事が多い。茨城県の事例はそこを超える手法を使っている。出てくる人たちのモチベーションも上がるわけで、そのあたりがすばらしかった。山梨県の話は以前から知っていたが、地域おこしには話題性がとても大事で、マスコミに取り上げてもらうことも大事だ。話題性をリードするには著名人が動いてくれると話が早い、地方はどこも探っているのだがなかなか見つけられないでいる。観光業でインドネシアにターゲットを絞り、現地の有名スポーツ選手や歌手などに体験してもらい、それをSNSにアップしてもらったり、県の職員にインドネシア人を雇用することでその紹介もし、受け入れる旅館もインドネシア語でおもてなしをするというのは完ぺきに近い取り組みだと思う。絞り込んだ手法だが、ここまで思い切った事例はそんなにたくさんはなく、そういう意味でもすばらしい。この2つの事例は、同様の事業にかかわっている人間にはヒントになったのではないかなと思う。大逆転の卵のコーナーがあったが、小さいサイズで話題をあまねく広く伝えるということだったと思う。千葉県の水を散布して育てるネギ、埼玉県の水田を活用して小松菜の大きな耕作地を作った事例も、それぞれに企画から実際の形にしていく間にいろいろな試行錯誤があったのだと思う。そのあたりも別の機会でよいので知りたいと思った。新しい試みとしてテレビのリモコンを使った投票があったが、登場する順番によって番組の最後までリモコンを押し続けられればカウントされるということだったので、公平性がどうかと感じた。最後に70何万というトータル数字でまとめられていたので、生放送で機敏な対応をし、公平性に関してもあまり疑問を持たれないようにしていたのはよかった。これだけたくさんの人が反応してくれたということを見るのもよかったと思う。地方局のアナウンサーがプレゼンテーションし、それぞれが掛け合いをするところがあったが、個性はあるがそれぞれ同じようなやりとりをしていた。ゲストの振分親方のコメントは、的を射ているかは別として、視聴者としてはわかりやすかったので、それをまとめる形のほうがよかったのではないかなという気がした。地域がいろいろなことで悩んでいるときにきっかけを与えてくれるという意味で興味深く見ることができる内容だった。これからはテーマをうまく選び、放送局ごとのバランスを考慮するとともに、テーマの定義があまりぶれないようにしてほしい。地域によって内容や伝え方に濃淡が感じられたため、そのあたりをうまくまとめるとさらに見やすく、よい感じの番組に成長できると思う。今後に期待したい。

○ 住民が主役になって成功させる地域のがんばりを見て、全体的に素直に感動した。アナウンサーの人たちもさわやかで、元気があり、ほかのアナウンサーが話をしているときも後ろから支え、応援している雰囲気があった。スタジオの雰囲気がよく、盛り上がっていてよいと思った。茨城県、山梨県、長野県では町を挙げての取り組みで、同じような課題をもつほかの地域でもよいヒントになったのではないと思う。一方、栃木県宇都宮市の事例はどこに大逆転の要素があるのかと思った。たとえば紅茶の購入量が41位だったことが町にどれほどのダメージがあるのか。単なる宇都宮市でのやりなのに、大逆転と無理やり取り上げていたように感じた。神奈川県の実例は補聴器の新商品の紹介に思え、群馬県も、埼玉県も一農業従事者の取り組みの紹介だったように思えた。こういう取り組みであればわざわざ大逆転と言わなくても、ほかでも行っているところは多いという思いもあり、そこは厳しめに見た。全体を通してそれぞれの内容のスケールの差がとても気になった。ドラマ仕立てでVTRまで作って紹介した新潟県に比べて、神奈川県のように野菜を前に出してフリップのみで取り上げるという違いがあった。視聴者から見ると取り上げ方に不公平さを感じるのではないと思った。投票も1人何回でも可能で、1人1回であれば実際に期待以上の反響だったと言えるのかもしれないが、1人が何度も投票したものを「盛り上がった」と言ってよいのかどうかも気になった。女性の視点に立つと、スタジオのいすの高さも気になった。男性はよいのだが、女性3人は座りにくそうにしていた。特に2人はスカートで、脚の置き方がだらしく見えた。女性の視点から脚に関心をもってしまったが、座りたくてああいう姿勢をしていたのではなかったと思うので、スタジオの設定のときに出演者が美しく、上品に座れるような配慮があればよかったのではないと思う。野菜を前にプレゼンテーションをしていたコーナーで、フリップの見せ方に違和感を覚えた。視聴者に見せる正面の位置にフリップをもってこない、斜めになったフリップの見せ方は今までにない不自然さを感じて気になった。最初からリハーサルで打ち合わせをしていたと思うが、タイミングがずれていて、見せるタイミングとカメラワークが合っていなかったのか、フリップを正面から見たいという欲求が満たされなかったのは残念だ。番組のメッセージとしてはあきらめない、挑戦するということは十分に伝わるよい構成になっていたと思う。

○ 私自身地方に住み、地域おこしにも関わっている。元気のない地方が多い中、活躍している町おこしの例をたくさん紹介してもらい、同様の取り組みを行っている人にとってよい番組だったと思う。それぞれがいろいろな工夫、苦労を重ね、成功へ進んだということだと思う。ところどころヒントになるものがあった。対象が個人、地域住民、行政など、確かにいろいろあり、その統一性の問題もあるが、地域おこしはだれが主役になろうと最初にだれかが動かないと進まないと感じている。いろいろな例があるのを見て、それはそれでよいのではないと思った。感心したのは最初に出

てきた茨城県小美玉市の「なりきり歌謡ショー」だ。あれだけ市民が熱くなって参加できるのはすごいと思った。いろいろな手法がかいま見えたが、多くの人に参加してもらい、さらにレベルを上げていく工夫がされていた。また、山梨県でSNS活用の事例も目新しかった。インドネシアとの交流にとっても力を入れていることはかなりの人が知っているが、逆に教わった感じがする。3人のコメンテーターはよいコメントをしていたと思う。感心したのは振分親方のコメントで、好感をもって聞いた。いくつもの例を時間内にたくさん盛り込んでいたので終わってみると強烈に印象に残ることは割と少なかった。例の中には苦労や失敗もたくさんあっただろうし、そこまでたどり着くためのいろいろな問題や、今も問題を抱えている点があると思う。対象を絞り込んで深く掘り下げた番組にすると、よりインパクトの強い番組になるのではないかと思った。

- 東京から長野に移り、長野の観光や地域食材の掘り起こしなどに、地域の農家やJAと一緒に取り組んでいる。そういう立場からすると、いろいろな地域の取り組みが見られてためになった。長野県のサッカーチームを2つ取り上げていたが、長野県のサッカーチームのサポーターは熱く、ここまで盛り上がるまでの過程を見ることができて興味深かった。地域おこしにまったく興味がない人は途中でチャンネルを替えるのではないかと思ったが、個人的には興味があり、いろいろな地域の例が紹介されていて、なるほどというところがたくさんあった。山梨県と同じように長野県も観光客を増やそうとしている中で、台湾から観光客を引き込もうと取り組んでいるがなかなかうまくいっていない。隣の山梨県はインドネシアからの観光客があれだけ来ていて、観光地にお金が落ちているとわかった。「お宝は足元にあることを忘れてはいけない」というコメントがあった。外からの目線で見るとそれが宝に見えるものはたくさんあるが、地元の人にはそれに気づいていないのかもしれない。観光や地域おこしでは、自分の地域にないものをほかから無理やり取り入れてお客さんを呼ぼうとか、新しいものを建てようということがある。ないものねだりをしないで、あるものをどう生かしていくかという目線が今回の番組ですごく感じられた。地域の情報を取材し、番組として伝えていくことで、いろいろな人たちが地域に興味をもつきっかけにもなると思う。地域に行かないとわからない情報であり、こういう番組は民放では作れない。今後もこういう番組づくりに期待する。

- 内容を盛り込みすぎで、玉石混交という印象があった。初回ということであえてにぎやかな雰囲気を出したのであればしかたないかとも思う。中にはよい話題もたくさんあったので、改めて別の形で取り上げるような取り組みもしてもらいたい。今回の番組は生放送ということで、しっかりと時間内によくまとめた后感心した。ゲストの野田稔明治大学大学院教授のコメントは的確なものが多く、そのため番組がしっかり

と締まっていたと思う。視聴者の反応は番組制作の現場からするとたいへんやりがいのある数字となったと思う。この数字で視聴者の反応をはかるという意義はわかるが、一方で視聴率という数字もあるわけで、投票のボタンを押すことによって視聴者がどれだけ参加意識を得られたかといった部分も分析する必要があると思う。安易にこういう方法を使っても、視聴者がおもしろ半分にボタンを押しているとする、せっかくのデータ放送がもったいないと感じた。また、今回は首都圏ということで取り上げていたのだが、東京からの報告がなかった。東京は23区の中に下町があり、山の手があり、いろいろな取り組みを地域で行っている。さらに23区の外に出るといろいろな町での取り組みがあると思う。東京を取り上げなかった理由はあるのか。

(NHK側)

東京に関しても取材を行い、伝える情報はあったが、東京を入れると時間の関係で各県の情報が入りきらなくなるため、今回は取り上げていない。次回以降に扱いたいと思う。

75分が長いというご指摘をもらった。一方で75分あるからできることもある。今回、75分を楽しく見せるため、ある種バリエーションを持たせた部分がある。県域放送で扱った話題をさらに取材したものも結構ある。紅茶の話題については、シャッター商店街の復活に紅茶が起爆剤になったという背景があるのだが、今回は時間との兼ね合いでそこまで伝えられず、そうとう切り刻んで整理している。ご指摘の通りで、もっと深めればもっとおもしろい番組になると感じている。今後も75分の枠をさらに生かし、第2弾、第3弾ができればと思っている。今回4県を手厚く扱ったが特別な意図はなく、ほかの県も次回はVTRで紹介する形にしたいと思う。アナウンサーが全員出たほうがよいのかどうかも含め検討し、よりよい番組にしていきたいと思う。

夕方6時台の各局のメインのニュースを担当しているアナウンサー・キャスターたちが、地元PRに力を入れて番組に出演していた。コンセプトは地元への愛で、各局のアナウンサーは意気込んでいた。お互いへの応援などスタジオの雰囲気よかったとの意見をもらったが、それぞれの地域の話が出た後に、言っぱなしや聞きっぱなしで終わるのではなく、その話を自分の地域に照らし合わせたらどうなるかという視点で事前に取材をしており、その結果だと思っている。アナウンサーの

個性が出ていないという意見もあったが、スタジオでトークを行うことはアナウンサーとして必要になってくるものであり、いろいろな場を経験することで、習熟していきたいと考えている。

<放送番組一般について>

○ NHKスペシャル「人体 ミクロの大冒険」を3月30日(日)の第1回「あなたを創る！細胞のスーパーパワー」と4月6日(日)の第3回「あなたを守る！細胞が老いと戦う」を見た。プロローグから4本の放送があったと思うが、残念ながら全部を見ることはできなかったがとても勉強になった。人体のミクロの細胞の働きについてCGで紹介しており、山中伸弥京都大学教授の解説もわかりやすく、興味深く見ることができた。子どもの太りやすさについても、母親が炭水化物をどのように摂取したかによって、生まれてくる子どもの肥満のリスクが分かれることをわかりやすく解説していたし、極端なダイエットをすることにより細胞が飢餓を感じてしまうことの恐ろしさもわかった。神経細胞同士の結びつきの強さと伝達の早さが学びとなり、それが人の記憶になるということなど、CG画像を見ながらなのでわかりやすかった。細胞の活性化が子ども時代にどんなことをしたかで決まってしまうこともあらためてわかった。私も新たに学ぼうと一生懸命に取り組んでいるが、細胞としては今からでは遅いと知らされ、残念に思ったが、山中教授は「細胞は裏切らない」と言っていたので、やはりそうなのかとも思った。免疫細胞の働きについてもかなり詳しい解説があった。適度な運動をすることで免疫細胞が活性化することもあるとのことなので、しっかりと運動を続け老化しないように細胞を活性化させたいと思う。細胞生物学の分野は世界の注目が集まっている時期でもあり、よいタイミングで細胞のことをわかりやすく説明してくれた番組だったと思う。MCの野田秀樹さんと解説の山中教授がまったくの素人にもわかりやすいように話をしてくれたのがとてもよく、このような作りはこれからも続けてほしいと強く思った。

○ 3月25日(火)から27日(木)の人形劇、「シャーロックホームズ」(総合 後7:30～7:52.30、後7:30～7:52.30、後7:34～7:57)を楽しく見た。久々の人形劇だったが、人形を見ると温かみを感じ、アニメ、CGにはない臨場感、親近感も湧いた。画面と距離感があまり感じられない印象を受け、あらためて人形劇はよいと思った。人形劇は誇張したような造形をしていても、人形の顔かたちがあまり違和感なくとらえられる。動きについても走るとき、驚くときに手足を大きく上げるとか、跳ね上げるというのも人形ならではの大きな動きで、味があってよいと思う。オープニングに

はプロジェクションマッピングを使い、推理シーンでは映像の処理を入れるなど、新しい技術を取り入れていた。途中で出てくるワトソンメモのコーナーがあるが、子どもや原作を知らない人にもおさらいの機会にもなっているし、うまく工夫されていると思った。10月から本放送があるので楽しみにしている。原作は殺人事件が多いが、今回は学園ものなので殺人事件はないようだ。先般の放送では「ボヘミアの醜聞」の不倫ものが取り上げられていたが、脚本の三谷幸喜さんがどう料理するのか、その手腕に期待している。ゲストの声優については、聞いていても印象深く感じなかったので、必要なのかと気になった。ゲスト声優に予算をかけるのはいかなものかという印象をもった。

- 3月30日(日)の小さな旅「春が染めゆく山麓～群馬県榛名山～」を見た。榛名山の山麓ということで梅林、梅を栽培している農家や脱サラをした若い夫婦などが取り上げられていた。梅農家はどうしても中国産の梅に押されて、生の梅を出荷したのでは採算ベースにならない、加工品を作らないと駄目だということを聞いていたので、梅干しを作るとか、梅のエキスを出すなどしてがんばっているという姿はうまく伝わっていたと思う。榛名湖畔で旅館を営む傍ら榛名山を描き続けている人が出ていたが、描いた絵を何枚か見るとすばらしいという印象をもった。しかし、タイトルが山麓だったので、今回は榛名山麓に絞って取り上げたほうが「春が染めゆく山麓」がもっと出たと思う。別の機会、別の形で榛名湖畔で絵を描き続けている番組として分けて作ったほうがよかったという印象をもった。
- 4月3日(木)、4月10日(木)の超絶 凄(すご)ワザ!「前人未踏の“切れ味”を目指せ」前編と後編を見た。包丁職人と工業用刃物でどちらが厚さが1.2mm、直径2.2cmの円筒の鉄パイプを丸い形を残したままきれいに切れるかという番組だった。同じ刃物に携わる職人が、総出で鉄パイプを切ることにも挑み、職人のワザがところどころで見えた。今回のテーマであるパイプを切るというのはだれが考えたのかと思った。本当に切れるか切れないかによって番組のつくりも変わってくると思うので、本当の限界でやっと切れるという設定をしたことはすごいと思う。ほかの凄(すご)ワザのテーマについても見てみたいと思う番組だった。
- 「超絶 凄(すご)ワザ!」のパイロット版として、昨年10月14日(月)に「激突 神ワザ!～究極の“真球”を目指せ～」(総合 後5:30～5:55)が放送された。そのときは完ぺきな球体を作るというものだったが、たいへん興味深い番組だと思った。今回レギュラー化され、うれしく思っている。ネジ、刃物など、身の回りにあるモノについて、気がつかないところに職人技が生きていることを気づかされると同時に、物理の勉強もできる。エンターテインメントとして工場のセットが大掛かりにで

きていて、語りもすごく大げさだ。番組に出ている人は普通の職人なのだが、その人のすごさをおもしろおかしく伝えていて、品がなくなるぎりぎりの線で踏みとどまる感じになっている。千原ジュニアさんが騒ぎすぎず、視聴者の代表として現場で心から感動し驚がくしている様に好感をもった。NHKは昔からロボコンを行っている。高等専門学校生と大学生がロボットのゲームに勝つためにさまざまな工夫をするわけだが、「超絶 凄（すご）ワザ！」はそのずっと先のプロフェッショナルになったときに、鉄が切れたから何なのかというより、職人の性（さが）としてこれをきれいに切ってみせるという執念みたいなことが出てきてとてもおもしろいと思う。おもしろいテーマを続けていくことはかなりたいへんなことだと思うが、その期待を裏切らず、次々と楽しいテーマで、すごいという爽快な気分させる、そういう番組として制作してもらいたい。

- 最近家族で話題になっているのは「L I F E！～人生に捧げるコント～」だ。バラエティー番組が好みではなく、特にコント番組などを見ることは時間の無駄という感覚をもつほど毛嫌いしていたが、家族に勧められてこの番組を見た。ばかばかしいというこれまでのコントのイメージを一掃するおもしろさがあり、家族でただ笑い合うという楽しい時間を共有できた。放送がとても待ち遠しくなった。4月からはレギュラー放送になったが、笑いが人を元気にし、心を豊かにすることもあると感じた番組だ。家族で楽しめる良質な笑いの番組があることは間違いないと思う。単に乗りで笑いをもっていこうとする低レベルのコントではなく、NHKらしい良質なエンターテインメントで、本当に笑いはいいと思える番組だ。これからも期待している。
- 連続テレビ小説「ごちそうさん」と「花子とアン」は毎回欠かさず、楽しく見ている。このために朝は起きているというぐらい楽しみにしている。この両ドラマを見て気になったことは、出演者の演技で、泣く場面に鼻水を出している場面があった。感情移入して、迫真の演技という評価もできるが、他人の鼻水を見て不快な思いを感じる人もいると思う。放送時間は朝食、昼食の時間帯ということを考えると視聴者への配慮のほうが必要ではないかと感じた。
- 連続テレビ小説「花子とアン」のタイトルバックは、「赤毛のアン」の舞台のプリンス・エドワード島や花子の故郷である山梨県のブドウ畑、富士山がとても美しく映されていて、絢香さんの主題歌と自然に調和してさわやかな印象を受ける。本編でも山梨県のさまざまな風景が美しく紹介されていて、地元の人間としてたいへんうれしい。特に花子の実家のオープンセットと周辺の景色は山梨県のよさを十二分に引き出している。白鳥が川から飛び立つシーンがあったが、白鳥は山中湖にはいるが、山梨県の川にはいないのではないかと思う。第1週、第2週に出てくる花子の幼少期役の

山田望叶さんの演技にたいへん感心した。甲府放送局でトークショーがあり本人の話も聞いたが、教会から逃げ出し、川に落ちるシーンは厳しい寒さの中で撮影したそう
だ。小さいながらも役者魂を感じる演技だったと思う。吉高由里子さんに引き継が
れ、今日に至るが、全体のテンポもよく、自然と次回が楽しみになる工夫が施されて
いると思う。甲州弁は地元の人が聞いてもあまり違和感がなく、甲州弁指導もそうと
うしっかり行ったのだろうと思い、安心した。

- 70歳代の叔母がおり、NHKの番組について意見を言っていたので伝えたい。ド
ラマ、特に「連続テレビ小説」のナレーションが聞き取りにくく、現在の「花子とアン」
ナレーションも、高齢のせいかもしれないがあまりにも聞き取りづらいということだ。
またスポーツ番組についても、BS1で日本人大リーガーの活躍を大々的に放送して
いるが、日米の時間差から放送を見る人はごく一部の人々に限られると思うので、経
費もかかるので生放送は縮小すべきだと言っている。高齢化社会の今日、ますますシ
ニア世代が増え、外出できない高齢者にとってはテレビが生きがいだ。若手お笑い芸
人の食べ歩き、温泉旅行と大騒ぎばかりしている番組が多いが、昭和を生きてきた人
たちは戦後を懐かしみ、静かに当時を思い出したいと思っている。戦後、生きる希望
と勇気を与えてくれたのがテレビ番組だった。時代が違うと言ってしまうとそれまで
だが、せめてNHKの1つのチャンネルだけでもシニア専門チャンネルにしてもらえ
ればという意見だ。NHKは民放の真似はしなくていいので、まったく違う角度で放
送してほしいとのことだ。

(NHK側)

高齢の方だと高い音域の部分が聞き取りにくく、音楽とかぶ
ってしまうとナレーションが聞きにくいという指摘は受けてい
る。

ナレーションについては慣れもあると思う。かつて「連続テ
レビ小説」の制作を担当したことがある。「語り」について、始
まってから2週間ぐらいは、方言だったこともあり、聞き取り
にくいとの意見が多く寄せられたが、途中からナレーションが
すごくよいと言われるようになった。「花子とアン」についても、
最初のうちは慣れていないので聞き取りにくいと思われる人が
いるかと思うが、慣れてくればよいと感じてもらえると思う。

シニアチャンネルの要望があったが、意図しているわけでは
ないが、現在の総合テレビの見られ方を分析すると事実上はシ

ニアチャンネルになっている。しかし、そこを目的にしているわけではない。60代、団塊の世代の視聴率は減ってきており、今は70代以上の方に圧倒的に見られている状態だ。シニアの人の希望、生きがいになる番組も続けていくが、これからシニア層になる40代、50代にもNHKをできるだけ見ていただきたいと考えている。それが将来的に老後の楽しみ、希望にもつながるのでないかと思う。見てもらえる年齢層をできるだけ広げたいということだ。視聴率もさることながら、われわれはそこをいちばん気にして編成している。たとえば「超絶 凄（すご）ワザ！」は新しい番組だが、できるだけ幅広い層に見てもらいたいということで取り組んでいる。

○ 連続テレビ小説「花子とアン」が始まった。ドラマ10「はつ恋」で脚本を担当した中園ミホさんが、「花子とアン」の脚本だったので、中高年の視聴者が増えるのかとも思ったがそうでもなく、「赤毛のアン」のエピソードをいろいろ絡めているという印象だ。タイトルバックももちろんだが、全体的に映像がとてもきれいだ。ロケが多いからなのかもしれないが、大河ドラマ「龍馬伝」の映像のような気がした。展開が速いので間延びせず、テンポ良くこのまま進むととても見やすいと思う。主人公の安東はな役は幼少期も、大人になってからも非常によい。ナレーションの美輪明宏さんについてもよいと思う。最後に「ごきげんよう、さようなら」という美輪さん独特の言い方が、毎回声のトーンや表現が違い、その一言を聞くとそのときの状況がすべて表されているような気がする。今後とても楽しみにしている。

○ 「チョイス@病気になったとき」をときどき見ている。3月22日(土)の「運動不足を解消」を見たが、いつもテーマが身近でわかりやすい。1日1万歩とよく言うが、10分歩くと1,000歩相当になるということがとてもわかりやすかった。同じ運動不足でも年齢に応じ変えなければならず、40代と70代以上では違うとも言っていた。高齢化社会はもう来ている。認知症で徘徊し行方不明になる人が約1万人いることがニュースでも報道されているが、そういう暗い報道が多く、高齢化社会に移行することに対しての不安ばかりがあおられる。1人暮らしで高齢になったらどうしようか、認知症になったらどうしようかと不安ばかりが募るが、そういうことに対し、明るく、それを乗り切るためにはこういうことをするとよいと温かく伝えているような気がした。出演者のほっしゃん。さんも温かいコメントをしており、いつも好感をもって見ている。

○ 「テクネ 映像の教室」の第2シーズン、3月22日(土)の「ワイプ」(2)(Eテ

レ 前1:45~2:00)、23日(日)の「タイポグラフィ」(2)(Eテレ 前1:25~1:40)、24日(月)の「ロトスコープ」(2)(Eテレ 前1:35~1:50)を第1シーズンと同様楽しく見た。テーマについては第1シーズンで映像技法は網羅されたようで、今回はテーマに(2)と付くものがほとんどだった。どんな内容なのかと期待して見たが、今回もおもしろかった。今回は前回になかった取り組みで「テクネ・スタジオ」というクリエイターではない人に映像を作ってもらうコーナーがあった。前回もあった「テクネ・ID」は視聴者から集めた短い映像を使っていた。「映像の教室」と副題が付いているように第1シーズンはお手本と実演を見せ、第2シーズンは実習に入っただかという印象を受けた。こういう形で多くの若いクリエイターに参加してもらう場を作ることはよいことだと思う。ホームページを見たが、投稿作品が一部掲載されているようだ。こういう取り組みをうまく活用してもらいたい。NHKという枠があり、番組という枠もあるので、自由に投稿できるようにするのはなかなか難しいかもしれないが、若いクリエイターが活躍する、1つの交流する場としてもっと活用ができればよいのではないかという印象をもった。

○ 4月16日(水)の感涙!よみがえりマイスター「亡き夫が愛したオートバイ」は、亡き夫が愛した50年前のオートバイをよみがえらせるという内容だった。単にオートバイを修理し、動くようにしたということではなく、故人が成し遂げようとしていた夢をマイスターと息子が力を合わせて復活させたことで、家族の結びつきの強さ、マイスターのやさしさがにじみ出たよい番組だった。修理する箇所の説明や、実物、模型を使っただの説明は、素人にもわかりやすくなっていた。オートバイの修理というとな何の変哲もないことだが、依頼人、マイスターの作業に思いが込められていて、それがよく表されていた。この番組がなければ家族3人の思いが叶うことはなかったと思う。

○ 車を運転することが多いのでNHKラジオをよく聴く。「ここはふるさと旅するラジオ」の80ちゃん号が全国各地を回り、地域のやる気、元気を応援しようという趣旨で地域的话题を伝えている。いつも聴いているが、1年でほぼ全国を1周しており、今度は10周目ということだ。4月8日(火)の「島根県西ノ島町」は隠岐諸島からの放送だった。いつもはBGMのような感じで聴いているのだが、今回の放送には刺激を受けた。ニュージーランドから来て隠岐の魅力に引かれ、そのまま定住して観光関係の仕事をしている女性や、横浜から来て隠岐が気に入って定住し地元で仕事をしている人が出演しており、とにかく隠岐は素晴らしいという話をしていて、素晴らしいという話はどこでもよく出るのだが、人生や自分の生活を変えてまで行動するというのは、ラジオといえども迫力があつた。ニュージーランドも自然がとても美しいところだが、その国の人が隠岐の自然がよいと言っているのを聞いて、一度も行ったこと

がないのでいつか行かねばならないという気になった。地域をくまなく回って、地域のいろいろな活動や一生懸命に取り組んでいる人がいることを、ラジオの場合は特にきめ細かく取り上げることができる。学生サークルや女性の小さな集まりも取り上げており、取り上げられた人のやる気も上がり、NHKにも好感をもつ。このような役割をこの番組は果たしていると前から思っていた。今回は島からということではなかなか車を運べないので、シーズンの変わり目、時間に少し余裕のあるときに隠岐に渡り、4日間の放送だったがとてもすばらしかった。

わたしはこの番組の放送に立ち合ったことがあるが、放送の冒頭でアナウンサーが「今日は50人以上のお客さんです」とか「今日は100人以上です」と言うのだが、実数とかなり違うことがあったと思えたことがあった。あえて数字を言わなくてもいいのではと思った。

- 3月25日(火)と27日(木)、28日(金)の深夜にNHKの予算審議が放送されていた。昨年も話をしたが、衆議院・参議院の予算委員会などはテレビ、ラジオで生中継するので、NHKの予算審議も生中継したほうがよいのではないかという感じを受けた。
- 南米チリ沖巨大地震による津波注意報の報道については、報道が少し足りなかったのではと思った。4月2日(水)の夕方に仕事先から「津波は大丈夫か」と聞かれ、知らなかったのが驚いた。テレビをつけてもNHKでも民放でも伝えていなかった。次のニュースの時間を待たないとその報道がされていなかった。ニュース時間以外でも津波警報や津波注意報に関する情報は、逆L字スーパー等でもっと早い時間からずっと流してくれたらよいと思った。個人がこれから数時間のうちに予測されることを情報として得るきっかけとして、NHKに常に早めに情報を伝えてもらいたい。災害に関することは何でも取り越し苦労ですんだほうがよいと思うので、ニュースの時間以外でも早めに報道をお願いしたい。

(NHK側)

4月3日(木)の午前3時に津波注意報が発表され、常時地図スーパーを出していた。

- 4月2日(水)にチリ沖で地震が起き、津波が日本まで来ることが情報として出た時点から、テレビでもっと取り上げられるとよかったということだ。ニュースの一部では報道していたが、正式な注意報として津波の到達予測が出るもっと前から、テレビをつけておくと常に見られるようになっていたほうがよかったのではないと思う。

(NHK側)

津波注意報が何時ごろに出そうだということは、4月2日のニュースで報道した。実際に津波注意報が出た後から常時スーパーを出して伝えているが、気象庁が発表しないうちは、NHKとしても伝えることができない。

- 津波の恐れがあるという形でできないだろうか。夜中にスーパーを出されても寝ているとどうにもならない。

(NHK側)

夕方のニュースでは夜に津波があるかないかについて深夜ぐらいに判明するという情報を伝えている。来るとすれば何時ごろになるという情報もかなり早い段階から報道しており、気象庁も夕方に会見をし、情報は夜になるかもしれないと話しており、その模様を伝えている。

チリで起こった地震の場合、実際に津波の影響が日本にあるかないかわからないにしても、日本に来るまで24時間ぐらいかかる。それを気象庁が具体的にどのような形で発表するかがわからない段階では、詳細な情報を出しようがない。

今回は東日本大震災の時のような突然来る津波とは違う。かなり前に遠地で地震が発生し、その周辺地域では津波が観測されている。事前に予告できる話なので、気象庁も夕方から日本には来るとすれば朝5時ごろになりそうだとか、深夜3時ごろに判断したいとか、ハワイのデータを見て判断したいということは会見でコメントしており、ニュースでも報道している。津波注意報が発表されるかもしれない時間が夜中だったので、事前の報道をしっかりと伝える必要があるという話は内部でもしており、テレビ、ラジオの各ニュースのたびに伝えた。民放も含め、ニュースの時間には報道していたので、ニュースを見た人は夜中に注意報が出るかもしれないということはわかっていたと思う。

- 正式な情報ではないから、テレビの逆L字スーパーなどで情報を常に出すことは

やってはいけないことなのか。

(NHK側)

気象庁が何時ごろに津波注意報を発表するというスーパーを出す手はあったかもしれない。気象庁がもっと早い時間に注意報を出していれば、放送でもずっとスーパーを出すのだが、そこは気象庁の判断もある。検討したい。

- 危機管理の視点で、今回のチリの津波関連の放送を見たが、NHKは適切な対応をしていたと思う。ハワイの観測点でどのぐらいの津波が観測されるかというところから日本への影響を判断し、それがどの程度かはニュースでかなり報道していた。予測しやすいこともあったし、日本の周辺海域でないこともあり、海外から伝ってくる波を予測する技術というところで今回の気象庁の発表のあり方、NHKの発表のあり方で特に問題がなかったと感じている。津波が来ると人から言われ、その情報をどこから入手すればよいのかというときに頼りにしているNHKでどれほど情報があるのか、欲している時間にその情報を得ることができなかったことから不安が増大したところもあったのかもしれない。たとえばその点は、NHKや気象庁のホームページを見れば情報が載っている。そういう意味で今回のNHKの対応はよかったのではないかと思う。
- 高齢の人でホームページを見る人は少ない。海沿いの町は高齢の人が多く、高齢者が多く見ている局だからこそできることがあるのでないかと思っている。
- 報道番組についてだが、2月の降雪被害については逆L字画面を使い、的確に報道していた。栃木県では140億円ぐらいの大きな被害が出た。ちょうどイチゴのシーズンのピークであり、イチゴの大型ハウスを中心にたいへん大きな被害になった。そういう被害について民放では劇的な部分は報道するが、残念ながら日がたつにつれ、その報道は無くなっていく。そういう点でNHKはしっかりと続けて報道していた。結果としては今回のこれだけの大きな被害に対して、国・県・市から復旧、復興に対し、かなり手厚い支援をしてもらった。しっかりと報道と現実をつまびらかに紹介したことで復旧しなければならないという空気になったのかと思う。被害ばかりが重点的に報道されたが、その中でNHKには被害の比較的少なかった所では毎日収穫作業、出荷作業を続けていることも放送で伝えてもらった。各農家で確かに被害を受けたが、残った施設ではしっかりとイチゴが育ち、収穫し届けていることが伝わったので感謝したい。

○ 4月1日(火)に消費税率が5%から8%に上がった。高齢化によって膨らみ続ける医療、年金、社会保障に使うと政府も言っているようだ。財源がなければ消費税率は8%でも、10%でもやむをえないという気持ちはあるが、消費税率を5%から8%に上げることを国民にお願いしようというときに議員の定数を減らすこととセットだったという記憶がある。しかし、その動きはまったく見えない。それでよいのか、痛みだけを国民に押しつけ、自分たちは何をしているのかという思いがある。必要なものは必要なので、足りなくなれば最終的に税で賄うのはやむをえないと思う。消費税率が5%のうちの駆け込み需要とか、8%になった反動で消費が落ちたとか、そんなことは当たり前のことで、あまり手厚く報道する必要はないのではないかなと思う。たとえば「日曜討論」のような形で各党の代表に集まってもらい、自分たちは身を切っているのかというようなことを報道してほしい。税金がきちんと適切に使われているのかはわからず、あやふやなところがたくさんある。NHKを含めたテレビ、新聞、報道に携わる者としては反骨精神というか、そういう気持ちを常にもってほしい。市井の人間にはどうしてもわからない部分、疑問すらもてない部分もたくさんあると思う。そういうものをじっくり取材してほしい。正しければ正しい、過ちがあれば過ちがあると公表してほしい。消費税率が上がったことはよい機会だし、10%に上がるかもしれないので、そういうものを取材し、国民が納得のいく形になるようにNHKには奮闘してもらいたい。

NHK編成局
番組審議会事務局